

事仕でござります」八卦の面にさう見える。トキニ其許様は丑の年で、牛の寐た程金銀を持つてござる。此度東に當つて金銀の星が顯れまする、是が其許様の年頭に當る、即ち彼金銀の勢で、此女はお手に入る筈ぢやが、爰に一つ障がある。其許様には背中の厭に、疣が一つあらうかの「イヤア、サア、見通しぢやく」サア、なけりやならぬ理ぢや。此疣のある所が悪い。惣體背中に有る疣は背疣というて、只今師走には、或は牛房鯨、何なれかなれ人に物を遣るばかり、錢銀を取られるばかりで、是まで頼んだ事が、一つも埒が明かぬと見え「とんと其通り」「さうあらう。時に又一つ大きな邪魔がある。ハテかはつた物、四角な物ぢやが、坎良震巽りかんがすかん、兌中斷と取つてだ、ほたの兌の卦に當る。人相に取つてはこりや前髪と見えます。彼金星銀星が寄合はうとする中へ、此前髪の眞鍮星が、毎晩夜這星になつて邪魔するといふ卦體」「サア夫がけたいでなりませぬ。どうぞ其前髪を」「此法印が行力で祈り殺して進ませう。まづ縁結の星祭、こりや其許様の御家へ參つて致さにやならぬ」「サア夫が第一頼み申したい」「申さぬ事は聞えぬが、金銀の星を祭るは、同氣相求めるの道理で、金銀の元入が餘程入ります」「サア何ほでも大事ない」「供物は随分大きな鏡餅十二重、跡は法印が受納致す。さて祈禱の間、酒肴で我等を御馳走なされるがよい。かく申せばとて、手

前が喰ひたい飲みたいではござらぬ、即ち夫が星様への御馳走。物をほしがるによつて是星なり。祈禱始に宮の内の福屋で、マアちよつと御神酒上げよかい「旦那、こりやよ、ござりましょ」と、おだてる太鼓神樂所の、鼓片手に糟禰宜が、「山家屋佐四郎様、御獻上の神樂が只今上りま

す。サアお出でなされませ」「是はいかな、糶てて交せてどんちやんと、是もやつぱり今の願。モウ神様を頼むに及ばぬ。コレ神樂の洒手ぢや、貴様も御神酒の相伴さすぞ」「イヤ有難いは。さらば福屋で腹存分、禰宜山伏のくらゐる争ひ。願主様まづお入」と、鼓よりまづ舌つゞみ、打ちつれ茶屋へ勇み行く。小助はそろく小戻りし、手招きすれば最前より、待ちかね山仕の浪人者、鳥居の蔭より又一人、是も手台と顔見合せ、三人いつしよに寄りこぞる。中にも勘六氣をせいで、「シテくだんの物は」「コリヤ聲が高い。あの井の内に仕かけて置いた、此鈴木彌忠太、久松めとは仔細あつて意趣のある中、彼奴めを仕くじらす工面は、小助かうく、合點か」「よし、彌忠太様は勘六と、福屋で飲んでござりませ。前髪めが良るを待つて、手工合首尾ようく」と、耳から耳へ相談さたり、しめて三人別れ行く。人一盛夢の世や、浮名の端の種油、一人娘と寵愛の、お染が思、日に千度、行きつ戻りつ蝶々の、縫の模様を振袖に、包むとすれど娘氣の、迷ふ心を一筋に、座摩の宮居に歩み來る。下女の

お傳が、「申しお染様、宮の内の茶店で、ちとお休みなされませ。私は此處に張番して、彼人が今でも見えたらコレ斯う」と、いへばお染はほよ笑みながら、「神のお庭で勿體ない。差合のない時に、顔を見るのが樂み」と、待つ人よりも待たると身、久松はいきせきと、屋敷の用事そこくくに、足元かろく立歸る。お染は見るより、コレ久松様といはれもせず、「此所にく」と寄添へば、久松も途中の人目、「コレお傳殿、小助殿は見えなんだか」と、いひつゝ邊に氣を付くれば、呑込むお傳が、「申し御寮人様、わたしやあの綱八の芝居が一切見て參じたい」「ホンニそなたは芝居好、敷入でなけりや行かれぬに、けふは幸ひ勝手に往ておぢや、随分緩りつとだんないぞや」「ハイく、そんなら往て參じよ。久松殿もお染様と、どこぞそこらへ敷入さんせ」と、はづすは猫に鯉木の、氣を通り札鼠木戸、是も忠義と行く跡に、契りし中は詞數、いはず取る手を振放し、「申し御寮人様、お前様は追付けえい男お持ちなさるけな。私は下人の事、何とせう、しよ事がない、といて拗強るはやつぱり愚癡。勿體ないお主様が、是までのお志、眞實冥加なう存じます」と、押下れば摺寄つて、「コレ夫はマア何の事、内では人目があるによつて、久松々々と家來あしらひ、様といふ字は口の中で、常住消して居るはいの。せめてこんな所でありと、女房がお染かと、いうてたんのうさしもせず、お前様の御寮人のと、

獻上向な挨拶は、まだわしが氣を疑うてか。そもや見初めし其日から、エ、こんな事何とかやいひたいけれど、人が見るので何にもいはれぬ。どこぞ人の聞かぬ所で、しつほりと咄したい。こつちへおぢや」と手を取れば、「さうぢやてよ茶屋の内もやつぱり人目、どこぞ暫しの隠家」と、覗く八卦のかこひの内、「ヤア誰もないはいの、外から襖は戀の唄、サア此間にちやといの」と、手を引く主従三世相、二世を兼ねたる妹脊鳥、忍び入るこそわりなけれ。神樂の鈴も時移る、ほろ酔機嫌に法印は、とろく目して鳥居前、「エ、きやつも吝いやつぢや。喰はれもせぬ吸物にたつた酒三銚子、ホンニ端た酒飲まうとて、店を明けたは不用心、山伏が物盜まれでは、見て貰ふ所がない。ヤ、何やらぶつくと、此内に人の聲あるは、ハテ怪しや」と暖簾の内、差覗いて驚り仰天、這入れられもせず氣はうはづり、繪馬に上つた一來法師、立ちすくみになつて居る所へ、いきせき走つて下男、「コレく法印様、一つ見て貰ひたい」と、入らんとすれば、「ア、コレ、今内へ這入ると水火木金亂騒ぎ、木火土金するをきかせいやい。八卦なら爰でもつい見てやる、失物か走りか、心中がかつた者なら、奇妙に所を指いて見せるぞ」「イヤそんな物ぢやない、こちの旦那山家屋の佐四郎様が、今朝から今にお歸りなされぬ」「ムムそれか。よいは、此山伏が行力を以て、たつた今こへ天降らして進ぜる、佐四郎さまく」

「チ、法印坊そこにか」と、出てくる佐四郎にすれ違ひ、そつと後の襖から、鳥居の中へ行く二人、戀しいお染と夢にも知らず、「サア〜」一時も早う星祭、是から直に手前が宅へ」「そんなら参ろか。イヤ待つたり、肝心の商賣道具、持参致そ」と圍の内、「ヤア、テモ素早い奴、もう逃げをつた。さては今のが彼前髪であつたな、ようほん代を喰逃に仕をつたな。よいよい、此意趣返はたつた今、お染がお前に躓く様に、祈伏せるは我數珠先。さんけ〜六根大聖南無不動明王〜。なんほうに見つとむなうても、男はれこもち喰はねば立たぬ、身代よしの山家屋で、腥料理喰ひ次第、蒸菓子羊羹責めかけ〜、榮耀のありたけえいさらさ〜、さしものお娘も喰につき、魂の返るは今の中」と、いさんで打連れ歸りける。南の辻に人立し、喧嘩々々と騒ぐ聲、驚き出づる久松お染、下女もとつかは久三の小助、一所に落合ふ床几の上。喧嘩は振物國侍、相手は町人胸ぐら取られ、引立てられてもひるまぬ男、「こりや何とさつしやります」何ととは素町人め、武士の足を泥脚で踏みながら、御免ともぬかさぬ慮外者め」「サアえいわいな、慮外ならあやまる分、マアこを放さんせ。踏んだはおれが脚、踏まれたはこな様が脚、武士ぢや町人ぢやて〜脚に違はあるまい。そんなこつき喰ふ男ぢやない、聞かぬといてどうさある。お太刀ひねくつたとて、滅多に切れるものぢやない。人そばえせずとお侍

どうなと召され」とすり寄る體、「エ、おのれしきぶち放すも刀の穢、どうしてくれう」と傍邊、有合ふ財布眉間へぱつしり、ハット驚く久松を、お染が抱きしめ押ゆる袖、氣をもみ裏の裏へ行く。小助がきつと、「コレ申し、あの包は手前の銀財布、斷もおつしやらず、お侍には似合はぬ仕方」「誠には心せく儘手前の眞相、眞平々々。なむ三寶少々血が付きました。幸の井の元」と、清むる穢は薄けれど、包みし悪事すりかへる、手目を見せじと小助が氣配、覆になつて立縞の、財布手早く「コレ久松、此銀は懐へ。お染様、掛り合になりや悪い。私もお供、サア〜早う」とせり立つる、工の底は白齒のお染、久松早うと手を取つて、せはしい所が結ぶの神、足を早めて立歸る。跡は人たえ宮芝居の、切のめりやすしめやかに、囁く二人が仕濟まし顔、「彌忠太様首尾は」「チ、件の物は手洗鉢の下にある」「うまい〜」と立寄つて、財布取上げ「彌忠太様、今日の働き代はえ」「ソレ金二兩」「エイ眉間に疵まで付けられて、たつた是かいな」「サアよいは、其壹貫五百目、どうで小助にも口錢やらにや聽きをるまい」「そんならふてうはどやでせう、ぐれのこぬ内サアごんせ」と、銀懐へ取納め、連でない顔跡先に、のしおし歩む鳥居の蔭、「盜賊待て」と聲かくる。びつくりしながら騒がぬ顔、「盜賊とは誰が事」「おのれらが事さ」「エ、何を證據に盜賊とは」「ヤアぬかすまい、今日此方の屋敷にて、油屋の下

人久松に渡せし銀子、子供上りの若いやつ、何とも心元なく、跡より来り窺ひ見るに、おのれ等が騙事。かやうの吟味仕れと、お金役より付け置かれた、岡村金右衛門といふ者だはい。サアおのれ等引つくとつて屋敷へ連行く、腕を廻せ」と詰めかけられ、「ハテさう見られたら是非がない。成程其銀は騙りましたが、此お侍は通り合して連になつたばかり、何にも御存じないお方、私一人繩かけて、サアお引きなされませ。サア」と油断を見すまし彌忠太が、差したる刀、抜打に、肩先ずつばと金右衛門、同じく抜いて切り結ぶ、兩方劣らぬ牛角の早業。彌忠太は八方に眼を配つて、「ソレ、そこをと」、聲の助太刀ちからにて、強氣の勘六まくり切り、なぐる刀を受損じ、たじろく所を付け入つて、兩脚薙がれよろしく、うんとにつけに倒れ伏す。勘六は一息ほつと、人や見ぬかと思廻す彌忠太、「勘六どうした」「氣遣ひさんすな、もうとまつた」「ホイ、シテ此捌きはどうせう」「ハテどうというて高ぶけり」「チ、身どもとても此處には居られぬ。ドレ其銀を此方へ」「彌忠太様、お前此銀取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍をばらしたからは、どうでおりや遁れぬ命、とても助からぬからは、何もかも勘六が引受けて、こな様の名は出さぬ。づきが廻らぬ内早往かんせく」「尤、エ、あつばれ男ぢや、縁あらば重ねて」「細言いはすと早うく」「チ、さらば」と別る跡、納めた勘六そろく

と、死骸の傍へ立寄つて、「首尾よう行たぞ」「チ、もうよごんすか」と、むつくと起きる體は血まぶれ。「勘六殿、今のでよかつたか」「よいともく、物した物を又こつちへ、是も貴様の切られ様が上手なから、何ほ切つても疵痛せぬ、紀州の源藏大儀でござんした」「チ、サそこらをさす物かいやい」「シタガ餘り拍子にかよつて、よつ程の疵、いたみやせぬか」「何のいやい、もう最前吉野丸付け置いた。夫を知らずに今の侍めが、逃けていにつたさま。コリヤ此位の疵は、たつた一付で直るはいやい。はなたれめが」「それ酒代の一兩」「忝い、サア、是からこちらの商賣、紀州源藏様お歸りぢや」「ア、コリヤ立前所ぢやない。アレもう芝居が果てる、人の見ぬ間に早う行け」チヨン、幕際綱八の、切狂言の果太鼓、音に紛れて 三重。

野崎村の段

年の内に春を迎へて初梅の、花も時しる野崎村、久作といふ小百姓、せはしき中に女房は、萬事限りの膈病、娘おみつが介抱も、心一ぱい二親に、孝行白の石よりも、堅い行儀の爪はづれ、在所に惜しき育かや。冬編笠も燻り三味線、つほもすまたの彈語、「御評判の繁太夫ぶし、本は上下綴本で六文、お夏清十郎の道行々々。あづまからけのかいしよなき、こんな形でも五里

十里「通らしやれ。母様の煩で三味線も耳へは入らぬ、手の隙がない通つて下され」清十郎涙ぐみ、お夏が手を取り顔打ながめ、同じ戀とはいひながら、お主の娘を連れて退く、是より上の罪もなし「オ、聞きとむない、通りやく」といふ聲に、久作は納戸を出で、「大阪ではやる繁太夫ぶし、そなたにも聞かしたけれど、病人の氣に構はう。本など讀んで氣晴し仕や」と、義理ある中も子を思ふ、恵は厚き古合羽の、煙草入からこつてく、錢取出して、「ドレ一冊買ひませう。ナンヂヤ、お夏清十郎、道行戀の煙草鞋。コレ見や、此お夏は手代と念頃して、姫路を駈落する道行。同じ娘でも世は様々、纏三里の大坂へ、芝居一つ見にも行かず、今度の大病から目の見えぬばよの介抱、達者なおれが喰物まで、其様に氣を付けてたもる孝行娘、若し勞れでも出ようかと、おりや夫を案じるはいなう」「ナ勿體ない事言はしやんす、煩うて居さんす母様より、健なお前のお心苦勞、せめてもの手助けと思つたばかり、其様な事苦にやんで、煩でも出ようかと、私や夫が悲しうござんす」「ハテわつてもなり、したが百日と限のあるばよが大病、案じるも無理ではないが、立庵殿の加減の藥で、今朝から末の椀蓋におも湯が二はい通つた。見かけに奇らぬ巧者な醫者殿。ヤ幸今日は日和もよし、久松の親方殿へ歳暮の禮に往て來る程に、随分ばよに氣をつきや」と、いひつと脚絆草鞋がけ、紐引きしむ

れば、「ナ、父様とした事が、此短い日にモウ晝過、明日の事になさんせいで」「何のいやい。年こそ寄つたれ此足に覺えがある、一時三里犬走り、日暮までには戻つてくる。歳暮の祝儀はコレコレ此蘘葱、山の芋は鱸になる、久松の年が明いたらば、われは又お内儀になる。夫樂みによう留守せい。ドリヤ往て來う」と身拵へ、蘘葱肩にヤえいとこな、表へ出でしが立ちどまり、「取分け今年は早う咲いた此梅、何より角よりよい土産」と、春待顔に咲く花を、手折つて苞に一枝を、添へてひよかく、野崎村、跡に見なして出でて行く。影見送りて久松が、事のみ思ひ兎や角と、胸に一はい半分の水、水量り込む樂鍋、一へぎ入れる牛姜より、辛い面つき久三の小助、久松引連れ入口から、「久作内に居やるか」と、づつと這入ればおみつは嬉しく、「オ、久松様、ようマア戻つて下さんした。定めてあなたを送りのお方、お茶よ煙草」と嬉しさに、立つたり居たり氣もそぞろ。「エ、やかましいわい。うそ穢い在所の茶飲みにはこぬ。コリヤ追従せずと聞いて置けよ。此久松めが親方の銀壹貫五百目お山狂にちよるまかしたによつて、今日連れて來たはな。久作と三つがなわで詮議するのぢや、親父を出せ、出せくく」と辰巳上。身の誤に久松が、差俯いて詞さへ、ないには若しやと思ひながら、「御腹立はお道理ながら、何のマア久松様に限つて、よもやさうした事はあるまい、定めて是は何その間違、覺がなれば

ないといふ、ツイ言譯をして下さんせいな」「ハ、べるは啗るは。コリヤヤイ、天窓こそ前髪なれ、其素早さ、傍輩には辭宜もなしに、取つて置きのお娘まで、此跡はいはずにこます、裾貧乏のはつた行過丁稚め、首綱のかゝる事、言譯に如才があるかい。小倉の屋敷へ請取りに往た爲替の銀、御役人から改めて渡つたは正眞、内へ戻つて明けた所がわやひんの胸脈、道の間ですりかへた品玉の大夫、早咲久松でございます、ハリトウ。白眼剥くは無念なか、無念なら銀立てるか、有るまいがな。サア久作は何所に居る、出さらずば引出さう」と、駈入る袂を久松引きとめ、「成程、銀をすりかへられたは皆私が無調法、身の明りの立つまでは、在所へ行くと後室様の結構な御了簡、それをそなたが」「ヤイ、何吐すぞい。そりやわれが勝手了簡の聞損ひ、おれには此詮議仕ぬいてこいと、内證で後家御の言付、ぢやによつてめつきしやつきするが何ぢや、ひんこめ出され」と大聲を、おみつが押へて、「コレ申し、御尤でございますけれど、奥の病人に好事がましう聞かしましては病氣の障、もそつと靜に」「イヤ高ういふのぢや。是程わめくに聞耳潰すは、親仁もぐるの仕事ぢやな」「イエ父様はあなたの方へ、歳暮の禮に往かれました。どうして道が違つた事、若持病やなど發りはせぬか」と、外も氣がかり病架への聞えも氣づかひ、久松が身の言譯に差込んだ、癪を覺えるばかりなり。弱み

へ付込む悪者根性、「大阪へ往たが定なら、否ながら道で逢ふ筈、そんなてれんぬかすなやい。ドレもう家捜と出かけざるまい、邪魔ひらくな」とおみつを引退け、取付く久松面倒なと、踏むやら蹴るやら無法の打擲、詮方もなき折からに、道引返しにつきせき、戻る久作駈け入つて、小助を引退け突飛し、「留主の間へ来てわつばさつば、様子に寄つて了簡せぬぞ」「チよ戻つて下さんした。最前から久松様をな」「チ、よいてや、久作が戻るからは、娘もじつと落付け」と、納める程猶業腹沸し、「大まいの銀引負した其はりめ、詮議に來た小助は親方の代、夫を又わりや何で投けたのぢや」「是は迷惑な、ひばり骨見る様な手で、血氣なこなた投けたのではない、怪我のはすみ、出端の曲途で道が違つて、留守の間へ大阪から息子が來たぞやと、若い者どもの知らしてくれたで、行き戻り五六里を助かつた。徳安堤引返して戻つたが、そんなら何か、其引負で久松は戻つたのか。ア、夫聞いてマア落付いた。マア、何角は指置いて、傍輩衆の御世話であらうと、蔭ながら言うてばつかり居ますはいの。寒い時分によつて連立つて來て下さつたなう。ソレおみつよ、茶など汲まんかいやい」「コリヤ納めなく。わりや夢に見た事もあるまいが、壹貫五百目といふ銀高、子の科は親にかゝる、銀立てるか、但しは又願はうか、二つ一つの返答聞こはい」「ハテよいわいの。其様に息せいはるは大きな毒、兎角人間

は心長う持つのが薬ぢや。ヤ其薬で思ひ出した、土産にせうと思つた此山の芋をとろよにして、出来合の麦飯を進ぜうかい」「置けやい。見せかけばかりの正直倒し、麦飯の、とろよのと、ぬらくらとは吐させぬ、あんだらくさい」と蹴ちらす薬包、破れてぐわらりと出る丁銀。「ソレ久松が引負の銀、渡したならば言分あるまい、とつとと持つていなしやれ」と、聞いておみつも久松も、思ひがけなき驚に、小助もぎよつと仕ながらも、包改め、「こりや正真ぢや、テモ出にくい所からよう出たな。吹きや飛ぶ様な内のさまで、泥龜三つで一貫五百目、請取るからは言分ないわい」「ア、そつちに言分がなうても、こつちにくつと言分がある、と言ふも古いものぢや。是まで御世話になつた親方様、御恩こそあれ恨はなけれど、人に欺され取られた銀、引負の、悪遣ひのと、名を付けて貰うては世間が濟まぬ、というて無理隙取るではない、親が暫く預かつて置く程に、此通いうたがよい。モウ二十年おれが若いと、わごれにはぐつと馳走もあれど、入らざる殺生。サア、早う往んだがよかろ」と、言はれてどうやら底氣味悪く、「銀の出入さへ濟んで仕舞や、外の事はお構ない。さらばお暇申さう」と、打違取出し捻込み押込み、「ハ、ア命冥加な一貫五百目、内へいんで出した所が、墓になつて居やせまいか」「ハテ仇口をきかずとも、足元の明い中」「アいなぢや。銀こそは主の物、何の其、おれがでにおれ

がかたけて、おれが足でおれが歩行いて、おれが體がいぬるに、ぐつとも言分ない筈」と、へらす口してとつば門口柱で天窓、アいたしこ助は足早に、大阪の方へ立歸る。おみつは親の氣を兼ねて、いらへ無ければ久松すり寄り、「此身の手詰は遅れても、此お暮で餘程の銀、跡でお前の御難儀には」「ハテおれぢやとて、相應のかくまひはせまいものか、始末したためたあの銀は、黒谷の方丈へ上げる冥加銀、氣遣仕やんな、まんざらあればかりでもないわいの。改めていふではなけれど、末はわが身とひとつにする約束で、此おみつはばとが連子、あれも否でもないさうなり、折もあらば親方殿へ、暇の事を願はうと思つて居たが、是がほんのもつけ重寶、もう大阪へいなしはせぬ。早却なれど日柄もよし、今日祝言の盃さすぞ。何とおみつよ嬉しいかくく。我等は又天窓を丸め、参り下向に打かよらうと、頼み寺へ願うて、袈裟も衣もちやんと請けて置いたてや。幸ひ餅は搗いてあり、酒も組重も正月前で用意はしてある。サアサア早う拵らや」と、藪から棒をつまかけた、親の詞に吐胸の久松、知らぬ娘は嬉しいやら、又恥づかしき殿まうけ、顔は上氣の茜裏、袂くはへるおほこさを、見るに付けても今更に、否應ならぬ親の前、急に思案も出口の口の、壁にいの字をかき一重、裏の病染に咳嗽く聲、「ホニニこちらの事に取込んで、定めて婆が淋しからう。久しぶりて久松にも逢はして、此事を聞か

したら薬より利目がよい。ハテ俯いてばかり居すと、おみつ、鱧も刻んでおけ。久松おぢや」と先に立ち、悦びいさむ親の氣を、知つて破らぬ間合紙、襖引立て入りにけり。跡に娘は氣もいそぐ、「日頃の願が叶うたも、天神様や觀音様、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結うて置かうもの、鐵漿の付様挨拶も、どういうて能かるやら」覺束なます拵も、祝ふ大根の友白髪、末ながたなと氣もいさみ、手元も輕うちよきくく、切つても切れぬ戀衣や、本の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、跡をしたうて野崎村、堤傳に漸と、梅を目當に軒のつま、供のおよしが聲高に、「申し御寮人様、かの人に逢はうばかり、寒い時分の野崎參、今船の上り場で、教へてもらうた目じるしの此梅、大かた此所でござりませうぞえ」「チ、もそつと靜にいやいなう。久松に逢ひたさに、來事は來ても在所の事、目立つては氣の毒。そなたは船へ、早うく」と、追ひやりく、立寄りながら越えかぬる、戀の峠の敷居高く、「物申、お頼み申ませう」と、いふもこはく、暖簾越、「百姓の内へ改つた、用があるなら這入らしやんせ」「ハイ、率爾ながら久作様は内方でござんすかえ。左様なら大阪から、久松といふ人が、今日戻つて見えた筈、ちよつと逢はして下さんせ」と、いふ詞つき形かたち、常々聞いた油屋の、さてはお染と悟氣の初物、胸はもやくかき交鱧、まな板押しやり戸口に

立寄り、「見れば見る程エ、美しい。あた可愛らしい其顔で、久松様に逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ。阿呆らしい」と腹立聲。心付かねば、「ホンニまあ、何ぞ土産と思つても急な事。コレく女子衆、さもしけれども是なり」と、夢にも夫としら玉か、露を袷紗に包の儘、差出せば、「こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様々々と言はれても、心が至らぬ、置かしやんせ。在所の女と侮つてか、欲しくばお前にやるはいな」と、やら腹立に門口へ、ほればほどけてばらくくと、草に露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した、中へつかく親子連、出てくる久作、「どうぢや、鱧は出來たであらう。さて祝言の事婆が聞いてきつい悦。ぢやが年は寄るまいもの、さつきのやつさもつさで、取上したか頭痛もする、いかう肩がつかへて來た。ア、橙の数は争はれぬものぢやはいの」左様ならそろく私か採んで上げませうか」「ソリヤ久松忝い。老いては子に隨へぢや、孝行にかたみ恨のない様に、おみつよ、三里をすゑてくれ」「アイ、そんなら風の來ぬ様に」と、何がな表へ當り眼、門の戸びつしやりさし艾、燃ゆる思は娘氣の、細き線香に立つ煙、「サア、親子ぢやとて遠慮はない、艾も痒癖も大摑にやつてくれ」「アイ、きつう痞へてござりますぞえ」「さうであらう。次手に七九をやつてたも。オットこたへるぞく」「サア居ゑますぞえ」「アツ、ア

ツ、えらいぞく。あすが日死なうと、火葬は止にして貰ひませう。丈夫に見えてももう古家、屋根もねだもこりや一時に割普請ぢや。アツ、、、、「チ、父様の仰山な、皮切は仕舞でござんす。ホンニ風が當ると思や、誰ぢや表を明けたさうな、しめて參じよ」と立つを引とめ、「ハテよいはいの、晝中に鬱としい。ナウ久松々々々、コリヤ久松、餘所見ばかり仕て居すと、しかくと採まぬかいの」「サア餘所見はせぬけれど、エ、覗くが悪い。折が悪い、悪いく、悪い」と目顔の仕かた。「ヤ悪いの、覗くのと、足に灸こそするてるれ、何所もおみつは覗きはせぬ」「サア、アノ悪いと言ひましたは、慥今日に瘟痘日、夫に灸は悪い、悪いく」というたのでござります。「エ、愚痴な事を。此様に達者なは、ちよこく灸する、作りをする、そこで久作、アツ、、、エ、何ぢやはい、わがみ達も、達者な様に灸でもするるのが、おいらへの孝行ぢやぞや」「チさうでござんすとも、久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり、呼出したり、悪てらしい、アノ病ひづらが這入らぬ様に、敷の上へ大きうしてするて置きたい」「コレおみつ殿、振袖の、持病のと、色々の耳こすり、はしたない事聞てはるぬぞや」「ホ、、、變つた事がお氣に障つた」「チ、障らいぢや」「こりやをかしい、其譯聞くぞえ」「いふぞや」と、我を忘れて、諍を、外に聞く身の氣の毒さ、振の肌著に玉の汗。久作も持てあつかひ、「ア

アコリヤ肩も足もひりくするがなく。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越かい。灸業のかはり、喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜めく」「イエく構うて下さんすな、今の様な愛想づかしも、病ひづらめがいはしくつさる」「何をいふやら、モウく、兩方ともおれが貰ひぢや。ヨ、中直が直に取結の盃、髪も結うたり、鐵漿もつけたり、湯もつかうて花嫁御を、コリヤ作つて置け」と打笑ひ、無理に納戸へ連れて行く。其間遅しと駈入るお染、「逢ひたかつた」と久松に、縋りつけば、「ア、コレ聲が高うござります。思ひがけない此所へはどうして、譯を聞かしてく」と、問はれて漸顔を上げ、「譯はそつちに覺えがあらう。私ガ事は思ひきり、山家屋へ嫁入せいと、残しておきやつたコレ此文、そなたは思ひ切る氣でも、私や何ほでも得切らぬ、餘り逢ひたさ懐かしさ、勿體ない事ながら、觀音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ、二人一所に添はうなら、飯も炊かうし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞えぬわいの、胴欲」と、恨のたけをいう禪の、振の袂に北時雨、晴間は更になかりけり。曇りがちな久松も、背撫でさすり聲密め、「其お恨は聞えてあれど、十年から今日が日まで、船車にも積まれぬ御恩、仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐ろしければ、委細は文に残した通り、山家屋へござ

るのが、母御へ孝行家の爲、よう得心をなされや」と、いへど答もなみだ聲、「否ぢやく私
 や否ぢや。今となつてさう言やるは、是までわしに隠しやつた、許嫁の娘御と、女夫になりた
 い心ぢやの。是非山家屋へ行けならば、覺悟は疾うから極めて居る」と、用意の剃刀取直せば、
 夫は短氣と久松が、止めてもとまらず、「イヤ〜〜、そなたに別れ片時も、何樂しみに生き
 て居よう、止めずと殺して〜」と、思ひ詰めたる其風情。「そんなら是程申しても、御聞分は
 ござりませぬか」「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなう」「ハア達て申せ
 ば主殺し、命にかへてそれ程までに」「思ふが無理か、女房ぢやもの」「叶はぬ時は私も一所
 に、お染様」「久松」と、互に手に手取りかはす、悪縁深き契かや。始終後に立聞親、「其思
 案悪からう」と、言はれてはつと久松お染、騒ぐを押へて、「ア、大事ない〜、マア〜
 下に居や。因縁とは言ひながら、和泉の國石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、
 聊の事で家が潰れてから、わがみの乳母はおれが妹、其縁で十の年まで育て上げた此久作は
 後の親。草深い在所に置こより、知慧付けの爲油屋へ丁稚奉公、夫程までに成人して、商の
 道讀書まで、人並になつたは、コリヤ親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは、是見や、先に買
 たお夏清十郎の道行本、嫁入の極つてある主の娘をそよなかすとは、道知らずめ、人で無しめ、

サこりや清十郎が咄ぢやわいの。疾うから異見も仕たかつたけれど、ちやうど今の様な事があ
 らうかと、夫が悲しさ、一日延び二日延ばしする間、降つて沸いた銀のもめ事。是言立てに隙を
 貫ひ、分けて置くのが上分別と思ふから、引負の銀の工面、どの様に氣ばつても、高の知れた
 水香百姓、僅の田地著類著そけ、おみつめが櫛笄まで賣代なし、漸拵へたさつきの銀。な
 さぬ中でも親子といふ名があるからは、肉心分けた子も同然、可愛うなうて何とせう。コレお
 染様、ではない、此本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるは、嬉しい様で恨めしいわい
 の。聞いての通りおみつめと、女夫にするを樂みに、病苦をこたへて居るアノ婆様に、今の様
 な事聞かしたら、何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には、そこの義理も絲瓢の皮
 と投げやつて、こな様といつまでも、添遂けられるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢ
 やはい。エ、アノ久松めは、辛抱した女房嫌うて、身上の能い油屋の聲になつたは、コレ榮耀
 がしたさぢや皆欲ぢや、人の皮著た畜生めと、在所は勿論、大阪中に指さよれ、人交はりがな
 りませうかいの。コレ〜、爰の道理を聞分けて、思ひ切つて下され。申し、コレ拜みま
 すはいの、拜みますはいの。是程いうても聞入れず、親御達が満足に産付けて置かしやつた其體
 を切りさいてあさましう死ぬるのが、女の道か心中か。サ久松も其通り、不義密夫の悪名受け、

實親の名を汚すばかりか、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕舞ふのが、侍の子か人間か。返事次第で思案がある」と、眞實眞身の剛異見、骨身にこたへて久松お染、何と返事も無いじやくり。「是程いうても返答の無いは、コリヤ二人ながら不得心ぢやの」「ア、勿體ない、實の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦を懸けるも、私が不所存から」「イヤ、あなた科ではない、皆此身の徒から、親にも身にもかへまいと、思ひ詰めても世の中の、義理にはどうもかへられぬ。成程思ひ切りませう」「チ、よう御合點なされました、私もふつより思ひ切り、おみつと祝言致しまする」「そんならそなたも」「おまへも」と、互に目と目にしらせ合ふ、心の覺悟はしらがの親仁、「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」「何の嘘を申しませう」「娘御も今の詞に、微塵も違はござりませぬか」「久松の事は是限、私や嫁入をするはいの」「チ、出来たく。むくつけな親仁めと、腹も立てずよう聞入れて下さりました。晩の間の知れぬ婆が命、息のある中祝言が濟んだと、聞かして下さるが、大きな善根。善は急げぢや、今ことで盃さそ。おみつ、おみつ」と呼立つる、聲聞えてや病架より、母は漸探り出で、「親仁殿、久松もそこにか。待ちに待つた娘の祝言、嬉しうて嬉しうて、此間にならない氣色のよさ。大煩の上目まで潰れた因果人、佛様のお迎を待兼ねたに、難面

い命があつたりやこそ悦ぶ聲を聞くといふも、孝行な久松が蔭、ふつよかな在所生、心には入るまいけれど、末の面倒見てくだされ、頼みまする」といふ中も、痰火は胸にせき上せば、「エ、此寒いのに寢所に、やつぱり居たがよござります、冷れば悪い」と蒲團の上、抱きかゝへて久松が、介抱如才納戸より、親子の中も丸盆に、乗せた盃銚子鍋、運ぶ久作、「コレお婆、やつぱり寢ては居やらいで。したが島臺のない代、世話事の尉と姥も新しい。目の見えぬは目出度い秀句ぢや、ハ、ハ、ハ、エ、目出たい次手に此嫁は何所に居るぞい。おみつ」と尻輕に、立つて一間を差覗き、「ハテ出ぐすみをして居るは。夫では果てぬ」と手を取つて、「サア、ママア嫁の座へ直つたりく。エ、トキニ一家一門著の儘の祝言に、改まつた縮帽子、うつとしからう、取つて遣る」と、脱すはすみに筭も、ぬけて惜しけもなけ島田、根よりふつつと切髪を見、見るに驚く久松お染、久作呆れて「こりやどうぢや」と、いふ口おさへて、「コレ申しとよ様もおふたり様も、何にもいうて下さるすな。最前から何事も、残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理にせまつた表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟でござんしよがな。サ、死ぬる覺悟で居やしやんす母様の大病、どうぞ命が取りとめたさ、私やもう頓と思ひ切つた。ナ、切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」と兩肌を、脱いだ下著は白無垢の、

首にかけたる五條袈裟、思ひ切つたる目の中に、浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更何と詞さへ、涙呑込み呑込んで、こたゆるつらさ久松お染、久作も手を合せ、「何にも言はぬ、此通りぢやくく。エ、女夫にしたいばつかりに、そこら邊に心もつかず、苔の花を散らして退けたは、皆おれが鈍ながら、赦してくれ」も口の内、聞え憚る忍び泣。「ア、冥加ない事おつしやります、所詮望は叶ふまいと、思ひの外祝言の、盃する様になつて、嬉しかつたはたつた半時、無理にわたしが添はうとすれば、死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」「おみつの何をいやるやら、女夫になりやるを此母も、悦びこそすれ何の死の。ナウ親仁殿」「ソヂャワイノ、とても此世はない縁でも、せめて未来は、ア、イヤ、未来までも變らぬといふ、盃さそ」と立上り、口に唱名ぶつくと、佛壇開けて取出す、花瓶の松に鶴龜も、あの世を契る心の島臺。「サアく、斯うしてなりと盃さすのがせめてもの心ゆかし。エ、言ひたい事だらけぢやくけれど、此やうな座敷には、たべ付けぬ此仁、三々くどうは言はぬが花嫁、一つ飲んで久松へ。ア、目出たいく、婆も嘸かし嬉しかる」「チ、嬉しい段かいの、一世一度の娘の曠、定めて髪も美しく出来たである。さき筭に結やつたか」「イエ」「そんなら兩輪か」「チ、兩輪ともく、思ひがけなうすつぱりと、アいやさつぱりと能う出来たはいの」「チ、親父

殿の言はしやる通り、自慢ぢやないが、髪は大てい上手ぢやござらぬ。ホンニ前方大阪行の土産に貰やつた薄の簪、けふの曠に差しやつたかや。著物は取つて置の花色、加賀の裾模様それか」「アイ」「それ著て居やるか」「アイナ」「チ、わがみにはよう似合ふぞいの。ならう事なら鐵漿付けて、顔直しやつたおとなしさを、たつた一目見て死んだら、善光寺様の、御印文にも勝つて、未来は極樂往生。ホ、ホ、ホ、わしとした事が、目出度い中で忌まはしいと、久松必ず氣にかけて、たもんなやいの」と、子に迷ふ、暗き盲目に夫ぞとも、知らず悦ぶ母親の、心を察し誰々も、泣聲せじとくひしる、四人の涙、八つの袖、榎並八ヶの落し水、膝の堤や越えぬらん。見聞くつらさに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀、なむあみだ佛と自害の體、久作あわて押しとどめ、「コレ娘御、何が不足で死ぬるのぢや」と、聞き間違うて娘ごと、母は驚き、「コレおみつ、待つてく」と這寄つて、探る手先に五條袈裟、「ヤア此袈裟といひ此つむり、どうして髪を切つたのぢや、譯を聞かしてく」と、急げばせく程せきのほし、病苦に惱む母親を、見るに娘は猶悲しく、「コレ母様、こらへて下さんせ、添ふに添はれぬ品になり、私や尼になつたはいな」「ヤアくくく、そんならさつきにから、母が氣を休めう偽」「チ、来世の縁を結ぶ盃、此世の縁は切れてあるはいの」「ハア」「チ、尤ぢやくく。そなたは見えぬがい

つそまし、傍でまじく見て居る心、推量してたもいの」と、いふ聲咽に詰らせば、「サア〜
 サア、其悲しみをかけるのも、此お染から起つた事、死ぬるがせめて身の言譯」「イエ〜、死な
 ねばならぬ此久松、わしから先へ」と断寄るを、久作剃刀引つたくり、「是程いうても聞入れず、
 是非死にたくばおれから先へ、物の見事に死んで見せうか」「爺様が死なしやんすりや、私も生
 きては居ませぬぞえ」「チ、娘 出かしやつた。むさい在所に育つても、貞女の道を辨へて、よ
 う尼になりやつたなう。そこにござるが噂に聞いたお染様か、お前様や久松を殺しとむないば
 つかりに、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出かしたといふ心の中、思ひやりがあるな
 らば、なぜ存らへては下されぬ。折角娘が志、無足にするとは胸欲」と、堪へし涙一時に、
 わつとばかりに取亂せば、「チ、道理ぢやく〜、サア〜、どうあつても死にたくば、婆も娘も
 おれも死ぬる、三人ながら見殺す氣か」「サア夫は」「思ひとまつて下さるか、但し死なうか」
 「サア〜」と三方が、義理と情と恩愛の、しめ木にかよる久松お染、死ぬる事さへ叶はぬ
 は、いかなる過去の報ぞと、前後正體泣倒れ、咽返るこそ道理なれ。久作涙 押拭ひ、「どうや
 らかうやら合點が行たさうな。嗚ぞ母御様が案じてござらう。大事の娘御慥な者に」「イヤそ
 れには及びませぬ、母が慥に請取りました」と、言ひつゝ這入れば、「ヤア母様」ハアはつとば

かりに詞なく差俯けば、「コレ〜」お染、野崎參しやつたと、聞いて餘り氣遣さ、ア、イヤ、氣
 慰によからうと、跡追うて来て何事も残らず聞いた。夫婦の衆の深切、おみつ女郎の志、
 最前からあの表で、私や拜んでばかり居ましたわいなう。サア觀音様の御利生で、怪我過のな
 かつた嬉しさ、是から直に御禮參。ホンニ是はさもしい物なれど、御病人への見舞の印、麓末
 ながら」と詞數、言はず出過ぎぬ杉折を、供の男が差置けば、「マア〜冥加もない御見舞、戴
 きまする」と取上ぐる、手元はづれて取落せば、中よりくわらりと以前の銀。「ヤアさつきに
 渡した此銀を」「チ、表向で請取つたりや事は濟む、改めて尼御へ布施、せめて娘が冥加ぢやは
 いなう。言譯が立つからは久松も元の通り、戻つて目出たう正月しや。取込の中長居も不遠
 慮、娘もおぢや」と手を引いて、表へ出づれば久作も、門送して、「是はマア〜何とお禮を申
 ませう。お辭宜致すも却て無様、せめてものお土産に、折つて置いた此早咲、めでたい春を
 まつ竹梅と、お家も榮え蓬萊の飴物、幾久松が御奉公、大事に勤めて此御恩、忘れぬ證」と差
 出せば、「チ、心ありけな此早咲、譬へていへば雨露の、恵を請けぬ室咲は、萎もも早し香も薄
 い、盛の春を待てといふ、二人への良い教訓。殊更内に口さがない者もあれば、何角に遠慮せ
 ねばならぬ。幸ひわしが乗つて來たあの竹輿で、コレ久松、そなたは堤、お染は船、別れ〜に

往ぬるのが、世上の補ひ心の遠慮「左様でござりまするとも、お志ぢや、乗つて往にや」
 「娘は船へ」と親々の、詞に否も言兼ぬる、鴛鴦の片羽の片々に、別れて二人は乗移れば、「そ
 んなら久松もう行きやるか。来る正月の藪入を、母も必ず待つて居る」「兄様お健で、お染様、
 もうおさらば」と、詞まで早改まるおみつ尼、哀を餘所にみなれ棹、「船にも積まれぬお主の御
 恩、親の惠の冥加ない。取わけておみつ殿、斯うなりくだるも前の世の、定り事と諦めて、お
 年寄れた親達らの、介抱頼む」と言ひさして、泣音伏籠の面ふせ。船の中にも聲上げて、「よしな
 いわし故おみつ様の、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ」「ア、わつけもないお染様、
 浮世離れた尼ぢやもの、そんな心を勿體ない、短氣起して下さんすな」首母「ア、娘が言ふ
 通、死んで花實は咲かぬ梅、一本花にならぬ様に、目出たい盛を見せてくれ」久作「随分達者で」
 久松「ハイ、お前も御無事で」久作「お袋様もお娘御も、おさらば」母「さらば」さらばくも
 遠ざかる、船と堤は隔れど、縁を引綱一筋に、思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせ杭、
 竹輿に比翼を引きわくる、心々ぞ三重世なりけり。

長町の段

鬼は外福は内、打納めたる日暮から、晝を欺く長町の、夜店賣物家々の、春を請取る賃づき屋、
 賑ふ白取杵の音、とん／＼疾うからせつきにくる、下女が丸顔とり粉ぬる、鏡の大小子持鼻、
 分相應の年始め、實に神國のしるしなり。忙しい中で油屋の、小助は肩に風呂敷包、ぶらく
 来る餅屋の門、「ヤア勘六此所にか。今日は年越だ、一日の休み所を透かさず、賃搦にまで雇は
 れるとは、きつい精の出し様ぢやな」「イヤモ是もせう事なしぢやはいの、何が寡なり宿はな
 し、年中の飯米は饅飩か餅か、五文取の代五六百、此雇賃で帳消さすのぢやが、貴様の世話で
 そちの内へ、絞に雇はれて行くにつけ、いつぞやの座摩での仕事、久松めがじろくと、おれ
 の顔を眺めをると、どうやら氣味が悪いわい」「ハテさて日頃に似合はぬ正直な事いふわい。貴
 様を絞に入れて置くのも、久松を目論にかけてほい出す仕事の種油。あすは大晦日、仕舞仕事
 ぢや、朝から来てたも。今夜は樋の子でも抱いて寝る晩、そこで我等も隙貰うて、是から色の
 所へ行くぢや」「ア、さうかして月代もすつぱり」「ア、こりや障つてくれな、たつた今床で結
 立ちや」「ム、それに又其風呂敷は何ぢやぞい」「是か、こりや立てに行く大盡衣裳ぢや。内か
 らは著て出られぬ故こよまで小出し、羽織は即此隣の手小屋に誂へて置いた。ヤコレ、此間の
 茶縮緬仕立てであるかな。ヤ何ぢや、もう追付出来ませ、エ、遅い。今夜色に見せに行く

のぢや。こよからすぐに著かへて行き、何でも今夜はゑら立てぢや。勘六、貴様も辨慶に連れ
て行く、其代おれを旦那あしらひにしてたも。コレ必ず久三といふまいぞ」と、太平樂の下稽
古、隣へ入れば立替る、季もあら玉や往來の、足も春めく祇園道、主持つ身には年徳の、惠方
参もそこくに、せはしう戻る久松が、摺違うたる挑燈の、印に目早く見返る女、「申し、
お若いの」「ハイどなたでござります」。「イヤ率爾な事ぢやが若しお前は」と、言ひつゝ燈に顔
見合せ。「久松様か」「ヤア乳母のお庄。是は」とばつたり小挑燈。「オ、危い、灯を消さずと、と
つくりと久し振の顔見ませう、半元服さしやつてから、お果てなされた丈太夫様にとんと其儘、
オ、きつとした好い殿ぶりやの。此間の文定めて見やしやんしたである、乳母が日頃の念願叶
ひ、今度殿様におめでたで、多くの科人も御赦免なさると折柄、一つの功さへあるならば、太丈
夫が悴久松、利泉の本國へ歸参さするは此時、其功の立て様は、先達て紛失の吉光の守刀、
即ち此度のお目出度に、正月三日鎧開にお飭りなさると、それまでに其刀を詮議して差上げ
なば、跡目相續相違あらじと、御家老中の仰渡され、まだ年もあるけれど、親方様へ暇の願
聞届があつたかまだか。マア年越に健な顔見て、嬉しうござる」と餘念なき、眞身の詞に久松
は、今更國へ往なれぬ譯明けていはれず、「夫はマア嬉しいが、師走の内も今日あすになつて、

餘りせはしい急な出世。さうして其吉光の刀は手に入つたかや」「さればいな、大阪谷町の質屋
にあると聞いた故、尋ねに往たれば、其質は半年前に流したといふ。彼の刀の失せた折から
お國を出奔した鈴木彌忠太、こいつが盗んで立退いたは知れてある、其質の置主の名を尋ねて
も言はぬからは、此質屋も相對と思はると」「フウ何といやる、谷町の質屋とは、若し山家屋
とは言はぬか」「ヲ、それ、其山家屋佐四郎、彌忠太は此長町に居るけな。慥な手懸ある
からは、必ず氣遣さしやんすな。まちつとの所ぢや、煩ふまいぞ、コレ和子。オ、マア私とし
た事が、やつぱりほん様の様に、追付け千五百石の若旦那、立派な馬に乗せまして、はいしい
どう勢お國入、お目出たうござります」「何から何まで乳母の深切、孤子になる久松、けふまで
命恙いも、そなたの兄久作殿のお情、其刀の質請にも、定めて金が入らうがの。是はたしに
もなるまいけれど、重々世話の恩返」萬分の一歩七つ八つ、守袋を開けて出す、はずみに落
ちるお染が起請、隠すを押へて、「コレ申し久松様、奉公人に似合はぬ黄金、誰に借らしやつた
ぞ、合點が行かぬ」「ア、イヤ、氣遣な事ぢやない、此壹歩は小遣にせいと御寮人様が下さつ
た。其書いた物は大事の守、こつちへたもい」「イヤ待たしやんせ。ハテ情深い御寮人様ぢ
やな。シタガ餘り親方の情過ぎるも善し悪しの、なには兎もあれ、しほらしいお前の志の金、

預つて置きませう。此書いた物は熊野の牛王が、定めて大切な守であらう。神様の名を書いた物、そこしうしては今の様に、つい溝へでも取落せば、守が却つて其身に崇る、こりやわしが預ります」と、ちらりと見付けて懐へ、くろめる乳母は守神、胸に納めて、「久松様、明日は私もお家へ参り、俱々に暇の願ひ。親方持ちや、マア早う往なしやんせ、諸事は翌日」と言残し、立別れては立止り、「コレ申し、必ず國へ行くのぢやぞえ。ア、どうやら濟まぬ顔付ぢや。ほんに又油断のならぬ、いつまでもほん様ぢやと思つて居る内、つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子」としや仕馴れぬ奉公をと、昔思へばひと雫、涙催す師走空、見返りく、三重別れ行く。往來人絶え長町の、夜店の賣聲、小唄物真似、「なまいたんやほ、厄拂ひまじよ、落しましよ。ヤアラ目出たいな、何ほう目出たいな。こなたの御壽命申さうなら、鶴は千年」「龜ぢやないか」「三か」「六か」と一所へ、咳きよるの小働き「ナントよい仕事したか」「サア、ひがだいの幻妻、侍に逢て物いふ間に、ちほ引いた」「ヤア結構な守ぢやな」中には豈歩、書いた物も入れてある」「日本橋でてうふせう」「アレく、又幻妻が此方へうせる。かはせく」とばらばらに、散る三人を見付けた勘六、跡を慕うて飛んで行く。非道の刀さすが世を、忍び頭巾の浪人に、小腰屈めて付添ふお庄、「うさんな者と申し召し、お名をお包みなさるとは尤。一昔過

ぎた事なれば、御見忘れなさる筈なれど、此方にはよう覚えてをります。石津の御浪人鈴木彌忠太様、其時の同家中相良丈夫の家來、三平が女房のお庄でござりますはいな」「ハテナ、成程さういやれば見請けた様な。シテ此彌忠太には何の用」「ハイお願がござります、あなた様が國元を、お立退なさると折節、紛失致した吉光の刀、其誤で主人丈夫家退轉。此刀が今でも出れば、主人の跡目相續致す。承れば當所の質屋、山家屋に質物になり、限月は切れたれど、其置主さへ知れたれば、質札を買取り、此方へ請戻したさ、色々と心を碎いて金子十五兩、才覺致して参りました。どうぞ其金で質札を、私へお賣下されうなら」「ヤ、コレく、何と言ひめす、スリヤ其質の置主を、此彌忠太ぢやと聞召さつたか」「イヤ左様でもござりませねど」「夫に又麓相千萬、其置主は即ち盜賊、さしつけて身共ぢやといやれば、此彌忠太を盜賊といふも同じ事、女と思ひ聞流せば慮外至極」とかさ押にきめ付くる。「イヤ全く左様ではなければ、若しあなたが此置主を御存じならば、お知らせなされて下さりませい」を打消して、「ア、師走の果に左様の事、相人になる馬鹿があらうか、とはいふものの、侍は相互尋ねてやるまいものでもないが、其詞偽なくば、十五兩の金子、そこに持つて居召されうの」「イヤ旅宿に預けて置きました」「ム、手前も只今急用で他所へ参る、明日参つて篤と談ぜう。お手前の旅宿は何所

だ「ハイ、こんな事もあらうかと、則旅宿の所書、認めて置きました」と何心なう懐へ、ふつと氣の付く守袋、捜せど見えすはつと胸り。「イヤ、コレく、身も只今は心せき、重ねて緩りと。早参る」と、袂ふり切り急ぎ行く。「ア、是申し今暫く。エ、折もをり今の守、若し人に拾はれては、久松様の身の大事。其も氣遣ひ、今来た道へ。イヤく、刀の詮議は延されぬ」と、我身は一つ二筋道、忠義一途に追うて行く。勘六に締上げられ、手をすりごうの痛い顔、「ア、申し、出しますく」。「出しあがれ」。「今働いたは此守、一步が八切、其儘でござります」。「まだ是計ぢやない、何も彼も吐出しをろ」と、せごす後に立聞く彌忠太、「ヤアわりや勘六ぢやないか」「ヲ、彌忠太様か」「彌忠太かとは横道者、汝よう身共をやつたな」「サ、何にも言はしやますな。コレ此紙入はお前のであらうがな」「ヤ何が」「ハテサお前のぢやく、中にはしつかり、是が日外の入れかへ、ナえいかえ」「ム、く、いかにも身共が紙入、よく盗んだな」「まだく、コレ此印籠」「ヲ、それも身共のぢやく」「イエく、其二色はお前様のぢやくござりませぬ」と、いふを言はせず、「どうすりめ」と、二人が寄つて踏んづ蹴つ、いがみの物取の大盗人に、命からく逃けて行く。二人は跡を見廻して、「彌忠太様、先度の壹貫五百目は、丁半でころりと仕舞うて、ちぎ文もおはしまさぬ、夫で算用すつてにさんせ」「エ、ふといや

つ。さうして此紙入には何程ある。ヤアこりやはした錢ぢやくぞよ」「うまい人ぢやく、銀なら何のこなんにやらう。マアく腹立てさんすな。此守袋には、お性根が入つてあつたれど、そりやおれが飲んで仕舞うて、跡に書いた物がある、儘に證文と思はると。おりや讀めぬによつて、こな様に進上する」と、渡せば取つて夜店の燈。「ヤア、こりや是、お染と久松が起請、よい物が手に入つた。油屋へ仕懸けてぐずりの種」「コレくそんなら二つ山ぢやくぞよ」と、何でも取りつく餅屋の隣、「待つた暫く。此小助も其仲間へ入れて貰を」と、ぬつと出でたる男ぶり、久三のどんざ引きかへて、壹丁目脇指やつ仕立、當世風の旦那衆天窓、「彌忠太様何とえらいか。よい事聞いた、祝ひに今夜は我等立てぢやく」と、「そりや過分なが、未一口儲の手筋、片付けて跡から参らう」「ヲ、此勘六も今一日取つてから、貴様の餅搗祝ひに行かう」「そんなら勝曼で待つて居る。打つてくれ」シヤンく、「も一つせい」しやんく、「祝うて三度」おしやんしのしやん、しやんくしやんと引別れ、葎篋も折からよい時分、行かんとせしが立どまり、「ハア併しと、久しう行かぬ馬場前の、田中屋へ行かうか、アいやくきやつが所はぶさ打つてある。それよ、勝曼の色めが醴に、生姜入れて待つて居る筈。先此方へ」と行きでは戻り、ア、可愛や髭剃のおふさが借錢の咄、正月屋のせんさいを、お前と氣入らずに喰

ひたいというたが、是も行きまし、醜も飲みたし、どうせうか、かうしようまん六道の、辻に待つたる以前の丐共、「こちらが仕事の邪魔しをつた侍めはソレそいつぢや。たよめく」と三人が、有無を言はず引立つる、夢見た様な小助が難儀、悔り駈出す勘六を、そいつもぐるぢやと掴み付く。心得たて白とりく、餅に片足踏んごんで、べつたり尻餅も重ね、運のつき白掴み付く、眞額けんのみ五文取、起上つては又ころく、取粉にまぶれて頬眞白、どれがどれやら味方同士、ぶつやら踏むやら暗紛れ、跡をも見ずして 三重走り行く。

油屋の段

難波詠の其中に、名におぼさかの鬼門角、油のしめ木引きしめて、異見の種も後家育、山家屋へ嫁入の、日數迫りし大年の、拂は宵に片付けて、春を壽く注連飾、松の盛砂高盛の、飯椀づらりと仕事仕の、夕飯時は賑はしよ。「ア、おさつ殿遣立てました。今日は大晦日、一年中の仕事納め、早う仕舞うて知行米は、マア腹へ取込んだ。此勘六めはどつちへうせた、めんよう悪い癖で、飯時に飯は喰はず、又酒買にうせをつたか。あいつは大方さか子に生れをつたであろ」「イヤ、酒喰ひの筈ぢや、あいつは薦かぶりから成上つた奴ぢやけな」と、傍に居ぬ者譏

り合ふ、口の悪いは缺徳利、提けて外から、「ヤイ、勘六が事譏りあがつたは長八めぢやな」「イヤおれぢやない久兵衛ぢや」「イヤおれぢやないぞく」「エ、喧ましい、どいつこいつの用捨はない、皆覺悟してけつつかれ。人の錢借つては飲むまいし、おれが酒飲んだら、汝等が足でもひよる付くか」「何のいの、ちつと傍あたりが熟柿臭いばかり」「吐しをんな、惣體油絞といふ者は、襦袢一つで働く商賣、取分けておれは寒の師走も日の六月も、年中裸で暮す故、だはの勘六と異名付いた男、此仕事せいでさえい錢を儲けるけれど、打入れ打上ける、けがな身に付けた例がない。汝らは錢が無いから得喰はぬのぢや。おれが此嗅をかどしてこますを有難いと思ひけつかれ。一盃入れて跡で飯を喰ふのぢや。此盛つてあるおれが飯に、どいつでもほでさいたら、腹袋引裂くぞ」と、何でもふしづく鬼の面、ほつた腕は悪鬼の看板、障らぬ神に祟なし。「仕事の賃さへ貰うたら、往んで早う年取らう」「チ、どうなと勝手に仕をれ。おりや往なうても盆はなし、此酒の勢にぐつたりと、いつそ來年迄一寢入してこまそ」と、裏へ轉込む拗強者に、構はぬ手間取、「お家様へよいよやうに。ホンに此久三の小助は、今朝からとんと顔見ぬなう」「サア昨夜の年越からまだ戻らんせぬ」「ム、年越からとあれば、何所の豆を喰ひに往かれた、大かた納屋の下の影裏豆、こちもいんでかよの煎豆、お福は内に待つて居

よ」と、住家々々へ立歸る。木綿でもなく絹でもなく、せう事なしの山蠶紬、久三小助が里通、勝曼の茶屋で昨夜から、しゆつほく酒の二日酔、こそのお山に送られて、瓦屋橋にふつと氣が付き、「ヤアこりやうかく来て早こちの内ぢや。もう往んでくれく」「サア最前からいねいねいぢやけれど、内方が見たさについて来た」「ア、コリヤ覗くな、手代衆が見やしやる。イヤサ手代共は大事なけれど、女共が見たら惱氣する。ちやつといねく」「そんなら旦那様、かた三日違へなえ」と、びんしやん歸るを待兼ねて、番部屋の物蔭で、著かへる衣裳縹子の帶、上著くるくすつほりと、元の久三の尻からけ、急かし顔で竹箒、昨夜ののらの掃溜を、跡から拭ふき掃除、手桶の切水ばつくと、浮名は餘所に立つごとくも、知らぬ久松小隠に、惱氣口舌も聲高に、いはれぬが苦の世界なり。「お染様、そりや何おつしやる。許嫁のおみつさへ、お前には見替へぬ私、それに何の浮氣らしい、外の色事所かいな」「イヤく、何ほさういやつても合點が行かぬ。是見や久様と書いたお山の文が再々来るは、どうでも茶屋狂しやるに極つた」「コレは又疑深い、何所の奴がそんな状。誓文私が茶屋へ行たら、西から日が出る」東堀、いづこ川筋師走の懸取、「田中屋でござります、中拂の残り拾貫五百文、御算用頼みます」ム、田中屋といふは覺えぬが、こな様何賣つたのぢや」「イエ私馬場前の

茶屋でござります、久様にお目に懸れば御合點、女郎衆の取かへが六貫三百、残は御酒取肴」「ア、是滅相な、此久松馬場前とやらついに往た事も無い。覺えないく」「ハテこな様の知つた事ぢやない。久様に逢はして貰を」「サア久松は私ぢやはいの」「イヤ久松ぢやない、久といふは此内の旦那殿、旦那に逢へば分るこつちや」「イヤく、そんな名は爰にはない」「ハテ扱、コレ旦那の口から直に聞いた、おれが名は油屋の久三郎とおつしやつた、久はひさといふ字、そこでこつちの島では久様といふはいの」「エ、そんな事こちや知らぬ」「知らぬぢや濟まぬ」と聲高に、見ぬ顔しても居られぬ小助、門から手招き、「コレくく、爰ぢやく、久三郎是にをる」「イヤアお前は久様、旦那様か」と、悔りあたふた門口へ、「エ、不粹なやつてはある、内へ這入るといふ事があるものかい」「デモお目に懸らにや濟まぬ出入。ぢやがお前はテモ薄いお姿で、そして御自身に門掃くとは、こりやどうでござります」「サイヤイ、大勢の人を使ふ者は、旦那から斯うして見せねば、廻るものぢやないわい」「ハア聞えました。時に聞えませぬは日外から、お風が替つて勝曼へお出なさるよけな。そして是程の御身上に、私が僅の懸を」「サアく、やるはいやい。ソレマア三步取つて置け、跡は後にこつちから、男共に持たしてやる。それも面倒い、おれが直に持つて行く」「そりや有難い、そんなら必」「違やせぬ

はい。是迄算用せず置いたは、お山めがいき方が悪さに、肝癩で態と引すつたのぢや」「イヤそりや旦那お道理なれど、お山の肝癩で呼屋を踏むとは大きなつほ、ソレ重井筒にもござります、踏むな呼屋に科もない、火燧にたんと火をいけて、待つて居ます、くわつとお立て」と、こそ屋はいきく、生玉さして立歸る。「コレ小助殿、此間がしい大晦日に、何所へ往て居やしやつた」「へ、前髪がなまちよござい置いてくれ。久三と手代二人前の此小助、請拂は昨日しまふ、年越に隙貫うて、戻ると直にはき掃除、此働きが目に見えぬか」「イヤくさう計ぢやない、明日の節日の椀家具、藏へ行て出してこいと、かゝ様の言ひつけ」「イエく、藏の出し入れは、久三の役ぢやござりませぬ。お氣にいりの久松、御察人様と連立つて行きや」「それでは詞に角があつて氣の毒、今のはわしが言損ひ、サアいつしよに」と傍輩の、機嫌取る手をひつしよなく、「ハテ行けなら行くが、邪魔になるがな。あすは元日、大かた礮始の取越、お染様の藏の鍵、あけてお目出たうござります。エ、同じ傍輩で、門口から御禮申す事さへならぬ、此久三には何かなる」と、けたい悪口傍輩倍氣、ぶつくさつぶやき立つて行く、年一日も暮れかかる、四十の浪も世話に寄る、乳母のお庄は久松に、尋ねおほさか油屋の、中戸に音なひ、「頼みませう」「どなた」と内より出合頭、「久松様か」久「ア、乳母か、よう來てたもつた。マアく此

所へ」と深切は、替らぬ中の行燈の蔭。男が先へ箱挑燈、點し立てたる禮衣装、上下ため付け山家屋佐四郎、「歳暮のお禮」とつよと入る。竺「コリヤ喜八よ、今夜は是で夜が更る、夜半前に迎ひにこい。お勝殿は奥にござるか」久「ハイ、さやうに申しませう、暫くお待ち」とつい立つて、行くも見送る主思ひの、乳母が氣の付く煙草盆。「ほんに幸ひよい折から、今日もあなたへ參つて、お尋申さにやならぬ譯、彼吉光の守刀」竺「ア、これ、一昨日も申す通り、其刀は手前質に取つたれども、もう疾うに流れました」乳「サア其儀は承りましたが、其置主は若し鈴木彌忠太とは申しませぬか」竺「イヤもういかい事の口敷、すぎやら縮やら、此方覺えは致さぬ」と、塵灰つかぬ詞の潮。「お茶上げませう」と久松が、差出す茶碗引つたくり、竺「エ、小じたるい丁稚めぢやな。手入らずの染茶碗、ちよこく破りさうな頼付、茶碗の代に親方の前で、何もかもけつ破つてこます。けふは後家に逢うてめつきしやつき、嫁入の延びるもほうずがある、結納おこしてから幾月になる、今夜中にお染を渡すか、さうなけりや結納の證の脇差一腰金拾兩、取戻してこちらから變改。其代に又借して置いた百二十貫目、毳まで算用して取るのぢや。ア、案内仕をれ丁稚め」と、しやちこばつたる麻袴、疵持つ足の穗に顯れ、問はぬに夫とおちの人、「そんなら和子、二階で待つて居りますぞえ」と、心残して立つて行く。藏からそつ

と小助が悪智慧、小判の包封押切り、「まづ拾兩忝い。此盗人を久松めに、さうぢやく」と一人笑、人に難儀を塗文庫の、中へ目録蓋ひつしやり、「しめたぞく、時に此金、ちつとの間、何所ぞに」おくから、「小助どのく」と呼立て出づる下女のおさつ、「コレく、小助殿、今奥で山家屋の旦那様と、お家様と、結納を戻せと遣つ返しつ、其中に取交せて、結納の金が見えぬというて、大ていの詮議ぢやない。サアく、ごんせ」「チ、く、そこへく」「エ、どこへ隠して置き所に、事かく折敷飯椀の、高盛へつと込む小判のごもく飯、上から押付けそしらぬ顔、打連れて行く奥から口、目から鼻へ抜目のない女主、後家に負けぬは銀の利の、かさにかかつて聲山家屋、「お勝様、結納の證潔白に、戻さうと言はしやつたから、今更否はいはれまい。サアく、戻して貰ひましょ」「サア今お聞なざる通り、大切にして箆筒に入れ、しつかりと藏に入れて置いた結納の金拾兩、今になつて見えぬといふは」「コレ置かしやれ、言掛りで戻さうとはいふたれど、結納戻せば百二十貫目立てにやならぬ。所で何なと引延す、てれんはたべぬ。人にこそよれ山家屋の佐四郎、一保が講釋三年聞いた男ぢや、そんな計略に乗つてたまるものかいの。ガ又嘘でなくば其結納お出しなされ。サアく、何」とつよかよる。主の當惑取分けて、氣の毒餘る久松、「私が差出がましけれど、大まいの銀さへ立てうとあるお家様、繩拾

兩の金を惜んで、何の間合おつしやらう。油屋商賣は大勢の仕事、毎日入込む事なれば、誰が業かは知らねども、失せたには違なし。私共もめい、身晴、共吟味して、今夜中に急度お目にかけてませう。お疑ひ晴らされませ」と、挨拶する程むつと顔、何かな小みづをくり出す勘六、おうへにとつさり大あぐら、「コレ丁稚殿、貴様あぢいな事いふの。此所の内に金が見えにや、仕事仕のおいらが盗んだのか」「久「イヤく、さうではないわいの」「イヤさういふのぢや、仕事仕が大勢入込み、うさんなといふからは、絞仲間を盗人といふのぢや。殊におりや今日此頃の新面ぢや、猶以て耳に立つぞ。但し何ぞ證據があるか、ヨ、證據もないに盗人呼はり、けたいが悪いぞ、忌々しいぞ」「サア、是々聲高にいやんないの」「イヤく、止めやんな小助、あのせんまめ仕様がある」「小「サ、尤ぢやく、わがみの立たぬ様にはせぬ、マアく、待ちやいの」「イヤ止めやんなく」「小「サアく、能いわいの、わがみの立たぬ様にはおれがせぬ、喧しいやんなく。古町ぢやはいの、人が立つはいの。勘六正直者ぢやさかい、えらう腹立て召さる。ハ、ハ、ハ、ハ。イヤコレ久松、ちよとおぢや、サア言うてしままいの」「言へとは何を」「ハテわがみが金盗んだ事を」「コレく、小助殿、そりや何いふのぢや、覺えもない事を」「ハテ扱もう叶はぬ事を、其眞顔が厭ぢやはいの。證據の出ぬ中、サア綺麗にいうて仕舞うたが能からうぞや。サア

おれに言やく、「エ、知らぬはいの」「ヤ實正覺えないか。エ、氣の毒ながら、證據出さずばなるまい」と、久松が手習ひ文庫引つさけいで、「こりやこれわれが文庫、アノ佐四郎様から、結納の證について来た目録、汝部屋の入物の中に、コレくく入れてあつたが遁れぬ證據、サ天命ぢやの、是でもわがみが盗まぬか」と、差付けられても覺えなき、身の災難に詞なき、久松が胸づくし、取つて引する勘六が、「イヤばりめ。うぬが盗んだ金を人にぬつて、ようおれに絞付けたな」「コレく勘六喧しういやんな、金の有所ぬかさねば、どづき居るて言はずのぢや。エ、吐しあがれ」と責めせつてう。お勝は聲かけ、「小助待ちや」「エイお家様、なぜお止めなされます」「ハテ下人というても人の子、疵でもついたら何とする。殊に其金の盗人、急度久松には極らぬ」「アノ、是程知れた證據のあるに」「サレバイやい、其久松が文庫は、開いてあつたか錠がおりてあつたか。金盗む程の者なら、其目録は破つて捨てる筈の事を、我科の知れる様に、わざく我文庫に入れて置いて、しかも蓋開けて置きさうなものか、但し又錠がおりてあつたを、そなたが開けたら、人の箱錠捻切るは盗人の行作、サ夫ならそちにも疑が懸るぞよ」「小サそれは」「其様に手荒うせずと、靜にしても證據はなる」と、ぎつくり詞の角屋敷、納めた後家にいらつく佐四郎、「ヤアそりやお勝殿、最辰のさばきぢや、現に知れた盗人の久松、

そつちで證據がならずば、町内へ斷つて、代官所へ引摺つて行く。小助しめ上げて證據仕やいの「小ハイく合點」と立ちかよる。「コリヤ主の詞を背くのか」と、主命流石うちつく腕。「小助せくな、此丁稚めは勘六に任せて置け」と、久松が前髪引付け平手でびつしやり、起直つて、久コレ勘六、こりや何とするのぢや」「大すりめ、小助は傍輩だけで手ぬるい。其日雇はれの勘六、どなたにも遠慮はない。金はき出さじや、商賣の油の滓喰はずぞ。胴性骨の油糟、絞り出しても言はさにや置かぬ」と、土間へ引立て踏落され、髪もばらくあら涙、こたへ兼ねて駈出る乳母、「マアくく待つて下され、待つていの」と庭に駈けおり、「コレ久松様、お前の身に曇のない言譯は私がする。ほんにく今でこそ町家の奉公、筋目正しい此和子に、そんなさもしい心があるか。無念にごさんしよ。最前からお前より、わしが口惜うてならぬはいなア」と、背撫でさすれば、「ハ、ハ、ハ、何ぢや、けたいな婆が出た。ごくにも立たぬ言譯せずと、今爰でだはの勘六が、盗人の政道するをよう見て置け。ぢやが酔醒で俄にぐつとひだるうなつた。飯一はい喰うて、腹丈夫にしてから、どうするぞ待つてをれ」と、飯椀引出し箸取りかよれば、小助はびつくり、「ア、コリヤ滅相なくく、夫はマア何するぞいやい」「ヤ何するとは、おれが飯をおれが喰ふのに、其が何で滅相な」「イヤサ、夫はいかにもわれが飯さうなといふ事」

「サア、おれが飯ぢやによつて」「ア、コリヤ〜、其飯喰ふないやい」「妙な事をいふ人ぢや。ム、ばりめを行ふのに隙が入るといふのか。よい〜、そんなら飯喰ひ〜やつてこまそ。一責せめたら、白状さすは膳の上の箸」と飯椀はなさぬ勘六、「ア、是はまた情ない。ア、こりや〜、マア夫を下に置き、此飯は喰はされぬはやい」「エ、けたいな、そりや又何で」「サイヤイ、金の盗人が知れぬ中は、仕事仕にも皆疑が懸つてある、ヨウ、若し汝が盗んだのなら、盗人に飯喰す法が有るか。身の垢を抜いた上で、跡で喰へといふ事」「ム、こりや理窟ぢや。そんならこいつ、もうし〜いて仕舞はにやならぬ」「ア、是々大事のおれが扶持切米、物いひの付いた飯ぢや、やつぱり此所に置いて貰を」「様々の事で食どめしられる、おれが爲には食敵、汝には是喰はす」と、割木引提げ立ちかゝる。「勘六待ちや、家來の吟味は主がする、雇ひ人のそなたが入らざる差出、扣へて居や」「そんなら小助が」「イヤわがみも頼まぬ」佐「チ、すりやこな様の直の吟味、見物致そ」と、つゝばる佐四郎、いやといはれぬ此場の表、「頼みませう」「小助表に案内がある、小助々々」「ハイ〜、ハテどなたぢや」と、出迎ふ門口、兼てや躑しあひけんを、互に見ぬ顔空とほけ、「拙者浪人者でござる、此度有付いて國方へ参るにつき、路用の拵に手語り、お家を見かけて御無心、と申して唯は申さぬ、實は

身の差合せ、賣りに参つた一品、ちよと御覽下され」と、懐より取出す一通、「コレ浄土宗一向宗にはなければならぬ、圓光大師の一枚起請、質が正筆かは、たつた一目御らうじると、忽知れるお見知の手跡、ナ、何と是計は買はつしやれずはなるまい。天罰起請文の事、此跡を讀まずに直を付けるが、商の祕事、娘御に買うて進ぜられたら、一生の災難を遁れる守本尊でござらうぞや。但し御所望にないか。ナニ夫にござるお若い人、其元にも入用の物ぢや、お求めなされい。現當二世の起請文、イヤもう〜ありがたい御文章、お望みならば讀んでお聞かせ申さうか」と、意地くね悪う鬼門の肝先、「ドレ拜見致そか」と、立寄る佐四郎は金神の、中からお庄が引取つて、「一枚起請買ひました、わたしに賣つて下さりませ。御不肖ながら」と差出す、金包手に取上げ、「こりや僅金拾五兩、こんな事では」「サア〜夫は當座の手附」「ム、手附とあれば請取つた」乳「價は何程致さうと、わたしがアイ買ひまする。今年は夫の十三年、此有難い御文章が、何と人手に渡されう。コレ久松様、お前の親御丈太夫様、預りの御重寶失うた科、阿房拂に逢ふのが無念さ、お覺悟の切腹、夫三平介錯の上主人の追腹、お前は漸六つの年、兄久作の在所へ預け、わしは國にとどまつて、どうぞ今一度相良の跡目相續の願、御家老中へ月々の訴訟、其時失せた殿の重寶、此大阪の質屋にあると、聞いたはお主の出世時と、其

爲に拵へた此金なれど、差當つた地獄の苦患、遁るよは此一枚起請、其大切な事を何とも思はしやんせぬは、親御の恩を仇に思うて居さしやるから。コレ見やしやんせ、妙譽西岸信士俗名三平、こりや私が夫の戒名、片時も肌身を放した事はない。お前の親御は劍樹院等覺居士、其心では命日も、忘れてがな居さしやらう。コレ、此位牌の夫三平が、忠義の心を少しでも思ふ氣があるなら、未來の約束、忝い御文章を反古にして、國へ歸つて命長う、家相續して父御様に、草葉の蔭からにつこりと、笑はしまして下され」と、恨みも異見も十分一、明けていはれぬ百千萬、我子の様に養ひ君、思ひ詰めたる眞實の、母より深い大恩慈悲。久誤つたく、もう堪忍して〜と、歎けば涙拭いてやる、あまいは乳母のならひなり。歎を餘所に山家屋が伸欠、笹ア、こりや盗人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人、見た所がああ、跡金の才覺心元ない、手附限の事である、いつそおれ買ひましょか「乳イエ〜外へはやらぬ、私が先約。サア跡金は何ほでござんす」浪人「惣高金は五百兩」乳エ、イ「安い物ぢや、サア只今請取らう」と、聞いて今更ハツとばかり、當惑顔を見て取るお勝、「イヤ〜、無躰ながらそりや出來まい、五百兩なら私が買ひましょ。今がかりに渡さう程に、さつきの手附はあの人へお返しなされ」浪成程々々さうなうて叶はぬ處、めくさり金で大事の代物、買取ら

うとはのぶとい女め。手附金ソレ返す」と、投出す包お勝が取上げ、「お侍様、こりや最前の手附とは違ひましたな」「何が違つた」「イヤ違ひました、中は見いでも知れてある、大かた是は戎様の質小判」浪ヤ、ア、そりや何か手前存せぬ、あの女が「勝イヤおつしやんな、こりや最前の金ではない、わしがよう見て置いた。あの人渡した金は、反古に包んでござんした、是は是白紙。包が違つてあるからは、お前が内から拵へてござつたふきかへの質金、眞眞の金は懐にあらうがな。日外久松がかたられたもちやうど此傳、是をたぐつて詮議したら、何が出ようも知れまい」と、穴を見付けた發明後家、暗い仕事は油屋の、明にきよろつく化のかは。「イヤ其詮議よりこちらの詮議、ドリヤ起請の正體を顯はしてお目にかけう」と、立寄る小助を勘六が、取つて突退け起請の一通、寸々に引裂いたり。「コリヤやい〜、大事の證據なせ破つた、こつちへおこせ」と言はせも立てず、膝どつさり片手投げ、「コリヤ何しをる」と攔みつく、頬を飯椀菩薩の罰、勘ソレ久松小判が出やうが「久ホンニちやうど拾兩、そんなら此盗人は」「チ、こいつぢや、もう遁れぬはい。道理で飯惜み仕をると思つた。何でも三つ山の約束に、己一人よい事せうとは、さりととは下心の悪いがき、もう此勘六魂が返つて、是からは久松が味方、何も角もいうて仕舞ふからは、何所へ尻が行かうも知れぬぞ」「エ、もう赦されぬ」と取付

くを、脾腹の當身久三郎、きうともいはす目を白黒、一の裏は勘六が、みたのかはりに山家屋も、傍杖こはがるたんば色。久「サア佐四郎様、拾兩の金子出しましたぞえ、持つてお歸りなされませ。是でも私が盗みましたか」「何のいの、正直路な丁稚殿、有所さへ知れたら、持つていぬには及ばぬはいの」「勝」ム、さうおつしやれば娘にも、言分はござりませぬか」「何のあろぞいの」「勝」そんなら嫁入の日限は「生」春永にくに。ア長居致した、早ういんでいねつみませう」とそこく、底氣味悪う彌忠太も、そろくくく表へ、勤「侍」待った、懐の金置いて行け。但し勘六が引出さうか」「勝」イヤくコレ、あの拾五兩は御文章の代金、深い志の金、お庄殿へはわしが返す。どつこも波風ない様に、わざと何にもいはぬぞえ」「チ、サ、身共も何にも言分ない」と、強い顔でも胴震、肝を菜種に油屋の、辻から横に逃歸る。お庄はいそく、「結構なお家様の御了簡で、久松様の明も、忽、打つて替つた勘六殿、急に善過ぎて合點が行かぬ」「コレ氣遣せまい此勘六、久松殿の肩持たねばならぬ譯は、是見て下され、腕に卒都婆の入志、妙譽西岸信士」馬ホンニ此位牌の戒名と、合うたは不思議」「母者人健でござつたの。こな様の子の三之助でござんすはいの」「馬ヤア」勤別れたは十四の年、見忘れさんしたも尤、斯ういふ髭頬になつたもの。一體が小さい時からいけずであつて、陪臣の悴の分で、歴々の家中の子

供衆に、磔打つたり天窓はつたり、手討にもせにやならぬ處を、親父様の慈悲の勘當。間も無う死なしやつたと聞いてがつくり。始めてちつと人間の魂が出来たれば、悲しや體かみだれ同然、親の墓へさへ晝は得參らず、夜の中に寫して來た戒名、命日に坊様呼ばうにも、宿なしなれば佛様は猶なし、せめて親の之恩を忘れぬ様に彫付けた、此腕がわしが佛壇。置所が悪さに手を合しては拜まれず、毎朝片一方の手で御禮を申しますはいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫様、御切腹なされた元はといへば、紛失の吉光の刀、此大坂に質物に入つてある由、エエ是を請戻してお家を立つれば、お主へ忠義、親父様のお位牌へ、是に上こす手向はないと、思ひ立つた其日から、金の工面に様々の騙事。日外座摩ですりかへた、其銀故に難儀さつしやる久松様が、主人の若旦那であつたとは夢三寶、たつた今聞いて腸がひつくり返つた撈的、目當の外れたも不幸の罰、母者人堪忍して下さりませ」と、眞實眞身の後悔は、昔に返る稚顔、「其氣になつたら親子ぢやもの、何の憎かる、よう健で居て呉れたな」「母者人懐かしかつた」と抱付き、襦袢の袖を絞が誠、大づけ涙殊勝なり。「チ、親子の心底感心しました、夫程に二人の衆が心を盡す、吉光の守刀は爰にあるぞや」「エ、そりや又どうしてお前の御手に」「サア縁は不思議と、久松の人がら、由ある人と見た故に、尋ねて聞いた氏素姓、守刀の入譯、廻

り廻つて山家屋にあると聞出し、お染を望むを幸に、こつちから乞うて取つた結納の證。久松、そなたに是がやりたい計に、嫌ふ娘を山家屋へ、やらねばならぬも爰の譯。是を土産に本知に歸れば、和泉の御家中相良久松様。いつまでも油屋の丁稚で居るが見目ではあるまい。まだ年の明かぬ中と、わしへの義理や何やかや、譯もない事思はずと、早う出世さしやんせ」と、渡す後家鞆ぬけめなき、情にお庄が忝なみだ、庄腑甲斐ない我々が、思ひ込んだ念が届いて、嬉しいとも有りがたいとも、久松様、御禮を〜」「ア、是、禮は來年ゆるりと、マア行かしやんせ」「ホンニ母じや人、うかくして居る所ぢやない。今夜の内に藏屋敷へお供して、お留守居へ御目見えなされずば、歸參の願が叶ふまい。サア〜〜若旦那、早う〜」に久松は、お染に引かるゝ亂髪、撫付ける間もせはしなく、突出す鐘は早夜半、時刻が移ると勘六が、先に押立てかけ出す足首、片息ながら取付く小助、投込むぐり戸、「御家様おさらば」「御無事で」「まめで」と内と外、隔つる一夜大年の、鐘は百八煩惱を、跡に見捨て、三重急ぎ行く。露跡にむざんや油屋の、お染は一人娘氣に、思ひ詰めたる久松に、別るゝ様子立聞に、聞いて氣もきえ胸せかれ、爰で添はれぬ縁ならば、未來で積る白雪の、庭へ泣く〜をりからに、「お染〜」と母のお勝が聲すれば、「アイ〜〜」と元の座敷へ立戻る。お勝はさあらぬ顔色にて、「あ

すは日出たい元日、年の終は寝ぬものぢやけな。譬へさうなうても、寺々の鐘の音で寝られぬから、持病の癩が差込んで、アイタ〜、ちつと爰を押へたも」あいと娘は何氣なく、手を差入れる懐を、あけて夫とはいはた帯、障る手先にお染は恟り、「母様、こりやお前腹帯ぢやないかいな」と、思ひがけなき興覺顔。「娘、そなた腹帯といふ物、して見やつた事があるか」「エ、いえ〜何のマア、腹帯とやら、ついに見た事も無いけれど、お腹にやゝをやどした時、此様に巻いて置く物ぢやと咄に聞いたばかり」「チ、よう知つて居やる。いかにもこりや腹帯、イヤサア、癩を押へる腹帯。此癩の直る薬をコレ見や、買うては置いたれど、下女にも男にも煎じてもらふ人がない。わがみ大儀ながらこの薬、誰も人の見ぬ様に、こつそりと煎じてたも」「アノ母様の何言はしやんす、薬上がるに誰に遠慮」「イヤ〜人に見せられぬ、こりや此癩を押下けるおろし薬」「エ、イ」「チ、肝が潰れう。娘の手前も恥かしけれど、太右衛門殿に別れてから、後家は立てても離れて煩惱、嵐三右衛門の芝居に誘はれ、名は言はれぬが、美しい若衆形をふつと見てから、思ひ切るにも切られぬ悪縁、それが積つて情ない、ツイこんな癩になつたはいなつ。かういうたら、定めてそなたの心では、母様の未練らしい、わしらがそんな事が出来たら、井戸へなりと身を投げて死んで仕舞ふに、卑怯な命惜むとも思やらうが、夫では

わが身ばかりぢやない、世間へばつと沙汰になつて、油屋の家は是限、わしも色香を知りながら、心に好かぬ山家屋へ、嫁入さすも家大切。今の若衆形の事ふつり思ひとまつた證據に、おなかの癩をおろし薬、思ひ切つて煎じてたも。折角佛様の御世話で、五月にもなつたもの、いぢらしけれど子を助ければ親が死ぬ、いひ替した男まで、生きて居ぬ氣を知つた故、三方四方を納めるは、コレそなたの思ひきり一つ。とはいふものの譬にも、子よりも孫は可愛といふに、初孫に日の目も見せず、水になせとの胴欲を、教へる母が心の中は、コレ鬼ぢやはいの鬼ぢやはいの。男の爲親の爲、家相續の爲と思つて、氣に入らぬ嫁入してたも。コレ一生の頼みぢや、と、我子を拜む母親の、義理の腹帯しめ泣に、「いかに嫁入致しませう」「チ、出かしやつた出かしやつたく、よう云うてたもつたなう。其替にどうぞして、早う飽かれて戻る様に、わしや神佛を祈つて居る」と、粹な親程取りわけて、迫せつな娘の心、互に思ひやるせなき、親子の誠ぞ道理なる。やゝ時移り久松は、も一度お染に暇乞、死ぬる覺悟に立戻り、堀の外面にありぞとも、知らずお勝は、「チ、嬉しやく、翌日は目出たい元日、泣顔ふいて神様へ、何やかやお頼み申そ。サアおぢやいの」と、連れて行く。見越の枝に三尺帯、ひらりと内へ久松が、あはや人影見られじと、潛む暗き夜藏の戸の、あいたを幸そつと入る。跡からついて見濟す小

助、外から戸前をどつさり、鼠落の仕濟し顔。折から外には小挑燈、雪の傘差かゝる鈴木彌忠太、後を慕うて勘六が、息もすたく、「彌忠太殿、一週こなたを尋ねたはいの」「身共に何ぞ用があるか」「ある段かく、こなたが盗んで立退いた吉光の守刀、質屋にあつて手に入つた故、たつた今藏屋敷へ持つて往た處が、眞赤な質物、正眞はこなたが持つて居よう。サア尋常に出したく、ハ、ハ、ハ、いかに推量の通り、質屋めに一杯食はしたのぢや。正眞はおれが持つて往て、立身の種にする、温に渡してよいものか」「夫聞いたらまうよい。其刀は大かた爰に」と、柄にかける手をもぎ放し、直にすらりと抜打を、傘でばつしり請身の手だれ。内は妹脊の縁側より、庭の井筒に合掌し、「南無阿彌陀佛」の聲聞取り、「お染様か」「ヤア久松か」「どうでも死なねばならぬ身の上」「未來は一所に」手に手を取つて、組合ふ外の暗紛れ、手に障つたる小脇差、探つて見れば九寸五分。「扱こそ吉光」「夫やつては」とむしやぶり付くを踏飛し、眞エ、忝い。武運の花の開き時、久松様は何所にござる」と、夫としら雪白壁の藏と庭になむあみだ、アツト苦しむ一聲に、驚くお勝、久三の小助、「久松めはくたばつた」と、呼はり出づるを取つて引敷き、「エ、早まつた御最期」と、恨むに甲斐も百八の、鐘も打切りしらく明け、かはいの聲と諸共に、年のをはりに明渡る、春を重ねて久松が、名は大阪の東

堀、今に傳へて残りける。

新版歌祭文終

御陣九州 地理八道 彦山権現誓助劍

第一

留侯楚を夷け子胥が尸に撻ちしも、讐を報いし烈孝に、美を媿べたる女王國、眞柴大樹の代を
 御する、霸者の民こそ皞々たれ。比は天正半つがた、大明四百餘州を奪略る手初め、三韓八道
 を攻むべしとて、古昔神功皇后の、還く祥き蹤を追ひ、勝利の祈かけまくも、住吉四社に奉幣
 あれば、宜禰が鼓や神樂歌、乙女が袖にすゞしむる、神慮もさぞと知られける。幾世經ぬらん
 松原の、宮の方よのつしのし、歩みき飾る上下も、折目高なる國侍、濱邊より來る一群も、同
 じ家中とおほしきが、それと見るより松が根に、かい蹲踞うてひかゆれば、「コレハく春風氏、
 辻新右衛門門脇儀平、三輩連にて御參詣候な。誠に當社は和歌の神、海路安全の守護に限らず、
 我荒魂は王師を守らんと、詫宣まさに弓矢の守護神、歩を運ぶ心底が、直に武藝の剛といふ
 もの、イヤハヤ殊勝に存する。斯いふ京極内匠、音成公に召出され、新參ながら五百石、各方
 の師範たるも、他家に勝れし微塵流、武術に秀でし徳なり」と、上見ぬ鷺の高慢自慢、俱に身

を吹く春風藤藏、「イヤモ先生の詞は實に金玉。夫に引きかへ一味齋、元が秀らぬ八重垣流、年は老いたり、教方の其懶惰さ。剩此頃は、藥湯とやら何とやらで豊前へ立越え、本國にも居らぬとの噂、近々異國へ軍の御供、勵に勵を加ふる稽古、ぶら付いては居られぬ折から、こちから隙やつて、先生の弟子に成たも、殿の武用を大事とするから、マ、ナント忠臣でござらうかの」

「成程、此新右衛門も其元に勧められ、先生へ弟子入してからめつきりと稽古が上る、我ながら鞞れて居ます。とうからお弟子になつて居たりや、一味齋をも今頃は、弟子に致して居ませうもの、此上ながら幾重にも」

「イヤモ此儀平めも先生様のお世話により、韓へ參らばあつばれな手柄が致して見たうござる」

「イヤモなるともく。いま日本若手の強者、加藤が家來に木村又藏、福島に桂市兵衛並に萬團右衛門等、何程力自慢でも、劍術未熟手柄は得せまい。内匠が教ゆる術を以て、異國の敵に當るならば、樊噲張飛が向ふとも、又諸葛孔明が固むる陣でも、破るは長者の枝より易し。そこが所謂微塵流、勵まつしやれく」と、優美に見する鼻高々。聲鬧しく馳來る巫、「只今中國殿御簾中、海邊眺望とて此所をお通りなさる、商人は荷を片よせ、往來は下に居ませい」と、いふもいきせきかけ通る。「面倒な御臺の御通駕、逢ふもむづかし塚へはづし、信なければど神社佛閣、一見して立歸らん。逗留中は大阪屋鋪、歸宅後緩りと御意を得

ん」さらばくと引別れ、北と南へ歩み行く。程なく先驅の歩侍、しとく二行に並松原、後乗者の同勢美を盡し、只繪のごとく三つ星に、一品の字を金紋の、乗物木蔭に立てければ、後乗の武士衣川彌三郎、美男の聞え高股立、綠榮よき松蔭に、床几直せばかねてより、戀する中も吉岡が、娘お菊が種とりく、御座を設けて待ちかくれば、戸を開かせて眞弓の方、嬋娟としてうづ高き、御目に汐路を眺め給ひ、「住吉の岸の向ひの淡路島、哀れとだにとつどけたる、島山はあれぢやなう。御代治りて太平の、空に狼烟の雲もなく、地に矢叫の音をなみ、磯に群るてふ海士の子が、何憂き事のありてやは、忘れ貝取るしほらし」と、斜ならざる御機嫌に、衣川も岸につま立ち、「ナウ妣衆あれ見給へ、あの高根こそ武庫の嶺、馬手は丹波路弓手は摩耶、敏馬蘆屋の灘つどき、名所古跡は多けれど、わきて名高き鴨越、源氏平家の軍した、所はあれ」と指させば、妣どもが延上り、「どれく何所が一の谷、敦盛様を討留めた、古戰場」と眺めても、目路の遠さにこそしも、譯が知れぬとなまめかし。浪間にふつと目の付くお菊、「申し御臺様御らうじませ、堺の沖の方よりも、こなたへさして漕寄る船、造といひ帆のかけ様、かはつた船ぢやござりませぬか」「けにも夫よ」と眞弓の方、俱に怪しむ張三郎も、瞬千里波濤を凌ぐ、異國の大船足早み、程なく磯に寄る折から、祝部山上倫太夫、白馬を引かせ

出で来り、「今日殿下久吉公、當社明神へ御寄附の此馬、頻に嘶うて止む時なし。不審の餘り小製の、神輿を鞍の上に御し、鎮め祭れど彌増に、嘶く駒の吉凶知れず、御簾中の御目通り憚りある所なれど、異國退治の大統戎、音成公の御代參と候へば、此由申上けんため、則馬も引かせたり」と、謹んで訴ふれば、主従共に顔見合せ、俱に鞞るゝ神慮の不思議。「イヤ其駒の嘶く吉凶、判断なさん」と船中に聲高く、らつぱちやるめら路樂の響き、一劍腰に霜を佩ぶ、玉音清く邊りを拂ひ、歩み出でたる異國の姿、「我は三韓とくねぎの城主、車騎將軍木曾官。傳へ聞く日本神國として、神は非禮の祭を請けず。近比久吉といふ英雄世に出で、天が下を治むといへども、禮樂政刑神明の心に叶はず、怒れる神の威徳に撻たれ、扱こそ此馬嘶き止まず」と、忌憚らず述べたるは、もつての外に聞えたり。眞弓の方打笑み給ひ、「そも保元の亂より又百餘年の此年月、大方ならぬ四海の騒ぎ、切鎮めたる眞柴家の、武威をさみするそもじの詞、自は吞込まぬ」と、胸の一物見透す利發。彌三郎つと出で、「聞えた、彼晩唐の白樂天、日本の智慧を計らんと、渡つて來たる人眞似して、久吉公の軍立、軍慮の底を搜りに來たよな。眞柴の神兵程なく押寄せ、手竝は汝が國で見せん。早本國に立歸り、首に名残を惜んで置け」「ハ、、、小がしこくも申したり。日本は僅小國の、小島に蔓る眞柴が智慧立、唐高麗を攻め

んとは、蚯蚓が天上望む不覺、及ばぬ事」と嘲笑へば、彌三郎ぐつとせき上げ、「アヤ毛唐人の癖として、腕なしの口がしこく、上をさみする慮外の一言、其腮切つて切りさけん」と、柄に手をかけ詰寄れば、御臺御聲かけ給ひ、「ヤレ待て彌三郎、土地の廣さをくらべては、四百餘州と六十餘州、對やうせざる小國なれど、日本は神の開きし御國、神力加はる軍配には、唐天竺にえぞしらぬ、蠻戎が加勢なすとも、叶はぬ事」。神の擁護の眞柴勢、勝つか勝たぬか目の前に、勝負を爰に試みん。コレ此馬の右左、付けたる雙の染手綱、西は異國、東は日本、天照太神も女體なれば眞弓が代り、秘お菊手綱を取つて引く程ならば、神慮に任す即座占、引き勝つ方ぞ勝軍。サア引き給へ木曾官、いそふれお菊」と奥方の、指圖はすぐに軍配智略、のつ引ならぬ木曾官、ふしようぐに立寄れば、おもはゆながら主命に、是非なく菊が取る手綱。後に扣へる彌三郎、「コレ、お菊大事の場所、必ず負て貰うまい。負けなくも惚れて居る、男のかけ聲千人力、其外家中の面々が、こなたに力めば磯には下官、互に臂を張りかけし、唐と日本の勝負附、賣つても見たき心地せり。「サア女」唐人様引かしやんせ」サアくくと木曾官、手綱を腕に身を入れて、引けどいつかな動かぬは、不思議と五體の力を入れ、引けどしやくれど四足をかため、地に生抜きし如くなり。お菊は吹出し、「ホ、、、、豕や羊の肉食に、穢れた腕

で神の馬、引き勝たうとはならぬ事。馬は斯うこそ引くものよ」と、じつかと取りし轡づら、引けば正直に引かれ寄る、波の鼓のかみ神樂、こよに響きて尊みの、武威を守りの神徳奇瑞、空恐ろしく尊けれ。「したりく」と附々が、どよみを作る勝鬨に、木曾官顔色せき立ち、「ヤアどこへ神徳、女のよれる髪筋には、大象も繫がるためし。よし、それ無益の争ひ、イデ異國の幻術奇特、目に物見せん」と手を拱き、口に唱ふる祕密の呪文、驗は目前白波の、漲る海上三反ばかり、潮干潟と土砂捲上げ、平地とこそは成りにけり。下官ども聲揃へ、「サア、くならば是して見よ、いんちんでいかうばとれい。唐が勝ぢや」と打笑ふ。眞弓の方ちつとも動ぜず、「南無や住吉大明神、汐満干の力を加へ、日本の銳氣を添へ給へ」と、一心こらす再拜祈念、空にはそれとしら鷺の、梢を離れ羽叩し、海に向つて飛ぶと見えしが、替りし水尾は忽に、もとの深海と返る波、音どうくと漲れり。ハツと思はず木曾官、恐れをのとき頭を下け、「斯くあらんとは知つたれども、術を頼みに慮外の段々、恐ろしく、御赦免あつて此以來、永く長門の臣下とならば、轍の魚の勺水に、命を延ぶる身の大慶、偏に簾中のお執成、宜しく頼み奉る」と、ほつきと折りし我慢の矢先、奥方御機嫌うるはしく、「懺悔に億劫の罪も亡ぶ、今より異國の邪術をやめ、神國不思議の威になびかは、いかでかいなみ給ふべき。け

ふの様子を我夫へ、申上ぐるも歸國の上、重ねて逢はん韓國人、さらば」と直に引く弓の、眞弓の方は神垣に、賽の供揃へ、神馬は跡に山上が、手綱取りく、木曾官、馬鳴も儕が來りたる、神の徴としら波や、磯折つ音も豊にて、戸ざさぬ御代の三重盡しなき。

第二

豊前の國彦山と申すは、其麓、豊後筑前の三國に跨り、九州無雙の高山にて、峯に上古の神在まし、筑紫彦山権現と、山をば御名に呼子鳥、立木も古りて岩嶮たる、十の谷五十の窟、第一窟を御本社と、仰ぎ尊む神徳の、靈驗四方にいちじるき。ウツさまにつけたや此枯柴と、やせてこがると思ひの敷を、諷ひつれたる柴苜が、聲せはしなき山戻り、鳥居の前に息杖立て、「ナント皆はどう思やる、此様に汗水たらし、年が年中山働き、身を碎いても儲からぬ、此末はどう成ろぞい」「イヤさう案じた物ぢやない、今の殿下久吉様は、元が奴の二合半、それがあの様に立身して、六十餘州を取られたりや、誰が出世しよまいともいはれぬぞや」「チ、それ、待てば甘露の日の本は取つたれど、又三韓を攻取ると、能ある者は大名から欲しがらるけな。物を書かぬ者といふか、大飯喰ふとか尋ねて來たら、鎗突かすまいものでもない。夫に付けて思

ひ出した。こちの村の六助、兵法がよいけなの。其上に力が強い。柴と云やこちらが五六荷を一荷に束ね、長濱まで日に五六度。其癖形に似ぬ孝行者、方々から抱へうといはしやつても、母親の傍離れるがいやぢやてゝ行かぬとは、きつい籠相の。此様な働きせうより、百貫ましの侍商賣、おいらなら行のうにな。ヤたんと休んだ、サアいの」と、打連れ坂を下り行く。古木回、岩雲に聳え、羊の腸の坂道も、平地と歩む六助が、柴荷をおろす鳥居前、木の葉つまんで乾手水、宮居遙に禮拜し、岩頭に腰打かけ、「ドラ一ぶく致さう」と燧かちく吸ひかける、煙草のけぶり風に消え、空に知られぬ鳥一羽、はたりと落ちる膝の前、怪しと見れば諸翼を、矢に縫はれたる山鳩なり。「ハ、アしたり、獵夫のねらひ外れ、翅ばかりをとちけるよな。六助が目にかよりしは、運命いまだ盡きざる此鳥、放してやらん」と矢を抜けば、さも嬉しげに羽叩し、雲井遙に飛去つたり。「ハ、ア悦んで飛ぶはく。ヤ我等は宿に歸らう」と、荷を擔げんとする折から、半弓携へ岨陰より、二人の武士がうろく眼、六助を見て互に目くばせ、中に取込め、「ヤイ下郎め、うぬぢやなく、殿のお鷹の餌に射た小鳥、何で矢を抜き放して遣つた。返答あらばぬかさう」と、切刃廻せば手を摺りもみ、「どなた様か存せねど、御狩の鳥と存じたら、モ何しにか様な不調法。只獵人の射損じと、何心なく右の仕合せ。下司の智慧は跡でのお詫、眞平御免下

され」と、詫ぶる弱みに猶付け込み、「ヤアならぬく。殿の御用をかけた備、館へ引立て親明する」と、左右一度に引立つる、二人が手先をしつかと留め、「イヤモ幾度もお詫いふ、御了簡下されよ」と、放す手よりも引くはずみ、儕が力で尻餅突き、せきに赤面鐔打叩き、「ヤイく諸侍を投たぞよ、ヲ、手向ひをひろいだな。下司に似合はぬ生兵法、ぶち放さん」と抜きうしの、刃先をひらりと又腕首、取られて骨も碎るばかり、「アイタくくくうぬこりやどうしをる、何と仕をる」「何とも致さぬ。お詫言聞分もなく刃物さんまい、あなた方にお怪我がなうても、私が身に凶事あつては、宿に居ます獨の母、路頭にたちまち飢渴の難、跡の歎を推察下され、只幾重にも御堪忍」と、いひつよくつと一握り、手先しびれて取落す、白刃と五體山路に、どつさり二人が打返され、はふく起きて、アイタくくとしかみ頬、「エ、くく重ねく、投げたぞよ、弓矢八幡聞かない、と云ひたけれど、鳥から起つた意趣だから、放生會だと思ひ助けてくれる。以來我々投た杯と沙汰致さば、赦ぬ程に覺えてをる。サア榎竝一學殿」「イヤ先早川兎毛殿、お互に御苦勞」と、負けてもさすが侍の、行儀崩さぬ兩人は、弓矢拾うて立歸る。六助は跡打眺め、「扱もくこまつた衆達、ガ、アノ無得心な心もなくば、人の國を奪取り、合戦もしられまい。此身に怪我也恙なう、いぬるも彦山權現の、神の力」と伏拜み、「母者人が嘸待ちかね、ドリヤ歸

らうと著物の、塵打拂ふ後の方、「ヤレ暫く」と聲かけて威あつて猛き武士一人、傍近く威儀を正し、「某は當國の隸臣、名は轟傳五右衛門。イヤく苦しい、お手上げられよ六助殿。武術力量兼備へ、九州無雙の譽れ高く、主人立花修理太夫、召抱へんと頻りの懇望、さるによつて先刻毛谷村に立越え、貴殿の宿所に至りし所、此山中にと承り、参りかゝつて今の様子、恐れ入つたる貴殿の舉動、誠や千鈞の弩は驢鼠の爲に其機をはなたず、相手ならざる相手に構はず、詞を卑下して無事を計る心の度量あつぱれく。今より我に伴つて、主人が館へ御入來下され、弓矢を補佐したまはらば、大悦ならん」と大身は、大身だけに身を吹かぬ、胸の器量ぞ奥床し。六助は氣の毒顔、「これは又きついおなぶりなされ様、獨の母さへ養ひかね、漸小柴の荷ひ賣り、未熟な藝が御目に留り、面目次第もござりませぬ。中々一つも武家方のお役に立つべき者ならず、此儀は斷つて御用捨と、媚語はぬ魂を、見込む程猶かうばしく、「サアく徳を包むは賢者のならひ、御尤とは存ずれども、夜光の玉は下和が極め、貴殿の才器は見抜いた某、殊更近々異國攻、軍用士卒に事かゝねど、只乏しきは軍師の器量。拙者が詞承引あり、何卒御入來下さらば、虎に翼を添へたる幸、いかなる異國の大軍も、敗るにかたき事あるまじ。サ、御用意」とせき立つれば、六助はむつと顔、「ア、置かしやませいの、あたしつこい。何は扱置

き其合戦がマア不得心、手一合でも主取りすりや、叶はぬ場所の命がけ、死んでは親を歎かず不孝、祿も知行も國郡も、親に見替へる寶はござらぬ。奉公する氣はつゆなし」と、けんもほろよに取合はず。「フンすりや何と申してもや、ハテ是非もなし。其孝心をもつて君に忠義をなしむならば、王蠋季札が節烈にも、をさく、劣ぬ國の寶、あた文武の弓取を、招き得ざるも主人が不運、強ていはんも孝心を妨ぐる不遠慮、もしも老母百年の壽命を持ち、身を終られても有るならば、其の時他家の君にまみえず、必ずとも拙者にたより、主人がもとへ御入來下され。轟がけふの貴殿へ頼み、無下にし給ふ事なかれ」と、云捨てたつか弓取の、心は諸葛孔明を、草蘆に訪ひし立徳に、劣らぬ才智大國の、幅を見せたる家老職、山下をさして歩み行く。跡を眺め横手を打ち、「テモよき侍もあるものかな」と、感じ入り日の照りかへす、森の蔭より、「六助六助」と呼ぶ聲に、邊り見廻し、「フウおれを呼ぶは何所から」と見やる茅原かき分けて、誰としら髪翁の姿、頭に烏帽子身に白張、杖にすがりて顯れて出で、さもやごとなき御聲にて、「いかに六助、萬石の祿を辭して一人の母を養ふ、孝心といひ義心といひ、慈悲正直を元とする、神の冥感淺からず。我は高良の神の使、此一巻は汝が好ける、劍術奥義を記せし秘卷、只今授與ふる間、家に歸つて開き見よ、四海を撫づる劍の威徳、皆其中に有るべし」と、差出し給へ

ば押戴き、悦ぶ隙に神隠れ、翁は見えず成り給ふ。六助感涙肝にしみ、「チエ、有りがたしく、日頃望みし此一巻、神より授け給はるとは、忝なし」と押戴き、心も空に飛ぶ鳥と、俱に我家に馳せ歸る。跡へ以前の二人の侍、「先生は何所におはす、先生々々」と呼ぶ聲に、かしこの方より件の翁、歩み出でたる目前に、両手をつかへ謹んで、「御存念首尾よく達し、才力奇絶の六助に、印可を御傳授相濟んで恐悦至極」といふ聲押へ、「シイ音高し人や聞く。望足りぬる此上は急いで國に歸らん」と、烏帽子かなぐり身に纏ふ、白衣を脱けば神人と、見えし姿は一味齋、杖突く音も衍して、今一聲の郭公、待たねど暮れし山路を、本國さして歸りける。

第二二

周に服せぬ頑民も、般には忠の至れるをや。長門の太守郡音成、眞柴に引きし弓取も、時代に靡く武威強く、殊更今度三韓を攻伐つも君が御名代、家の眉目と一家中、賜はる酒の杯盤も、狼藉にまで賑はへり。けふ一日は下々に、御庭拜見赦さるよ、白洲にとやく、立ち止り、「ナウ皆の衆、何所を見ても結構な事ぢやないか、お泉水の石一つでも、大まいの小判道具と沙汰聞いて、おらは魂消果てたはよ。お目出たなりやこそこんな所、長生すれば徳得ますらよ」「チ、テ

ヤ、此お目出たの根を問へば、元が奴の久吉様、打つては勝ち攻めては取り、亂を鎮め太平にさつしやつたは、きつい其身の大功ぢやてよノヨ、あなたを大功様といふはヨ。其大功様が唐を取るとよノヨ、軍の名代此殿様がさつしやります、重い役目を請取らしやつたも、運のお強い故でノヨ。それでけふのお目出た様ぢや。廣い日本が取足らいで、唐までも取らうとは、武士の腹といふものは、分なものぢやないかいの」「チ、扱あなたに限らず侍といふものは、よき敵と見りやあの首取りたい、よい國と見りやあの國取りたい、常住丁どこちとらが、女見た様な氣持ぢや」と、仇口々に奥庭へ一群にこそ歩み行く。跡へ白洲へつよかつか、杖も檜木の房州と、二字をしるせし三度笠、立ちほだかつて見廻しく、「テモとんだイ普請、何所もかしこも金物と箔づくめ、何の事ねい御門徒宗の佛壇を見る様だ。大名にや何が成る、金のなる木も有るかい」と、羨しげに立つ折から、一間洩れ来る笛鼓、亂舞の調音も高し。「ハ、ア聞えた、けふは家中の無禮講、此別館で藝盡があると聞いたが、チ、それだく。漸此頃治るともう早亂を忘れたほどへ。イ、ヤそれも何の構はぬ事、是から奥のお庭廻り、拜見すべいと遣水の、岸を傳ひに歩み行く。奥座敷にもふ勢がいやくとつと響むる聲、鷹の間の襖開け、出づるお菊が舞の袖、汗拭ふやらあふぐやら、妣どもが寄りたかり、「ナウ千草、面白い事ぢやなかつたか。慶子の所作も

及ぶまい」「イヤもうく、及ばぬ段か、器量なら舞ぶりなら、天津少女の舞の袖、天人に見せて
 悔りがさして見たい。御臺様にも殊ない御褒美。衣装直すはわしらが役、そもじはそこで緩り
 つと、汗入れる間の咄し伽の情郎様を今爰へ、おこすもわしら仲間から、そもじへ花の縫小袖
 手々に持つて入りにける。夫としも、犯せる事はなけれども、戀には人目忍び足、一間を出づる
 彌三郎、見るよりこなたは飛立つばかり、「逢ひたかつた」と寄添へば、「コレ又邊の人目、忍
 ぶ戀路を見付けられ、どう云譯をする氣ぢや」と、呵られて涙ぐみ、「サア其逢ひ見るも常々は、
 堅い屋形のうち解けて、逢ふ夜まれなる七夕の、織女様も此様に、思ひこがれてござるかしら
 ぬ。ふたりが中の彌三松を、生落したも四年前、姉様のお世話になり、古う勤める友平が、里に預
 けて育つれど、それから後は奥様の、御傍離れぬ奥勤、嘸可愛らしう成つて居よう、尋ねて居
 よう慕うて居よ。顔が見たやの思ひ子も、思ふ夫も他人向、我夫よとも我子とも、いはれぬ様なあ
 ぢない、縁が世界に又あらうか。人目忍ぶの戀草も、日陰に枯れる身ならずば、假令虎臥す野邊
 なりと、親子三人居て見たい、思案してたべ彌三郎様、わしや手枕の現にも、忘るゝ隙は」ない
 じやくり、譯もなみだにかきどく。「ヲ、さう思やるも無理ならねど、儘にならぬが浮世のな
 らひ、縁と月日はこゆるぎの、いそがば廻れ其内に、仕様もやうも有るぞいの」と、云ひつゝ

じつと引寄せて、雪の手先に柵みし、妹背わりなき折こそあれ、花に嵐の足音とんく、驚くこ
 なたはさあらぬ體、仲間一人白洲に踞ひ、「猿の眞似する小童を連れたる下郎、今日の御遊の
 折から、何卒悴が舞の一手、上々様の上覽に入れたき望み、御門へ参り相願ひ候が、いかど計
 らひ申さん」と、伺へば彌三郎、「ホ、幸奥様も入らせらるれば、一入のお慰、早く通せ」の下
 知を受け下部は御門へ走り行く。斯くと披露に付々が、數多傳き眞弓の方、座に著き給へば舞
 童、頓て御前に立出づる、五つばかりのうなる子が、髪も二葉の抓鬮、抓からけの愛らしく、
 猿の面を氣さんじに、白洲にこそは走り込む。跡に付添ふ男が高聲、「コレくくく、何ほ疊敷た様
 なお庭でも、そない走つて躓たら、手々や膝ほん摺むきましょ。ハイくソ、御前ぢやく、
 居しからしやれ」「ハア」と手を下げ踞ふ顔、一目見るよりお菊が悔り、ヤア友平か、預けたる子
 はそれかともゆふがほの、立寄らんにも御前の手前、差扣ゆれど大方は、上にもしろし召さるら
 ん。下には男が杖しやに構へ、「ハイ廻らぬ舌で一寸申上げます。此猿めは生れ落ちるから、爺伯
 も母御もア、イヤ、親猿のない正眞の木から落ちた、孤猿でござりますが、此小猿にたつた獨の
 伯母がござりまするが、此伯母猿がモウくくく、それはく、竝大體の世話ぢやくござりませぬ。
 其でも親子の縁と申すものは、厚いものでござりまして、とよ様が見たい、かよ様が見たいと、

常住親をしたひます其いとしさ。今日は無禮講に多くの人の入込み、もし其中に能う似た人もござりましょかと、それ故ハイ、連れて参りました。只今舞はせませするも、たつた三日の稽古でござりますれば、不調法がちでござりますれど、首尾能く舞ひおほせましてござりませうなら、外に何にも望みまする儀はござりませぬが、御褒美には此猿めを、抱ておやりなされて下さりませ。サア、猿殿、コレイナウ、さりととは、きよろしくした太夫では有るはいの。ガ又見たがるも無理ぢやない、親御は傍に有ながらハ、イヤ、ハ、、、母御によう似た伯母様が有るかてて、子供と云ふものはテモ扱も、扱もく、扱も目出たの秋津洲や、こがね升にて米はかる、米はかる。ひんだの踊は面白やく、「べいよ、かよ様やとと様に似た、伯父様や伯母様はどれぢや」「コレ、くく、無理云ふまいぞ、舞うて仕舞うたら跡でべいがいうて聞かす。舞うたりく。ウタよさの泊は何所ぢや、おらが内にて袖枕、乳房ふくめる親もなく、子も泣く、おらも泣く、なけど慕へど名のられぬ、名のられぬ、ひんだの踊は面白やく」舞ひをさむれば、眞弓の方は御機嫌よく、「年はも行かぬ稚子に、教へも教へ舞ひも舞うたり。付きし男が言の葉に、かく竝んだる其中に、母によう似た伯母の有るとや。した子よりもしたはると、親の心は嘸や嘸。ナウお菊彌三郎、そち違ふたりも今の間に、似合の縁の妻夫、設くるやよの抱きならひ、抱い

て見るのもよからう」と、情の底意奥深く、入らせ給へば娘ども、「サアこれからがこちの世ぢや、其子爰へ」と縁の上、抱上げさせて取廻し、「色もくつきり、手や足の尋常さ。年はいくつ」「アイ、是程」と右の手の、指ひろぐれば、「五つかく。そしてかよ様はどうしやつたぞ」「アイわしやかよ様もとと様もない、よう似た伯母様や、伯父様を見せるてよ、べいが爰へ連れて来た」「チ、可愛さうに孤か。こんな子産んだ母御なら、嘸器量よしと思はると。能う似たと有るからは、わしであるかの」「イヤ」そんならわしか」「イヤ」そんならやつぱりわしである」「イヤ、おれがべよと、アノ伯母様のべよと一つぢやによつて、外の伯母様はいやぢや、アノ伯母様に抱かれたいと、いふも天然親子の縁、傍にかけ寄り抱付く。彌三郎も聲うるみ、「テモ利口な小猿め、抱いてやれよと奥様も、お赦しの上誰か咎めう。親とまがへてしたふ其猿、心ゆかしにとつくりと、抱いてやられよお菊殿」と、いふは抱きたき百倍の、思ひも一つ兩の手に、菊が引寄せ引きしめて、わがみの様なよい子をば、孤となし置く露の、たまに逢ひ見る顔だにも、親とも子とも名のられぬ、邊りの人目横障の、雲の隔てしうさつらさ、餘所にかこつぞいぢらしき。縁の下には友平が、浮む涙をすりこすり、「親の子を思ふ程、子は親を思はぬものとは、此子から見りや、諺の間違ひ。どなたもお聞きなされて下さりませ、子細有つて其お子は、人目を包

む預り物、親御がないといふぢやなし、逢はせたうても見せたうても、儘ならぬ浮世のならひ、隠し育つる葛屋茸、場せまい住家の背戸門を、よその子供が母親や、爺親に手を引かれたり、抱かれて通りや、けなりがり、べいよ、おりやと様やかと様はなぜない、とと様に逢はせ、かよ様へ連れて行け、行きくされと、だよける子を、漸すかして寝さすれば、現心にお袋と思ひ違へ、べいめが乳の山椒粒、抓んで見ては目を覺し、かよ様くと、泣かしやる時のいぢらしさ。イヤモウ是を思へば親子の継程、せつない、哀な、いぢらしいものはござりませぬ。是を思へば、釋迦如來様が、浮世をいとひ捨つるには、女房持つなとおつしやつたとは、身にしみくと尊い教、親達の心の内も、チ、推量して居りますはいくく。けふは殿様のお目出たで、無禮講の御遊もあり、お庭拜見御免の噂、承つた嬉しさも、打通りではお庭ばかり、どうぞ爺御や母様に似たお二方のお顔をにつしりと、見せたいの思ひ付が、枕を割つた猿の舞。其覺えのよさとした事が、たつた三日で、お聞きなさいたつた三日、モ僅な日數で覺えさしやつたも、器用でも利發でもなく、おとと様やかと様に、ぢやない似たお人に、逢ひたいと思ふあの子の一念。眞實の子の様に思つて、抱いてやつて下さりませ。コレほん、日頃夜も晝もこがれさしやつた程、とつくりと抱いて貰はつしやれ」と、いふも眞身の友平が、せつなき咄傍に聞く

妣どもも諸共に、思ひやつたる貰ひ泣、涙もろきは女かや。一間の内より彌三左衛門、奥方の賜手に捧げ、しづくくと歩み出で、「彌三郎、殿に召さると御用ぞあらん、行けく。お菊殿もいづれも奥へ」と、厳しき父の一言に、底氣味悪く彌三郎、其場を立てば一同に、皆打連れて入りにける。彌三左衛門持出でし、臺の物縁に差置き、「緋縮緬五卷金子の包、稚き者へ下さるる、有りがたう頂戴せよ。ドレ小兒爰へ」と膝近く、「そちが名は何と云ふ」「アイ彌三松」「ナニ彌三松とな。デ顔見せい。フン額のかより、目の張は爺親めに生寫し、瓜實顔は母に其儘、テモ能う似たなあとサ、誠の祖父が傍に居ば、嘸斯くいふで有らうもの。殿のお影で祖父祖母も、親も出るには供に供。それに引きかへみすほらしい、まめな可愛顔見たりや、嬉しうて恨めしかる。寡では果さぬ盼や娘、思ひ初めたら初めた時、親へ打明け云ひをつたら、表向から三々九度、可愛い孫を世間晴、抱いて眺めて樂むはい。ハ、ハ、ハ、我子か孫でもある様に。ヤそな男、秋に音する萩の葉も、おのが身からは音せねど、風がわやくでナ、わやくいはうと見たがると、逢ひつ見させつする程は、餘人の目にもよく見ゆる、さすれば孫子が不便でも、云ひまけられぬお家の掟、大事に掛けて連れ歸れ。身も歸らう」と弓取も、迷ふは血脈稚子を、連れて二人は打しをれ、俱に我家に歸りける。お菊は恩愛稚子を、今一目見たき間の戸を、開けて立出る後より、伺

ひ居りし京極内匠、「コレ〜お菊殿、出来ますの〜」
 「チ、内匠様何ぢややら、出来ますとは何が
 ないな」コリヤ又きついお隠し。こつそりと子まで設け、イヤモ舅殿の粹さ、當世〜。花も恥ぢ
 らふあてやかさ、引手数多は元より推察。ガ戀は心の外々に、何ほ男があると儘よさ。日外ふつ
 と見初めてから、思ひに瘦せた此京極、叶へてほしい」と抱付く手先、漸に拂ひ退け、「エ、めつ
 さうな事ばかり。ざれに事かき役柄の、重き身ながら不義徒、事顯はるれば身の上に」チ、
 成るの合點。惚れかよつたら金輪際、くどいて〜くどき抜く、扶持も知行も塵芥、おうとさ
 へいや連立つて此所をほい、都へなりと東へなりと、立退く思案、内匠が心底、何と憎うはあ
 るまいが」と、立寄る折から一味齋、そぶりは見れどさあらぬ體、「ヤイ娘、そちや何用で是に
 居る。年わかき女の端近、悪名請くるもとると知らぬか。行け〜」と追ひやつて、「ナニ京極
 氏、貴殿と我は殿の御師範、國に二人の劍術と、人に知られし身の放埒、人なき折を幸に、御
 異見申す、止りめされ」コリヤ老人の深切至極、忝い。ガ聞く氣ござらぬ、いやでござる。さうお
 手前が知る上は、もう隠さぬ〜、貰ひたい。イヤサ息女お菊を我妻に申請けたい。吉岡殿」
 「ヤアだまり召され。掟を紊つて色に溺れ、法に背きし今の一言、上意に達せば明日をも知れ
 ず、腹切る御邊に連添はす、娘は吉岡持合はさぬ」スリヤ承引はどうあつてもや」ハテしれた

事を。麒麟の子を鼠が念がけ、妻に仕たがる望事、叶はぬ限り」と苦笑ひ、襖引立て入りけれ
 ば、「チ、承引せねばうぬが首、娘に添へて請取る」と、かけ行く京極、かけ出る藤藏、「マ、〜、
 お待ちなされ先生、様子は小蔭で承つた。御立腹は尤なれど、今先生が手を出されては、戀の
 意趣討人聞悪し。恨を晴す趣方はの、コレかう〜」と耳に口。「フン實に尤、きやつと御前の試
 合を望み、ぶちすゑた上てつべい押」
 「サ、手に入るお菊はお前の奥様、一家となれば恨はさら
 り、こつが斯うして行かぬ時は、仕様もやうも又様々。せく所ではござらぬ」と武士の道より内
 心の、邪智に勝れた兩人は、點頭き伴ひ入る跡へ、又これ老いて矍鑠たる、投化の夷人木會
 官、何かしら木の箱物を、手に携へて入來れば、「ソリヤ唐人が來たけな」と、追々出て來る
 娘ども、物見高いは常なれや。木會官立向ひ、「いよきいちゃんやあこはん、いつるつし
 てさいたくとうらい、しいらい〜」とこそいひいるよ。娘どもは顔見合せ、「ホ、〜、久
 しい物ぢやが、アリヤ何といふ經ぢやいなう」チ、あれこそ本のちんぶんかん、譯は知らねど推
 量が、器量のよい同士此様に、竝んで居るを唐土の、おだて文句で有るまいか「イヤ〜、も
 しもあれが物申といふ、案内詞の唐様なら、聞流しては越度の基、マア〜御前へ此通り」と、案
 内に連れて一間より、月の眞弓のにはやかに、立出で給ふ御姿、見るよりハツと低頭平身、恐

れ入つて躡れば、奥方斜に見やり給ひ、「ホチ過ぎし頃長居の浦邊にて、初めて目見えし三韓人、まめやかな體悦ばし」と、仰の下に額をもたけ、「誠に其節願ひしごとく、異國攻伐の統戎たる、音成公の武徳をしたひ、歸降を望む木曾官、一度相見し機縁をば捨てられず、宜しく御披露下されば、味方に先驅け異國の案内、あつばれ三韓八道を、御手に入れんは瞬く内。則是こそ彼國の、山河を縮め盡し地理の圖、拜謁の印として御覽に備へ奉る」と、件の箱物恭しく廣縁に差置けば、「ヲ、夫こそ我夫かねてより、望み給ひし韓の繪圖。それく、此由申せよ」と、宣ふ聲の内よりも、「聞いたく」と太守音成、悠々と褥に坐し、「誠や蕭何相府に地理の圖をとらずんば、子房賢しといへども計略成らじ。いしくも手に入る此一巻、とても望木曾官、猶もくはしく物語り、聞かしてんや」と有りければ、ハツと領掌庭上に、目に見るごとく述べにける。「先日本は五畿七道、我三韓は八道にて、全羅慶尙京畿道、是は日本の五畿内にて、帝の在す都なり、其外うるさんとくねぎ城、船のかよるは釜山海、味方の船を爰にとどめ、手いたく攻入る程ならば、久しく治まる世に馴れて、戦ひ不得手の三韓勢、立つ足もなぐちりぐに、逆ぐるを射止め搦捕り、首の代りに切る耳を、御大將へ御土産に、上ぐる勝軍、只手の内に候」と、申上ぐれば音成夫婦、「實にいさましき物語、奇なる畫工の手際や」

と、目枯もやらす見る折から、かたへに忍ぶ以前の道者、しけみを這出で地理の圖を、こはくそつと差覗き、我を忘れて高笑ひ、「ヤレくをかしや、此繪はきつくわいな嘘八百、此様な物を持て來て抱へられうとは、ハ、ハ、ハ、太い仕事」と嘲笑ふ。木曾官大に怒り、「ヤア大切の圖をさみする曲者、うぬは何やつ何國の匹夫」ヤモ何所の者として身はしれた關東者、先年堺の小西へ行つて、誠の韓の地理の圖見た。コレ此繪圖は山を川、難所を平地とまつかいさま、不審の晴れぬ捧け物、皆様油斷遊ばすな」と、云ひも切らせず木曾官、せき立、佩劍扱く手も見せず、只まつ二つと切付くる、白刃を杖にて丁ど受止め、「其手ぢやちつと行かない」と、刎ねれば付入る二人が争ひ、近習が聲々、「殿さまのお目通り、しづまれよ」と制すれども、聞かずひるまず戦ふ有様、音成怒つて、「ヤア誰かある、我が見る前とも憚らず、兵刃を振ふ不敵の兩人、搦捕つて引きするよ」と、下知にかけ來る吉岡京極、「御上意なり」と大音に、肝取りひしぐ武の威光、夷は内匠が手に搦め、道者はつひに一味齋、くよし上げたる其折から、「久吉公の御成」と、白洲に入來る究竟の武士、手に捧けたる太刀一腰、恭しく座に通ひ、「某儀は久吉の郎等櫻井新吾、此太刀、先君春永在世の時、片時離さず帶せられし、蛙丸と名付けし尤物、君を弑せし明智が叛逆、本能寺の大變聞えしは、此地に軍をいどむ陣中、當家の大軍虛に乗つ

て後を討たば、山崎の一戦難かるべきに、安々明智を討ちし事、偏に和睦を承引ありし、音成公の情によれり。高義を謝する此一品、けふのお成の土産として、進上の御事なり」と、使者は云捨て座を下る。音成謹んで太刀押戴き、「コハ有りがたき御賜家の面目此上や候はん。シテ、御大將は」「ホ、ヲ眞柴大領久吉、それへ行きて對面せん」と、思ひがけなき件の道者、繩引ほどき笠かなぐり、忽替る貴人の勿體、衣服改め寛然と、設けの席に座し給ひ、「誠や久吉、愛智郡の土民に産れ、今日本を併呑し、武將と成るまで其間、草履取より押上り、柴田が肩の按摩取、賤が手業の種々様々、せざる辛苦もなかりしかど、繩かよつて見しは初めて。運盡き擒となる族、嘸口惜しく思ふらん、ハ、、、。さるにても一味齋、我を捕へて高手小手、くくし上げんと思ひの外、繩を纏ひしばかりにて、小手をゆるせし所存を聞かん」「ハ、ッ恐れ入つたる君の御説意、貴き事天子につどき、富四海をたもたせ給ふ、君とは存じよらねども、胸に徹する貴人の相好、繩とる腕もしびるよばかり」「フウそれ故小手をゆるせしとな、面白し。ナニ京極内匠とやら、そやつ異國の紛れ者、尋問ふべき子細あれども、なかく一應再應では、白状すまじき頼魂、刃物を奪ひ桎梏を厳しくし、獄屋に繋ぎ置くべし」と、上意に猶豫なは付を、引立てく入りける。太守重ねて威儀を正し、「數ならぬ愚臣が茅亭、御沓を入れられ

下さる事、大悦此上や候はん。僮末ながら奥殿にて、一獻すよめ奉らん、渡御なし下し置かるべし」と申上ぐれば御大將、「ホ、淺からぬ深切、辭するは無禮。然らば其意に任せん」と、仰嬉しく奥方も、御案内とて諸共に、座を立ち給ふ其所へ、衣川彌三郎あわたしく罷出で、「三韓の木會官、獄屋に繋ぎこれ有る所、いかなる術をかなしたりけん、縲紲の繩目も脱け、眞弓の方の守り刀、奪取つて行方知れず。申譯の爲切腹御赦免下さるべし」と、願へば音成顔色變じ、御大將の御氣色を、はかりかねたる色目を察し、「衣川とやら、小氣なる若者、曲者一人逃せしとて、腹切らんとは犬死々々。侏離鳥言の夷貊のわざくれ、遁れ去ると何事をかなし得ん、聊心を勞すにたらず。今死する身を生きながらへ、三韓攻の軍中に、明兵數百の首切かけ、異國に揚る譽をもつて、けふの過償はんと思はずや」と、人を殺さぬ寛仁大度、胸は江河のはかりなく、滔々として弓の、矢に似ずゆがむ心より、心苦しき京極内匠、白紙に包む願書を、縁に差置き平伏せば、音成手に取り逐一披見し、「ナニ内匠、此願書は一味齋と試合の勝負が望みとな、善からぬ願ひ、一方勝たば一方は負けたる恥辱、音成が領地に足は留め難からん。三韓征伐近きに有れば、武士一人も惜しき時節、これを計つて此願ひは取上げぬ、差控へよ」「ハッ御意を返すは恐れながら、勝負は時の運による、手強き相手を乞望むも藝道の勵み、

第一は、臆て異國の戰場に敵を引請けかけ惱ます、腕だめしとも存すれば、何卒御免下さるべし」と、猶押返す下心、邪智とは知れどさあられぬ音成、「フン一理ある申條、然らば一味齋を是へよべ」ハツと近習が主命に、座を立つて行く程もなく、劍は一人に敵する極意、胸に甘なふ一味齋、しづく御前に伺候する。「ホ、ヲ早速の入來大儀、召寄せし事別儀に非ず、則夫なる京極内匠、其方と試合を望み、差とむれども是非との願ひ、老體といひ苦勞なるべきが、いなまず汝立合はんや」「コハ有りがたき慈愛のお詞、老いさらほうては候へども、打物取つては百萬の強敵も、秋野にすだく蟲とも存せず。御上意でござらうならば」「ムウ辭退せず立合はんとな。然らば兩人試合を許す。殊には殿下御座の間近し、よく致せよ」ハツというよも我慢の内匠、肩衣刎ねかけ、「サア一味齋、御免の出た試合の勝負、急ぎ支度を致されい」「イヤく劍法は油斷を敵とす、試合を常、常を試合の場とするが八重垣流の心の取方。スハ立合といふになり、ことくしき支度立、不意に敵はなきものは。ハ、ハ、ハ」と、早勝色を顯はせし、木太刀を菊が持出でて、直すも父の利運をば、弓矢神への心の祈誓。其外茶の間仲居まで、傍に居流れ勝負を、皆「吉岡の親父様、勝つてもらを」も常からの、實な氣はひを請けて居る、最眞連中と知られけり。「イザ參らう」と兩人は、作法の式禮太刀の傍、寄るより早く立別れ、

ヤアくくくと互のかけ聲、内匠いらつて打込む太刀、心得たりと請流し、又打ちかよる一味齋、京極透さす身をかはし、付入り付込む上段下段、時移るまで打合ひしが、何とかしけん一味齋、太刀筋弱つてたぢくく。「勝負は見えた一味齋、あつばれ見事」と音成の、賞美の詞に一昧齋、ハツと其儘平伏す。傍に内匠が不興顔、「コハいぶかしき殿の御上意、眼前見えたる試合の勝負、拙者負とは其意得ず」と、いふをいはず、「ヤオレ京極、今の試合を勝と思ふか。其身に纏ふ衣服を見よ、二太刀めには左の紋、四太刀めには右の紋、一味齋が打つたる筈、眼に當らば瞽とならん、咽を打たれば即座の最期、死骸と成つても戦ふか」と、理非明白の判斷に、ぐつともすつとも京極が、拳を握り無念の思ひ。音成重ねて、「ホ、惜むべし一味齋、今少し年若くば、三韓攻に一方の大將ともなさんず器量、ヘエ、残念々々。當座の褒美一千石、汝に與へ遣はす所、相違なき條譽をば、子々孫々に傳ふべし。ヤイ内匠、今の恥辱に音成が、勝負をとどめし所存の底意、一々思ひ當りつらん。過つて改むるに憚らず、以來晝夜に勵を加へ、軍馬の前の忠節こそ、此上ながら肝要」と優美の詞諸共に、下る御簾は一面の、青雲とこそ隔てけり。跡見送つて一味齋、忘れがたきは主君の重恩、エ、忝しと三拜し、「イヤナニ京極殿、只今は不調法。ヤモ闇の筒先まぐれ當り、必心にさへられな。後刻御意をば」えいぐわの花、藝に

咲かせて立歸る。跡に無念と京極が、胸はむしやくしや眉に皺。奥よりさし足藤藏が、傍に立寄り、「コレサ先生、今更何の思案顔、重々憎き一味齋、ぶつ放して遺恨を晴すが一番近道上分別」「シイ音高し壁に耳、きやつも討ちたしお菊もほしよ。フ、斯うつ」と、巧む心の奥の間は、又も御遊の亂舞の響き、庭に二人がしめし合ふ、武士の性根の亂拍子、打連れ奥へ、入相の、遠山寺の鐘の音も、花に心をおく御殿、木々の梢に風断えて、草もゆるがぬ廣縁先、小山のごとき磐石にて、造立てたる手水鉢、ゆるぐと見えしが引かづき、顯れ出づる木會官、おどろの白髪三千丈、髭ほうくくと眼の光、星と輝くその有様、奥を目がけて歩み行く。上段の間に銀燭臺、點し立てたる中央に、飾り置きしは紛ひなき、小田の重寶蛙丸、「してやつたり」と立寄つて、抜けば新刀の次刀、飾り置きしは謀計もや。「エあらふと儘」と細瑾に、構はぬ不敵投げはふり、「今度はゆるす久吉音成、不日に來つて頭を取らん、待つてをらう」も獨言、のつかくくと行く先に、道を遮る茅の穂先、「シヤこしやくにも巧みし」と、見返る跡も鐘襖、取巻く逞兵嘲笑ひ、「ハ、、、しやらくさき蚊蜻蛉めら、苧莖にひとしきへろく、鎗、我鐵身に立つべきか」と、手を拱いて幻術の祕文、唱ふる聲と突かくる、鐘は一度に折れ飛んだり。驚きながら屈せぬめんく、組んでとらんと柄を投捨て、かよるを捻首腕引きぬき、一

度にかよれば人礫、搦んで庭の立石に、打付けられてひつしやく、群る蜘蛛と碎け死に、さしもの多勢溜り得ず、さつと一度に引退く。「ハ、、、追はぬ敵に逃ぐるく。ヤア隙入や」と、ゆふ闇に、人なき野邊を行く如く、歩むこなたの一間より、「曲者待て」と高んらか、胸にぎつくりこたへしが、打捨て猶も出行くを、「イヤサ、三韓の降將木會官とは偽り、先年小田の天下を掠め、山崎に亡びし明智が賊黨、四方田但馬守、とどまれやつ」と肝先に、鳴る雷と應ゆる大音、さしもの強勢百練の、鎖に足を繋ぐが如く、覺えずしらすたぢくく、はせ戻つて檻外にくつと詰めかけ、「異國に生立つ木會官、明智が殘黨なんどとは奇怪至極」と、いはせも立てず、「いふな但馬、酒を盗む者は色に顯れ、香を盗む者は香に顯る。山崎合戦の大崩に、岸田が一矢射削つたる、矢疵の跡は左の高願。四方田と呼びかけしを、我名にあらで見返るべしや。討死せしと披露させ、其身は異國に年積り、不日に三韓征伐と、聞くと等しく此地に渡海し、山を川、嶮岨を平地と欺く地理の圖、日本の大軍悉く異國の難所におびきいれ、鑿とせん計策とは、見抜いた推量違ふまじ。子尸諸葛は欺くとも、此久吉を謀らん事、及ばぬ巧」と大やうなり。「ホ、チ道の久吉あつばれ眼力。が明智天下を掠めしと、我を唱へて賊徒となす、汝が身の上知るや猿冠者。春永甲州退治の折から、快川國師を焼殺し、種々の惡政見るに忍びず、主人光秀數度

の諫言、用ひぬのみか鐵骨の、扇に額をぶたれし恨み、本能寺にて亡せしは、武に逞しき弓矢の本懐、汝却て春永の之恩を蒙れども、其主の子を幕下に屬け、小田の天下を横取する、國賊とは儕が事、其下に働く大名めら、手下とやいはん同類とやいふべき、儕々が分に應じ國郡の分取。盗人原の大將久吉、人を稱へて賊となし、盜賊の成敗せば、うぬが首からまづ勿ねよ」「ハ、ハ、ハ、ハ、能く水飲めども満腹に止る、小さき眼にさこそ思はん。先君不慮の落命より、時日移さず仇を討ち、民を案んじ王位を守護す。春雄春信其徳なければ、是非なく國家を治むる久吉、汝ごときが知る事ならず」「ヤア多言なり久吉、謀は汝に負くるとも、異國に得たる我帶劍、切味見せんと飛びかよるを、はつたとにらむ大將の、天性御目に重の瞳子、尖き武威に蹴おされて、五體すくばり無念の齒がみ。大將面色なほらせ給ひ、「ヤチレ但馬、嚴顔蜀に降つて英雄の名を失はず、心を改め従はぶ、命を助け召遣はん、サ仕へんや四方田」と、仰の左右に取巻く勇兵、「サア猶豫せば火蓋を切らん、何とく」と詰めかくる。さしもの但馬悪びれず、諸肌くつろけ物をもいはず、腹へぐつと突立つれば、首を搔かんと立寄る兵士、車輪とにらむ怒りの大音、「ヤアじたばたと騒がしい。日本無雙の四方田、うぬらに取らるゝ首は持たぬ」と、罵る強勢、優美の大將、いうくゞと階下におり立ち、疵口とつくと、「見事なり、四方田」と、やと感賞の御

詞。音成一間を立出でて、「先刻よりかしここに在つて、様子具さに承はる、本能寺の大變より紛失したる蛙丸、君が賢慮を廻らされ、質を誠としはうでん、おびき寄せたる其甲斐なく、彼も所持せぬ此上は」「イヤサ異國は知らず、日本は此久吉が下知の下、深山幽谷に藏すとも、手に入れん事案の内、氣遣ひせられそ郡氏。只々をしきは四方田、あたらし勇士」と仁惠の、一言五臓にこたへけん、「チエ、忝き情の一言、最早此世を辭する某、先刻内匠がかけたる繩目、脱出でしは搦人の失なりと、嚙心外に存すべし。我が殿首の介錯を、彼に御下知下さらば、末期の志願此上なし」と、餘儀なく見ゆれば御大將、「ホ、心ある願ひ聞届けた。ナニ内匠はなきか」ハツと奥よりかけ出る京極、遙こなたに手をつけば、「イヤ京極別儀でない。汝が介錯望む但馬、聞き得て遣す、仕てとらせい。事足んぬれば歸らんと、御一言も嚴々たる、智仁勇備の名將に、隨ふ郡 音成も、御見送りの威儀清く、本陣さして歸らるゝ。跡に手負は傍りを見廻し、「ナニ京極殿、今はの際の某が、一言いひたき子細有り。近うく」と聲をひそめ、「誠や往事渺茫たり、明智に數多仕ふる中、わきて股肱と頼まれし、此四方田但馬守、年老いたれども百萬の、敵は蠅とも思はねども、運をはかつて今日只今、覺悟の自害も時刻を延し、頼み置きたき子細といつば、マ、先尋ねん。貴殿稚き時の名は秀丸とはいはざりしや」「ヤこいつ血迷ひしな。我が

出生は備前の小島、父は京極新左衛門「イヤ〜左にては有るまじ。兩目は岩下の電にひとしく、額に一つの喜怒骨は、光秀公の忘れがたみ、親子とて能く似られし、ヤモ健氣にも生立たれしな。其骨柄にて仇をねらはど、やはか仕損じ有るべからず」「ヤア種々の戲言、叶はぬ謀叛我に譲り、逆徒明智が類葉杯と、筋なき汚名を蒙らせ、我が三族を絶す所存か」「義に當つては三族を、絶すも天に叶ふ孝行。能く聞き給へ一昔、春永亡びし其時は、天が下知る惟任將軍。いたはしや光秀公、山崎の一戦大崩れとなりしかば、憂き近江路に落下り、再び義兵の旗上に、けふの恥辱をはらさんと、心はやたけの藪づたひ、闇はあやなき小栗栖村、物の具剝がんと土民めら、ひつそぎ竹鑢猪突鑢、運のつき出す鑢先に、弓手の脇腹すつばと突かれ、さしも強氣の明智殿、急所の疵に目もくらみ、深田にがはとをちこちの、土に武名を埋まれし、無念は修羅の妄執を、晴す所存はござらぬか」と、謀叛の血筋を請繼がす、謀も耳に空吹く風。「返答なきは承引はござらぬの。チエ、是非もなし、承引なしとて此儘置かうか。一念忠義に凝つたる魂魄、こなたの皮肉に分入つて、箆上させで置くべきや。南無や幻法守護神帝、但馬が五體を此まよに、神にさよぐるちかひの牲、日本六十六ヶ國、再び明智の有となさん、我忠誠を感應あり、玄鑑あやまつ事なかれ。ぜんすまるや、さんたまる。はらいそ〜」「ヤア細言吐かずと

くたばれ」と、なぐり情もしら髪首、只一討に刎ねてけり。「サアこれからおらが身の片付け、試合にまんまと負けたれば、此地に足は留められぬ。お菊を連れて駈落の、工面は像て胸工み、但馬が持ちし御臺の刀、後日の用に立ちながら、死骸を蹴やり出行く先、道を遮り彌三郎、「ヤア何所へ京極、御臺所の守り刀、奪ひ立退く不敵者、こつちへ渡せ」と、詰寄つたり。「ナニ小僧めがびくしやくと、主に隙やり出て行く内匠、逢ひたう思つた戀の仇、ようも先陣ひろいな。一味齋めもぶち殺し、お菊を女房に持つこんたん、まづ儕から片付けん、覺悟ひろけ」とつと立つたり。「ヤア重々につつき人非人、者ども來れ」と彌三郎が、下知に群る數多の家來、屈せぬ内匠が手だれの刃先、右へさよへ弓手に當り、打てど拂へど叶はどこそ、危きうしろに冥々と、顯れ出づる但馬が姿、猶も閻浮の幻の術。家來は夢か現のごとく、打付け投付けなやませしは、手鞠を突くに異ならず。死靈の助に京極が、虎口を遁れ門の外、出づる我身も我ながら、怪しと見返る堀の上、すつくと立つたる但馬が姿、早立去れと幽魂の、指さす方は廣小路、冥火に照す道筋を、いづくとも無く三重成りにけり。

第四

元是大内義隆が國衛も、今は中國の手に屬したる周防の國、今度太守の祈願とて、新に建つる石清水、正八幡の宮殿も、日追つて成就する代に、いとど神威や増しぬらん。煙草の休み大工ども、一つ所へ寄集り、「ナント此度のお宮普請、本社から拜殿神樂堂、繪馬堂までが恰好よう出来たではないか。他國は知らず此國に、こんなお宮は外にや有るまい。ナウ藤七」「チ喜助がいふ通り、こちららが手の離るゝも大方翌の日一ぱい。スリヤ御遣宮も近い内。其時は嘸賑はしからうなう」「チ、サ、そこはぬからぬ此文藏、思ひ付いた趣向が有る。マア一番に眞赤な猩々緋の幟、其次に揃への挑燈。えいか、揃への浴衣で揃への人に夫を持たす。えいか、喜助は足が長短ちやといふによつて、引く物によるといふ題で三味せん方。えいか、藤七は鼻がえらいによつて、馬によるといふ題で、太鼓の役、音頭は今度大阪から下つて居やる醫者殿に習うた通り、おれが跡からやつて行くぢや」「待ちやうく文藏、其上方から下つて居る醫者殿とは、どの醫者殿ぢや」「ソレイノ、眉毛は黒毛の刷毛見る様で、目はぐるぐると悉皆達磨」「ム、成程くく、アノ柴左仙が事か」「ソレく、其人に習うた音頭の妙音、ちつとばかり聞か

したけれど、又意地悪の春風殿、モウ追付け来る時分、見付けられたら目を貫ふ、一働さして跡の事。サアこいこい」と打連れて、普請場さして行く處へ、ひよこく來たる在所醫者、顔見合せて、「ホ、左仙様、けふは何所へござましたの」「ヤア何所へとておれが事、宮寺の連歌俳諧、繪馬もほつとり見あいて仕舞ひ、つくねんとして居た所へ、此お宮の普請奉行、一味齋様から呼びに来て、將棊の相手に今まで成つて居た。そしてアノ音頭はとつくりかたまつたかの」「アイ大方に覺えました。爰仕舞うたら夕ざりに、又稽古に参りましょ。後にくくと雙方が、すれ違ひさま當りしか、何とかしけん、柴左仙、うんとばかりに倒れ伏す。胸り動顛三人が、「ヤアくコリヤ目がまうたか」とうろたへ眼、池水兩手にそよぎかけ、「コレく醫者殿いなう、左仙殿いなう。左仙様、不動様、ぢやない、お醫者様いなう」と、呼ぶ聲耳に通じけん、軒端を傳ふさよがにの、糸より細き、聲音にて、「ア、扱はかなき世の中や。昨日までもけふまでも、醫者よ藥師と敬はれ、餘所の病と詠めしが、けふは我身に迫り來て、犬猫の子か何ぞの様に、小屋の軒場に倒るゝとも、誰か哀れと見給ふらん」「さりととはく氣弱い、めつたに死んでよいものかいなう」「めつたにこなたは死にやさんせく」「左様々々」と抱きしむれば、「イヤナウ方々、おりやどうしても叶ふまいく」「トハ又なぜに」「チ、一通り

聞いてたべ、蜜柑の皮の色づくくと、藪醫の顔の青なるは一時と、誰がしにせて冬枯の、療治は隙なり金はなし、内證とても曾我殿の、五りやう十りやうの煙草さへ、錢に盡きたるつがすがち、おのづと悪い顔色を、吉岡殿の下部が見て、氣色が悪か是なりと、たべよとくられた竹の皮、中には黒い一かたまり。扱はきやつめは者婆扁鵲、おれが常から持料の甘い物好く癩の蟲、能くも知つたり醫者まさり、是黒砂糖なんめりと、何の差別もめつた喰、吞込んだれば、ナウ悲しや、黒砂糖ではなうて、コレ泥川の陀羅介で有つたはいの。コレ山上參りの土産にする陀羅介で有つたはいの。それが毒ではなけれども、瘦馬ならぬ瘦體、苦過ぎたのが此身の害。アイタ／＼／＼／＼、ア、痛やなう、苦やなう。コレ此腹の痛さでは、どうで命がつとくまい。八萬地獄へ落つるとも、日頃近しう仕たそなた、後から死んでござるのが、五年十年おくりやうとも、必々死出の山、地獄の釜端で待つて居てやるぞいの」と、聲も哀れなしやくり泣。

「ア、コレ／＼／＼／＼、さりとては／＼／＼、爰で死なしやるとの、マア掛り合ひに成るといひ、第一地獄の釜端で、待つて貰ふがおりや術ない。コレ氣から先へ死なさすと、分別がある聞かしやれや。こなた平生踊好、常々おれが習うて置いた、音頭をやつて見る程に、拍子にかよつて歩行いたら、コレあるけさうなものぢやぞ」

「フン、コリヤ一理窟、石積んだ地車も、木やりの

聲で行く道理、マアちよつと一口試みに」

「チ、サ合點」と破扇、腰から出してふりかざし、オンド「ヤレ阿波の海賊彼の十郎兵衛が、ソレサアハリサア」

「ヤア／＼こいつはえらいわいえらいわい、チ、俄にしよぎ／＼氣が成つた、猶も大工殿頼みでござる」

オンド「ヤア哀なるかな此醫者殿は、ハリサヤヨイサ、砂糖代りに陀羅介のまれ、あせりもがいてはらいはしや。ヨウイヨウイヨイヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ハアヨウイトナア」

うかれ打連れ立歸る、跡は渚に白波の音もどうだうで立出づる、普請奉行の役柄も、格もよし岡一味齋、名のみやさしき春風が、共にかしこに立止り、「誠に此度の御宮普請、相役と申すは名ばかり、皆其元様のお助け故、斯様な大役首尾能く相勤めしは、いかばかりか大慶至極」

「コレハ又痛み入つた御挨拶」

「イヤイヤ神以て御恩に著ます。夫に付き先生へいつぞはお詫び申さうと存じたに、願うてもなき幸、定めて拙者を人畜の様に思し召すでござらうと、存じ廻せば面目ない、アノ人非人の京極め、あゝいふ族と露しらず、只管の招によつて、思はず入門致せしは今での後悔、若輩者の跡先に心も付かず、破門致せし其段は、幾重にも御了簡、此上はぶつてなりとも腹をいて、以前の通りお弟子と成して下さらば、此上の悦びなし。コレサク、先生偏に願ひ奉る」と、詞に油乗せて見る、艶とは知れど一味齋、「イヤモ誤つて改むるに憚りなし、元高弟の其元なれば、末々の門人へ、稽

古の席の差配り、此方よりもお頼み申す。「スリヤお聞届け下されうか、ハ、ハ、ハ、ヤレ、忝や嬉しや」と、悦び勇む折こそあれ、吉岡が仲間斯くと見るよりかつ踞ひ、「お國元より御息女お園様お見舞として、只今旅宿へお著きなされましてごはります」「ナニ、娘が見舞ひに來たとか、ハテ扱女の身でいらぬ事を。シテ道中怪我もなかりしか」「ヤモ随分御機嫌能く」「満足満足。然らば歸りて云はうには、か弱き身には餘程の里數、嘸かし痛く草臥れつらん、身も暮方には歸るであらう、休足して待つてよと言ひ聞かせよ。早くく」に「ナイ、く」と、奴は旅宿へ立歸る。跡見送つて一味齋、賢き心の闇ならぬ、闇に迷ひし親心、「ア、孝心にしてくれるはよけれども、結局はそれで苦をやむ」と、こぼす涙を春風に、慙ぢて背ける顔の艶、薄き親子の契りとは、後にぞ思ひしられけり。藤藏は見えて見ぬふり、「御息女のお出でと有れば、是より直に御宿所へ、イヤ御同道致しませう」「イヤ手前はまだ私用もござれば、そこもとは先お先へ」「ハア然らば左様致さう」と、互に目禮一味齋、假家の内へ入りにける。跡に春風獨笑、かねての方便も手ごはき親仁め、中々すめでは行くまいと、思ひの外工合のよさ。斯うしてからは、手段もし安し。ム、斯うつ、斯うして「かうくと、響く野寺の鐘の音も、入相近き磯傳ひ、しづく歩む向ふより、浪人者とおほしきが、古大小の柄糸も、ほつれ亂れし破小袖、

すれ違ひさま振返り、「イヤ暫く。それへござるは郡の家中、春風氏にはあらずや」と、聲かけられて立歸り、「ム、身が名を知つたる御浪人は、何人なるぞ」といぶかる色目、「イヤモ名乗るも今更面ぶせ、密々願ひの筋ござれど、他聞を憚り申しかぬる。何卒暫し御左右を」「いかにも承知」と家來に向ひ、「身は是に用事有れば、益内一人跡に残り、我達は先へ歸れ。早く早く」と追立てやり、近寄つて聲をひそめ、「音聲にても覺あり、貴殿は京極内匠殿」「いかにも左様」と笠脱捨て、「某國を去つてより、一先上方へと心させしが、心残りは一味齋、恨を一太刀むくはんと、思ふ折しも此防州、普請奉行に來りしと、聞くとひとしく、究竟の時節かなと、取る物も取りあへず下りしが、いよくそれに違はずや」と、問ふに藤藏邊りに氣を付け、「此度の宮普請も、残らずきやつが指圖次第。何が諸家中の請はよし、知行は増す、威勢は日々に門弟はふえる。イヤモ、其無益しき頼憎さ、折を見合せ一討と、心はせけど我々しき、中々手に立つやつでなし。思はず貴殿に逢うたも幸、何卒きやつを欺し討に」「シイ聲が高い。諸事は内匠が胸に有る。抑一味齋めに意趣といふは、あながち劍術一通りの筋でなし。娘お菊を妻にせんといへば、酢の粉のと承引せず、剩へ人前にて頼恥かよされ此風體、思へばく口惜しうて、胸板を截割る苦しさ、切りさいなんでも腹いぬ」と、拳を握る無念の齒がみ。同氣相寄る春風

が、邊見廻し、「コレ先生、何も氣遣ふ事はござらぬ。仕様は斯う」と耳に口、「ム、すりや此所に一味齋。うまし」とかけ出す其氣相、「どつこいやらじ」と止むるを、「放せ」「放さぬ」血氣と強氣、振飛ばされても我武者もの、我身をじつと引きすゑて、「エ、氣が違うたか京極殿、一味齋を切る氣でも、傍にはきやつが數多の家來、寡は衆に敵せずとは、常に貴殿もいうたぢやないか。多勢の中へ切入つて、目ざす老ほれ一人を、切り得てからが命はないぞや」「チ、命はとくより捨ててゐる」「イヤ、それは器がちひさい、敵一人に百年の、命をはたすは不覺々々。マア氣をしづめてとつくりと、身がいふ事を聞かつしやれ。コレ一味齋が歸るは、いつも此道此所。浦の氣色を樂しみとて、駕籠に乗らねば同勢なく、供は仲間只一人、そこを窺ひ討つならば、本望遂げるに手間隙入らず、討つには最上飛道具、其品爰に」と益内が、かたけ持つたる挾箱、中より出す種が島、「腕に手練の内匠殿、百發百中疑ひなし。されど磯邊は人目あり、其松蔭から歸るを待ち、まつたど中を御合點か」と、渡せば取つて、「したりく」。微塵流儀の奥義をふるはど、暗夜の烏もたんだ一撃。氣遣ひ無用」と立上れば、悦ぶ藤藏抜討に、あへなや益内眞二ツ。「密事を人に洩らさぬ神文、まつ此通りのお手柄を」「チ、いふにや及ぶ」と松蔭へ、忍び行く足春風は、血刀鞘に納りは、「旅宿で聞かん」と眼を配り、心残して立歸る。麒麟老い

ても驚馬ならぬ身は五調の一味齋、娘に心急ぐ道、照す奴が箱挑燈、光を失ふ星の影、老眼にきつと詠め、「ム、西方は元より金氣、兌の封に當つて七ツの昴星、備を亂して動するは、正しく國の良臣に、災有りと兼て聞く。ハテいぶかしの天變」と、我身の上としら砂道、「乗物はへ」に下部ども、ハツと答へてかき寄すれば、直に打乗り「皆急け」「畏つた」と六尺ども、足を早めて駈けり行く、ねらひ過せし京極が、松かけより飛んで出で、「エ、手廻にせしか残念至極、儂老ほれ遁さじ」と、跡をしたうて 三重追うて行く。

第五

菖蒲葺く軒の香深き一構へ、一味齋が屋形には、末子三之丞が壽とて、飾る兜の奥使、妣どもが縁端に、奏者の役の請答、せばしならびて坐し居たり。入來る禮者は入間野宇内、「端午の御禮」と袂から、名札を置いて出行けば、續いて十木當右衛門、金井運兵衛、根津伴藏、引きもちぎらぬ禮受に、ほつと草臥れ、「ヤレ、心勞やナウ小富、何ほ有るかも數知れぬ御家中のお弟子衆が、お禮くの取次に、出たり入つたり、立つたり居たり、座敷の上のお百度参り、斯う働いたらどこやらも、男が知つたら好もしがろ」「チ、お松の身上りな。ヤ其、このもしい咄

の次手、此屋形の姉御様、あれが女の大兵といふのか知らぬ。脊はといや六尺ばかり、器量も好うて劍術が名人で、其くせ力が強いけな。あんな體に半日でも成つて見たい」「ソリヤ又なせにや」「ハテマア第一押しがきく。女夫喧嘩をするにでも、男の癖と無理八百、いふをいはずしめ付けて、思ふ存分抱かれて寝る」「チ、そりやきつい無分別、大きな體は何所やらも、形相應に大きうて、なみ大體な鼻高では、たんのうする事あるまい」と、譯もなまめく高笑。一間開かせ三之丞、出づる目病の探り足、まだ十三のおとなしく、「ヤイ、娘ども、けしからぬ高笑、大姉様はお留守でも、此頃病氣で下つてござる、お菊様の居間へ筒拔、主の蔭口不埒の至り、以來をきつと嗜め」と、呵る詞も角立たぬ、愛敬深きうまれ付。取次の侍まかり出で、「衣川彌三左衛門様御子息、彌三郎様御出なり」と披露して、表の方へ引かへす。「チ、それ珍客、折悪う母様は休んでござる、マアお菊様へしらせよ」と、指圖に下女は立つて行く、程ながくし山鳥の、襖開いて彌三郎、佳節の衣服一入に、榮ある美夫の衣紋付。それとお菊が一間より、こほれ出でたる絹の香の、すがり付きたさ戀しさの、胸の数々目の内に、しらせあうてぞ座に直り、彌三郎慇懃に、「先以て當日は端午の佳節、御親父一味齋先生にも、防州普請の御役中、恙なく御勤なされ、御家内の御悦び推量いたし、くれぐれ目出たう存する」と挨拶すれば三之丞、

丞、「誠に師弟の義を重んじ、佳儀を祝する御入來の段、父一味齋在宿致さば、いかばかり悦び申さん。ナウ姉様」「チ、ソレ、悦ばしやんせいで何とせう。顔を見れば、嬉しうて、いひたい事もたんと有ろし、そしてから、アノ人目の關のないならば、抱付きたい氣で有ろぞいな」と、思はずふつとすべる口、「コレ、シイ」と彌三郎が、弟の手前氣を兼ねて、止むるも同じぬる袖、袂をそつと引く糸に、もつれ寄り添ふ妹背中、「戀しかつた」も口の内、じつと引きしめ抱合ふ、傍にあやなき三之丞、「此姉様は物をもいはず、衣川様は何所へぞ」と、さぐる手先に背と背、ちやつと飛退く彌三郎、お菊が胸はさど波の、しがを見せじとさあらぬ顔、「アノマア三之丞とした事が、わしを悔りさしやつたわいの」「わたしも悔り致しました。今のは何でございましたえ」「フウアノ今のかや、あれはの、アノソレナア彌三郎様」「チ、く、それ、五月五日は男の節句、武備を飾りの鎧長刀、ちよつと祝儀に組討の、眞似を致して見ましたも、偏に貴公へお祝ひ」と、詞巧にいひ廻せば、あどない氣には誠しく、「ハッア思し寄せられし御深切、幸けふの菖蒲酒、何はなくともお菊様、彌三郎様へ御酒一つ、一間でお上げなされぬか」と、何氣ないのに氣も落付き、「チ、ようぞや氣が付いた。彌三郎様、爰は端近一間へ」と、酔はねど先へ轉び寝を、急ぐ手招き小點頭、誘ふこなたに母親が、見るともいさやしら紙

の、障子引立て入る跡に、やと黙然と三之丞、さしうつむいて坐し居たる、傍に立寄る母お幸、「コレ三之丞、けふはそなたの大事の節句、此頃父御の方からも、事多い中に、文が来て、随分節句を賑はしう仕てやれとの文體、乙は血の尾と只さへに、目かいの見えぬいぢらしさ、いつかい苦にしてござる上、煩やつたらどうあらう。彦山様を初めとして、奇瑞の有るとあらゆる佛神、祈らぬ方もない程に、本復は今の内、氣をわさくとしやいの」と、慈悲に餘りの母親が、あいだてなしと人や見ん。「さほど御不便かよる程、此身の冥加恐ろしい。今も今とて彌三郎殿、端午の佳儀といさましう、お出でに付けてわしが身は、勝れし手者の胤ながら、小太刀一本鎗一筋、操り得ぬのみか苦をかけて、不孝の罪を重ねんより、いつそ死にたうござります」
「エ譯もない事いふ程にの、母が氣までをめいらした。妣どもは何所に居る。三之丞と奥へ行き、面白をかしう酒でも酌み、氣を慰めてやつてくれ」ハイと出て来る浮助ども、「人を浮かすと色事はこつちの得手物、若旦那様サアお出」と手を引けば、「イヤそれには及ばぬ」と、立つもとほく病む目より、見る目病まるよ親心、「ソレくあぶないぞく」「イヤモチひさい時から馴れた内、氣遣ひはござりませぬ。申し母様、冥途の闇に迷ふのは、此様な物でござりませぬ」
「ア、おとましい、またかいの。ソレ妣ども」「ハイくくく、先のけくお馬でも、乗

らぬ主人をいさめかね、打つれてこそ入りにける。母は我子の後影、見るに付けても心根を、不便と浮む露の間も、忘れ方なき恩愛の、中の間よりも妣が、「御寮人様お歸り」と、しらせにさよめく勝手口、「ナニお園が戻りやつたか、ヤレくくく待ちかねた。サアくく是へ」と、待つ間に程もなつ山に、衣ほすてふ白妙の、顔さへ朱に照り添し、さつきの花の縫小袖、ふりもしどなき千鳥足、跡に付々妣ども、「ナ、あぶなや」と立寄れば、「チツト寄るまいくぞ。あぶないとは何があぶない、酒に酔うたか何ぞの様に、立騒いで不行儀な。次へ行きやく」と、しかつべらしう三つ指も、いとどなまめき愛くるし。「ア、娘待ちかねた。定て一味齋殿も一所であるが、大方御前へ歸國のお目見え、夫で先へ戻りやつたか」「ハイくくく、左様な様な物の様な物でござります」
「ナ、あの人とした事が、遂にない酒機嫌、どなたで御酒をたびやつたぞいなう」「ハイくくく」と様のお供してナ、上つた所が端午の御祝儀、直様お裏へお禮に上り、東雲様の御前にて、白藤のお局に、しひにしひられ四はい呑み、それから四の宮志津摩様の奥方へ参つたればナ、四合入のお盃で、しひ殺されて居る所へ、篠田思安様がによつと見え、どりやおれが配劑せうかと、お年に似合はぬ強いお酌、ア、申しく、それではいよく死にまする、死ぬる、面白い、死ねくくくとめつた酌、こりやたまらぬと座敷をはづし、四疊半の圍の内

に、死んだ様にして居たればナ、白井新吉様の奥方や、芝山四郎右衛門様の奥方、信樂様までが出て見えて、寄つてたかつて盛殺し、とうぐとどめをさよれました「チ、あの子とした事が、常の行儀に似も付かぬ。取分け大事の祝ひ日に、心にかよる四の字盡し、もうぐいいて下さるな」「ハイぐぐ、左様ならば申しますまいぐぐ。其替りにはおかゝ様、お願ひがござります。アノナ、急に殿御を持たしておくれなされませぬか」「チ、是まで幾度いひ出して、聞入れぬかたいそなたが、殿御を持たうといやるからは、定めて心當があらうの」「アイ、イ、エ」「ムウそんならかねぐ、噂に聞く、豊前の國毛谷村の百姓六助、身は農民に埋れてもあつばれな文武の勇者、何卒主人音成公へ仕へさせたき夫の願ひ、成らう事なら其人を」「ア、申しぐ、おかゝ様、殿御を持たして下さりませと申すは、わたしではござりませぬ」「ム、そんなら誰に」「アイ妹のお菊に」「ヤ、ゝ」「サイナ、どうぞ持たして下さんせぬか」「イヤぐ、其願ひは聞入れられぬ。家を繼ぐべき三之丞は、所詮本復叶はぬ眼病。さすれば家の名跡は、姉のそなたに極まつた。聲もない内妹に、男はどうも持たされぬ」「コリヤ御尤でござります。左様ならば母様に、逢はせましたい人が有る。ソレぐぐ、其子爰へ」に、娘が、抱いて出でたる五ツ子の、すやく寝入るをお園は抱取り、「申し母様、通れぬ方に生れし此坊、此園が子にし

てな、吉岡の名跡を相續さすれば、わたしが家を續いだも同然。お赦しなされて妹に、殿御を持たして下さんせ。お願ひ申上げます」と、深き思ひを巻き舌の、詞は酒の科なりし。母はつくづく稚子を見るより扱は聞及ぶ、孫とはしれどさあらぬ體、「チ、姉の何いやるやら、系圖正しい名跡を、餘所の胤には續がされぬ。物がたいと様の、氣質はそなたも知つての筈。道に背いた二つの願ひ、叶はぬ程にいひ出しやんな」「スリヤ是程に申しまして、お聞入れはござりませぬか。此上は是非に及ばぬ、白地な事ながら、妹お菊と彌三郎様、人しれず忍び合ひ、中に設けた此彌三松、いはゞ眞身の初の孫。お前の口から父上へ、御聞届けの有る様に」「チ、心盡しのそなたの願ひ、叶はぬならぬと親がひも、いふにいはいはれぬ譯ある故」「ソリヤ母様聞えませぬ。血を分けた親子の中、明されぬとはどうした譯、様子を聞いた其上では、わたしもいはねばならぬ譯、胸にせまつて心がせく。サア、シテ様子は其譯は。サアぐぐ」と問詰められ、暫しいらへもなかりしが、「今は是非なし何を隠さう、そなたは拾ひ子。チ、悔りである。連合一味齋殿、殿様の師範と仰がれ、家中の用ひも淺からねば、何くらからぬ身の上なれども、四十過ぎても子なきを歎け、神に授かるならひもと、夫婦連での伊勢參宮、賽の道すがら、とある木蔭に赤子の泣聲、可愛さうにと拾ひ上げ、見れば添へたる千鳥の

香爐、是こそ名高き和國の名器、久吉公より先達て、仙石何某に給ふと聞きしが、付け添へ捨てし其譯を、問ふ人とてもながの旅、拾ひ歸りて育つる内、お菊といひ、三之丞まで設けしは、夫婦が老の入まいと、心嬉しくけふまでも、包み隠せしそなたの素姓、ほんの親御へ義理もあり、妹や孫に此跡を、相續さよれぬ入譯は、斯くぞ」と咄す來し方を、聞くに付けてもあぢきなき、野末に捨てし、氏系圖、「そんなら日比大事にかけ、わたしが持ちし香爐が」「タイノ、それが眞實の親御の筐」「ハア扱もく悲しいお咄し、今の今まで眞實の、父上とも母様とも、思ひ込んだるわたしが願ひ、叶はぬ上は差當り、申さにやならぬ此場の時宜。ソレとよ様のお乗物、其儘これへ。早うく」はつと二人の仲間が、手舁にしたる乗物に、としや遅しと立寄つて、「ヤレお歸りか待ちかねし」と、開けば内にあへなき死顔、一目見るより、「ヤアくくく、コリヤ何者が手にかけて。娘様子はく」とせき立つお幸一間より、こけつ轉びつかけ出る兄弟、空しき骸に取絶り、前後正體なき沈めば、母は詰寄り、「コレお園、様子は定めて知つて居やらう。ヤイ佐五平、そちや山口のお供の内、定めて敵は知りつらん。何國の誰が業、何者が殺せしぞ。早う聞かせい」「早く申し上げらう」と、友平がせき立つ詞聞くに付け、姉が思ひは百千の、劍に胸をさよると悲しさ、詞も出でず齒を噛みしめ、無念涙に佐

五平が、「チ、御尤くく」。山口の御用首尾能く調ひ、御歸りがけの小松原、何者が所爲にや、御乗物へ鐵砲を打ちかけしと、小者がしらせを聞くとひとしく、旅宿よりは半道餘り、姉御様の御供致し、宙を飛んでかけ付けしが、早お旦那にはあへなき御最期。お傍に付添ふ若黨佐忠太、俱に深手に苦しみなから、旦那の仇は京極内匠、しるしは彼が二の腕に、切付け置かれし跡ありと、いひも終らず即座の最期、無念と思へど其甲斐も、悔んで歸らぬ其場の時宜。エ、奥様、口惜しうござります。友平、推量してくれ」と、悔むにお園もせき上げく、「佐五平が申す通り、一足早うかけ付けなば、やみく討たしはせまいものと、涙ながらに立寄つて、改め見れば此ごとく、飛道具にて仕止めし上、とどめをさしものと様も、叶はぬ痛手に無念の御最期。直に追付き親の敵、討たんと心ははやれども、妹といひ三之丞、いづれ跡目を定めた上、敵討のお願ひ申し、本望とけたいばかりに、すぐく歸り此譯や、妹が願ひを取交せて、酔うた顔してはしたなう、酒に紛らすせつなさを、推量してたべ母様。コレ妹、弟、嘸口惜しからうなう。海山こえてはるくと、お迎ひに行た此姉が、御遺言の一句も聞かず、いかめしさうに亡骸を、お供申したあぢきなさ。エ、く口惜しう存じます」と、無念にこつたる主従が、涙血汐の瀧津浪、身もうくばかり見えけるが、母は不覺の涙を止め、「コレ我夫一

味齋殿、嗚や無念にござりませう。卑怯未練の京極内匠、何國に隠れ忍ぶとも、草を分けても尋ね出し、修羅の妄執はらせませますぞや」「チ、母様の仰の通り、俱に天を戴かぬ、父上の仇」「旦那の敵、此友平も」「佐五平めも」「二人俱にお願ひ申上げ、敵討の御出立」といさめば兄弟、「實尤、サアお願の御用意」と、はげしき詞に母親は、嬉し涙もいやまして、「チ、出かしやつたく、片時も早うお願ひ」と、詞ばかりはいさめども、身はしをれ添ふ袖袂、涙と俱に亡骸を、抱きかよへて主従が、佛間へこそは入りにける。やと時移り表の方、御上使なりと聲高し。斯くと聞くより母お孝、跡に引添ふ姉妹を、杖よ力と泣顔を、會釋になほし出で迎ふ。程なく入来る春風藤藏、衣紋の威儀も麓忽の仁體。つゞいて衣川彌三左衛門、善と惡とをなひませの、使者は上座に著きければ、母は下座に詞を卑下し、「お役目とは申しながら、御苦勞を顧みず御入あられしお二人様、上使の趣氣遣はし、仰聞けられ下されかし」と、親子手を突き窺へば、「ホ、チ思ひがけなく氣遣ひはさこそく。一味齋殿不慮の横死、彌三左衛門承つて驚き入り、愁傷申すも詞なく仕合せ。それに付き殿様より、下し置かるゝ上使の趣」「イヤく其儀は此藤藏が申し聞けう。一味齋儀、劍術を言立て仕ふる身ながら、人手にかより相人も仕留めず、みくゝと山口にのめり死に、左程未熟の手續をもつて、八重垣流の蘊奥も極めた顔、ハ、ハ、ハ、事をかし。御前をあざむき年をかさね、喰潰した祿盗人、死首をおつ刎ね、妻子從類死罪の御沙汰も有るべきなれども、餘り不便とお慈悲の餘り、盲目の小童二人の娘、親子四人の命は下さる、屋敷を取上げ阿房拂ひ。上意の趣有りがたい事だと思ひ、片時も早く此家を立退け。ぐづぐづ出かねば下部に云付け、割竹にて叩き出さす。塵芥一筋杖一本、くすねて出る事ならぬぞ」と、いひならべたる悪言に、むつとはすれど母お幸、さあらぬ體に進み出で、「上意の趣恐れ入つては候へども、我夫一味齋、手續はさもあれ御用の役先、家來も數多召連れたれば、敵いかばかりの謀計有りととも、よも塵には相成るまじ。扶持を與ふる主の内、左程の大事馳歸り、告知らすべき筈なるに、左右もなければ死骸も參らず、人に討れしなどとは、跡方もなき世の浮説」「ヤだまれ女、強將の下に弱卒なし、馬鹿の家來にや馬鹿が成るはい。役目終つて一味齋、阿房鳥のきよろくと、海を眺めて磯つたひ、歸るを見すまし種が鳥、小筒を以て只一打、脇腹より背骨をかけ、矢狭間のごとくぶち抜かれ、脚も腰も立つ事か、よろめく所をぐしやく、突、芋刺す様に刺殺されヤモけうとい死さま、一分一寸違ひは有るまい。是でも浮説か偽りか。返答あらばいへ聞かん」と、きめ付けられて親子共、いひ遁るべき詞なく、又伏沈み泣居たる。「コリヤ春風氏、御尤のいひ方。此彌三左衛門お手前に、ちと尋ねたき事がご

彦山權現誓助劍

「何かく何なりとも」「イヤサ別儀でござらぬ、一味齋の横死はさる事なれども、そこ
 が彼の欺すに手なし、ガ名にしおふ八重垣流の達人、太刀打にては叶はじと、飛道具にて仕止
 めしは、あつばれ智慧な曲物ではござらぬか」「いかにも左様、骨と皮とは云ひながら、侮り
 がたき一味齋、小筒といへども二ツ玉にて」「フン、打つた子細の具さなは、御邊が手傳ひ仕止
 めうがな」「ヤ何と」「馬鹿の家來には馬鹿がなるとは、殿をも馬鹿と嘲ける一言。問ふに落ち
 ねど語るに落ちる、我と我罪白状する、内匠が荷擔人春風藤藏、科は遁れぬ腕廻せ」と、襟が
 み掴み投付くれば、様子小陰に窺ふ友平、飛びかよつて三寸繩、鞆のごとくにしめ上げたり。
 「チ、友平出かした。猶も詮議のかゝる曲者、庭の小隅へぶち込み置け」かしこまつかせ、立ち
 おろ」と、引立てられて赤頬を、投首してぞ引かれ行く。跡に親子が小氣味よさ、心の願ひい
 ひ出す、よき汐合と思ふにも、母は稚子抱き出で、「さつきの様に申せしは、心よからぬ藤藏
 が、手前を隠す一旦の偽り、實は夫が亡骸も、其場の様子も承り、思へばく不慮な最期、
 武藝未熟の故とあつて、妻や子供を御追放とござりましては、一入修羅の妄執も、思ひやら
 れて親子が悲しみ。かく成るはしか三之丞、盲目の身なれば跡續叶はず、氏族の内より一味
 齋、貫ひ置きたる此稚子、付上りました事ながら、屋形を此儘暫しの月日、お暇下し置か

れませうなら、首尾よく敵を討ちおほせ、立歸つて後彌三松に、御恩を送らす奉公を」と、皆
 まで言はせず、「そりやならぬ」「トハ又なせでござりますな」「サレバサ、一味齋は殿の御師
 範、眼前相手に薄手も負はせず、討たれ死したる其恥は、其身一つと思ふかや。未熟の藝を
 うかくくと、習うた主人は猶馬鹿者、武道の奥も知れたりと、謗は殿もまぬがれ給はず。ソ
 モ是誰が業、皆一味齋の罪ならずや。罪有る者の妻子が願ひ、彌三左衛門此取次は得せまい」
 「コリヤ衣川様異なお詞、四海の武將も運つきて、人手にかよりし例あり。義朝は長田に討
 たれ、小田春永は光秀に、亡されたぢやござらぬか。四國九國に知られし夫、目に遮らば鬼
 神も、討つには安き身なれども、手利手練も叶はぬは、弓鐵砲の飛道具、それを不覺の罪科
 に、敵討の取次せぬとは、弓馬の家の道にくらきか、但し女と理を非に曲け、取次しよまい
 のぶしやう業か。サ彌三左衛門様、御返答聞きませう」と、老のいらだて齒にきせぬ、衣川
 が傍に詰寄れば、お園わけ入り押隔て、「狂氣の業かコレ母様、あなたは御上使殿のお代り、
 お前の様に云はしやんしては、モ叶ふ願ひも叶はぬわいな」「イヤくくく構やんな、無理も
 いはねば慮外もいはず。サアくくく衣川様、返答どうでござります」と、いらつ母親猶引
 退け、「エ、コレくくく妹、うろくと何ぞいの、氣が利かぬ子で有るはい」と、口で呵つて

目でしらす、心を賢き妹が、「サア母様奥へいて、ちと氣を休めて下さんせ」と、こしほはした
 とりぐに、無理に伴ひ入りにけり。跡にお園は物頼む、人前つくる笑ひ聲、「ホ、ホ、ホ、
 マ母とした事が、お心安いは常の事、けふは御上使重きお役目、身のせつなさにかへり顧みぬ、不
 調法も女童、御赦し下され。此上くどう申すに及ばず、只よき様に御前の執成ごりなし」「フン阿房拂
 を止めにして、敵討のお暇を、乞ひ得てくれよといふ事か。一旦追放との御誼意は、りんげん給言なら
 ねど再びかへらず、片時も早く屋敷を明け、親子諸共立去れ」と、苦り切つて取りあはず。「サ
 サ其お怒は尤ながら、母が不禮は幾重にも」「イヤ身不肖なれども彌三左衛門、老母が詞耳には
 かけぬ。お慈悲をもつて追放の、誼意を逆へば死罪に成るがや」「ホ、ホ、ホ、罪なうして配所
 の月を眺めんと、歌人も望みし例あり。科なき科に追拂はれ、他國にさまよひ果てんより、首
 さしのべて親子共、お國の土に成るのが望、さうなう此家は出づまじ」と、腰をすゑたる大丈
 夫、動く氣色はなかりけり。彌三左衛門大きに怒り、「ヤア女と思ひ詞甘く、猶豫に付け込む不
 敵者。アレ誰か有る引立てよ」と、下知より早くかけ出る組子、面々十手電と、打ちふりく
 追取廻し、「サア國境まで早歩め。行かすば薙ぎすゑ引出さうか。サアくどうぢや」と聲々な
 り。「テモ仰山なお衆方、女一人を相手取り、さほど多勢が立騒ぎ、大方内匠の弟子と見た。習

ひ込んだるお流儀の、微塵にならぬ用意仕や。をこがましや」というよもなく、打ちふる鐵刀
 手首を掴み、七八間狗兒投、續いて二番手三ばん手、腕のしがらみしつかと組む。「ホ、ホ、
 ホ、ホ、男といへどわしからは、よつほど小兵に見るからが、手練の程も青侍、稽古さんせ」
 と弓手馬手、とたんの間拍子、ヨイヤサト、投付けられてころくく、ころびを打つて身退
 く。跡は多勢が怒がかり、備へを亂し我一に、寄るを張りのけ打ちたふし、相手撰ばぬ働きに、
 引けば入れかへ立ちかはり、千變萬化といどもしは、目覺しかりける次第なり。只一人に大勢
 が、叶はぬ赦せとしどろ足、表をさして逃延びたり。透を伺ひ彌三左衛門、長押にかけたる鎗
 押取り、「慮外の女めそこ引くな」と、用捨もなく突かけるを、よけても透さすたよみ突、ひ
 らりとはづせば又突きかゝる、馬手にかはし弓手に流し、程よく汐首かいつかみ、穂先も雪の
 細腕に、かためし手の内大磐石。「ホ、チ手並は見えた」と聲高く、開く一間の障子の内、中央に
 大守音成、御扨従には衣川彌三郎、近習の侍雲のごとく、敬ひかしづき坐し給ふ。音成仁和の御
 まなじり、「日頃忠勤怠りなく、師範なしたる一味齋、横死と聞くより胸苦しく、定て汝等親
 子の者、敵を討たまほしからん、あつぱれ討たして名を日本に取らせんと、彌三郎に案内させ、
 裏道より來りしかども、敵は一流手練の内匠、討ち得ん事の覺束なく、手並を見んため彌三左

衛門、詞を以て心を勵し、手だれの力者が圍みを破る、其手竝では京極内匠、鬼神なりとも打ちかねまじ、心任せに發足をさし赦す。さるにても一味齋、知行は與へ置きたれども、奥義を傳へし我師匠、死骸に一目暇乞と、仰の下に衣川が、下知にはかなき死骸を、御目通りに直し置く。音成兩眼うるませ給ひ、「誠や名香は薰るをもつて火に焼かれ、花は色香の妙なるより、折り取らるゝも浮世のさま。惜しや無雙の一味齋、無慙の最期とけるよな。敵はそれと知れたる上、天を翺り地をくぐるとも、師恩を報ふ音成が、力と成つて汝等に、討得させん事手裏に有り。かほどの手者も運盡きて、京極つれが太刀先に、百年の壽を斷たんとは、思はざりしに残念や」と、悲歎にむせぶ御涙、厚き恵に三人は、只ハツくとひれふして、有りがた泣に泣き沈む。思ひがけなや一間の内、あつと叫びて飛走る血汐、驚き障子押開くる、内に哀れや三之丞、腹一文字に息たえなく、「ナウ情ない時も時、ひよんな事してたもつた」と、取付きすがれば、「エ、見ぐるしい母様、皆様も見ござる、泣いてばし下さるな」と、今際の身にも居竝びし、人目をはづるいぢらしさ。あるにもあられず母親が、「コレイナウく、聞きやつたかしらぬが、殿様のお慈悲でとと様の敵討の願ひ叶ひ、そなたも一所に連れだたと、思うて居るもの何故に、何を不足の此生害。夫に別れ力ない、母に此上命をば、ちどめよとての覺悟か」

と、恨みかこてば、「ア、母様勿體ない、何しに其氣でござりましょ。チエ、有りがたい殿様、けなりいは母さま姉様。只三人の兄弟も、二人は女わし一人、男に生れた甲斐はなく、一生父のお世話になり、非業にお果てなされたる、敵を討ちに行きたうても、目かいは見えす口惜しい、弓矢神にも生地神にも、見はなされたる此體、せめて門出の血祭り、成つて死ぬれば父上に、冥途で詞も有らうかと、思ひ極めた覺悟にも、名残をしい母様姉様、此世からなる盲目の、暗の地獄に落つるとも、首尾能く敵を討つたとの、冥途へ告ぐる便りには、くゆらす香の手向をば、草葉の蔭から待ちます」と、いふも苦しき息遣ひ。太守も不便と瞬しけく、「誰か有る、春風藤藏を是へ引け」アツと答へて友平が、憎さも憎しとしぱり繩、宙に引立て馳出づる。「ホ、チ罪は今更揚ぐるには及ばず、重々につくきそやつが所爲、敵の片はれ冥途の門出、豫讓が裂きし衣にも、まさりし父へ家土産ならん。ソレお園、首刎ね弟にくれよ」ハツといふ間も一討に、水もたまらず春風が、首提けて立向ひ、「コレくくく三之丞、殿様の御恵有りがたう思やいの」と、首差寄すれば苦しき忘れ手に探り、「チエ、有りがたい忝い。儂ようマアとと様を、むごたらしう討ちをつたな。憎いといはうか、恨めしいといはうか、どう仕たら腹いえう」と、たぶさ擱んで縁板に、打付けくくにぢり付け、「嬉しや私は殿様の、お蔭で母様

姉様より、手柄始を仕ましたも、海山深き御恩のお禮、死んだ跡でも殿様へ、忠義を忘れて下さ
 んすな。殿様お暇申上げます。母様御無事で、姉様まめで、「まめでくとつどくと、いん
 で来られもする様に、死んでたもんなく」と夕霧くらき短夜の、宵の夢とぞ成りにけり。コ
 ハそも夢かと三人が、跡や枕に取りすがり、わつと一度に聲立てて、涙は死出の山路に、さつ
 き雨とぞ降りなまし。彌三左衛門聲勵まし、「よしなき歎きに時移り、此上猶豫は恐れ有り。
 一味齋と三之丞、二人が尸は彌三郎、よく取置いて亡き跡の、問弔も怠なく、此家に留守の
 氣遣ひなし。早打立ちやれ」と勵ませば、實にもと親子が立上り、讐討御免下さる上、跡に心
 も残らねば、此儘直に發足と、いさむ中にも妹が、暫し別れもうなる子の、彌三松連れて、立
 上れば、庭におつゝ二人の奴、「我々二人も御一所に」と、尻引からけ勇立つ。お園制して、「い
 や／＼／＼、一ツに行かば人目あり、我々とても敵をば、ねらふ間は別れ／＼、供は叶はぬさ
 りながら、敵の有家聞出すは、そち達二人が忠義の手際、勝手次第」と立並ぶ、中で手利の大
 やうさ、「いざさせ給へ母様」と先にすゝめて立出づる。「ヤレ待て三人餞別せん。用意の品
 あれへ持て」はつと小姓が捧げ出で、二人が前に直し置く。「小太刀二振二人の娘へ。母へ遣は
 す長刀は、連立つ中の長船祐定」「コハ有りがたや」といたゞけば、「イデ門出の盃」と、扇を

さつと押開き、「此扇面に畫きしは、浪に戯る三つの狸々、取りも直さず三人が、老いせぬ宿
 の門出も、頓て目出たう歸る浪」ハ、ツと母が請初めて、廻る扇の請けわたし。「肴くれう。
 シタヒこきりこの二つの竹は、よよを重ねて打納めたる御代かな。いづれも立ちやれ」ハツと三
 人が立つ事は立上れども、屋形の名残、よしや遂には出でぬべき、浮世の月の照りくもり、定め
 なく／＼出でて行く、思ひがけなき後より、不意を見すまし飛來る鐵丸、透さず袖にて打拂ひ
 打拂ひ、「ム、こりや百兩の金子の包」「ホ、ヲ飛道具にも氣遣ひなし、路用にせい」「エ、重々
 の御情」「爰構はずと行きやれ／＼」「ハア」

第六

タタ玉の御殿も獨寢はいやよ、さまと葛屋の忍び寢に、見て明したや須磨の月。鄙も名所の一
 ふしは、心ありその海端に、葎簀園の茶屋が軒、道行く人が一群に、暫し立寄り足休め、茶呑話
 の口々に、「ヤ何と皆の衆、月日の立つは夢の間ぢやないかいの。暑い長い六月もつい是盆
 前、秋のしるしか朝晩は大分涼しい」「ヲ、ソレ／＼、其月日の立つ次手に、來る十五日は精靈
 祭、何所もかしこも冥途からお客設け、瓜や茄子やあかのみや味ない盡し、あんな馳走を悦

んで、呼ばれて来る佛の住家、極樂といふ所は、よくく不自由な所と見えた。ア、思ふ儘な浮世なら、盆の一日おりや地獄へ行て見たい」「ソリヤ又なぜに」「ハテ餓鬼も佛も一同に、娑婆へくと来た留守事、青鬼赤鬼牛頭馬頭どもをせぶらかし、罪人どもをさいなんだ、手や足のたくあん潰、目の玉の飛だんご、頬の皮の厚焼などが喰て見たい。ハ、、、」と蓼を喰ふ、蟲も好きく須磨寺の、鐘に驚く道者ども、「ソリヤ日暮ぢや」とちりくくに、行く跡片付けとつかはと、女も宿へ立歸る。おくるよも、終には落つる露の身の、此地や我を待つぞとも、しらす砂道をたよくと、一味齋の妹娘、お菊が手を引き稚子を、杖よ柱よ後楯、供に従ふ友平が、背負ふ葛籠もかひくしく、立止つて、「イヤ申し奥様、親旦那不慮にお果てなされしより、何卒敵に廻り逢ひ、一太刀お討ちなされんとの御存念、ハテ奴めが爲にもお主の仇、儕やれ助太刀して、あつぱれお討たせ申さんと、爰までお供は致したれども、お力落しの上旅のお勞れ、何やらかやらでお顔持もすぐれず、御祝儀は申納め、もしもの事がござりましたは、却つて御不孝。ハテモ佛様は見通し、是までお出かけなされたで、お討ちなされたも御同然、一先づ國へお歸りなされ、とつくりと御養生、お前様のお體を、親御の形見とお大事になされませすも、又一つの御孝行かと存じます」と、愚智文盲も遣ひ人の、主に見習ふ眞身の詞。「ヲ、深切によ

云うてたもつた。わしはたよわい女の事、男といへば稚い彌三松、一人ならずふたりの足弱、長の道中愛想もつかさず、ホンニそなたを父上の、息災なうち侍に、取立てなんだが、今では悔しい。是非一刀討たいではと、思ひ込んだる父の仇、たとへ此身が病勞れ、敵に出合ひ運盡きて、返り討に逢ふとても」「ア、申しその返り討云はぬ事。其お心を聞く上は、雲の裏まで御供致し、御本意を遂げさせます、ガ其お足では道はか行かず、夜露を請けては一倍身の毒。私めは跡の宿へ立戻り、駕籠借つて来てお乗せ申さん、それまでちとの間お二人は、此所で御休息。幸の此茶店、サア爰にて暫し」と氣を付くれば、やんちや盛りの彌三松が、「べいよ、何所ぞへ行くならおれも行かう」「ア、めつさうな事いはしやりませ。コレべいは疝氣が起つた故、あつよをすゑる。に行きます。ほん様もござりましたら、又醫者殿が手を見て、あつよをすゑると云はうぞえ。どりや、早行て来て」と足がるに、かしこをさして急ぎ行く。「イヤくくく、行かにやきかぬ」と跡追うて泣く子を母がすかしかね、「コレ彌三松、又忘りやつたの。殿様のお蔭で、何くからぬ内を振捨て、此様に出て来たは、母が爲には父上、そなたが爲には祖父様の、敵を討ちに出たのぢやないか。町人百姓の子と違ひ、侍の子は年相應、智慧才覺かなければならず、ちと嗜んだがよいわい。母は比日氣色は悪し、其様にわやく言やるのが、ほつとりと聞きづ

らい。今にも敵に出合うたら、どうせうと思つてゐるぞ、定めて泣きがなするである」と、勵ます母が顔眺め、「ワアイ何の敵がこはからう、今でも爰へ來をつたら、コレ斯うしてこます」と小脇差、抜くより早く飛上り、松の一枝切落す。「チ、出かしやつたく」と、撫でつさすりつ母親が、あいだてなさも先立ちし、父の孫ぞと譽めそやす。折から須磨の家々に、精靈祭の高燈籠、見付ける彌三松、「コレかゝ様、アリヤ何の火ぢやや」「チ、あれはの、先立たしやつた佛様へ、お供へ申す火ぢやわいの」「そんならこちもあの様に火を點して」「チ、内なら安い事なれど、心に任せぬ旅の空、無理な事はぬものぢや」「いや、夫でも點して下され」と、頑でない子にせがまれて、詮方ながき葛籠の紐、松にふりかけ蠟燭に、火繩をうつす硫黄まで、旅の用意の馬挑灯、引上ぐれば眺め入り、「かゝ様、こちも此様に火を點すと、死なしやつた祖父様が、是見て嬉しがらしやるなア」と、聞くに母親胸ふさがり、「たつた一人のほんそ孫、そなたが思つて供へた物、悦ばしやんせいで何とせう、請けさしやんせいで何とせうぞいの。それに付けても父上の、敵の在家尋ねんと、大事の母様姉様とも、別れくに國を出で、ねらふ月日は重なれど、廻り逢はねばのめくと、得討たぬ不孝不甲斐なさ、嗚父上の冥途から、呵つてござらうお腹が立たう、堪忍して下さりませえ。稚心に孟蘭盆の、火を點せよとせがんだは、

思ひがけなき父上の、劔の難に身をさかれ、冥途に迷つてござるのを、物が知らしていはしたか、杖柱とも姫ごぜの、頼む夫には置き別れ、親にも永離三悪の、はかない悲しいあぢきない、世の憂き事を身一つに、寄せたは何の因果ぞ」と、人目なければかこち立て、正體なみだ地に落ちて、野路の草葉や枯れぬらん。親の心は知らぬ子が、膝にもたれて現なく、寝入ればお菊は顔を上げ、「可愛や坊が内ならば、透間の風もいとふ身の、母が膝をば菌とも、寝冷えせじと裾打著せ、我身もそこに友平が、歸るをまつの下風も、假寝の伽となりぬらん。夜も早初夜の空くもり、遠寺の鐘も蕭々と、降る雨凌ぐ傘も、破羽二重の垢付きし、大小腰に攔み差、鏗浪人のみすほらしく、歩み來かより立寄りて、「ヤレくくく」思はぬ俄雨、降ると日和になるが一時、急がずば濡れざらましを旅人の、跡より晴るゝ野路の村雨。太田道灌よく讀んだ」と、つぶやきながら邊りを見廻し、「幸の挑灯ドレ一ぶく」と懐より、煙管取出しすつばすば、「ヤ旅人さうながしかも女、路錢に盡きて野宿したか。さうとも見えぬ身の廻り、松に挑灯かけたのは、道の友待つ目印か。何者なるぞ」と立寄つて、顔差覗けば目を開き、「ヤア、そなたは敵京極内匠」「ム、さういふそちはお菊ぢやないか。テモよい所で逢うたなあ。我に逢ひたうてく、夢現にも忘れぬ程、戀ひこがれて居たはいや」と、いふ聲耳に目覺す彌三松。様子

見せじと母親が、フツト燈火即座の氣轉、心ありとは悟らぬ内匠、「コリヤ何で灯を消した。ハア聞えた、暗がりにして逃けうでな。斯う見付けたりや逃がしはせぬ。姿なら風俗なら、春の柳に梅花の薫、前にかはらぬ、うまいく。手強いそちが親吉岡、討つて捨てたも立退いたも、是皆そもじに惚れたから。命にもかへ身にもかへ、思ふ男を其様に、嫌ふものではないわいやい。空は曇るし人はなし、斯ういふ所で出合ふのが、結ぶの神の引合せ、應というて抱かれて寝い。いやといへば只一討、返り討ちやがそれでもいやか。返答せい、どうぢやく〜」どうぢやく〜は口ばかり、目には佛もなかりけり。お菊は今ぞ優曇花の、仇を討たんす氣くばりも、さあらぬ體に、「ホ、ホ、内匠様とした事が、アノわたしやとうからお前にな、心の内に神かけて」「ヤ、何ぢやく、心の内に神かけて」「アイ、惚れて居るはいなア」「惚れてゐるとはきつい嘘」「テモマア疑ひ深い。たとへ業半見る様な、よい男でもこつちから、思ふばかりはせんがない。ホンニ國に居た時から、付けて廻しつお前の心底、嬉しいとは思ひながら、アイといはれぬ人目の關、今では旅の遠慮もなし、ハテどうなりともなる氣でも、顔見て居ては恥しさに、それ故火をば消したのはな」斯うせんばかりと拔打に、切込む刀を柄で請止め、「其手ぢやく行かぬ。さう手剛い程猶執心、應といはねば其體、首切つておいても抱いて寝る。痛い目せぬ

間に得心して、サきり〜抱かれて寝上らう」と、はつしと蹴られ齒咬をなし、「チエ、念の入つた極悪人、むだ言いはすと勝負しや。サア〜〜どうぢやく」と詰めかくれば、「コリヤヤイ、ごくにも立たぬよまひ言ほざくなやい。我が爲めには親の敵、おれを其様に切りたがる、おりや又我が内股の、長刀疵が望ぢやくはい。つれなういはずと、コリヤなびきをれ」と、猫撫聲の煩憎さ、油断見すまし鐵石も、割れよとお菊が突き刀、丁ど請止め、「ヨウ〜御手練上達上達。所を我等がまつ斯う」と、付込む刀請流し、拂へば付入る虚々實々、火花を散して戦うたり。さすがかよわきお菊が刀、打落されて「コハ無念」と、漂ふ肩先一刀、切られながらよろほひ寄り、内匠が柄元しつかと取り、「エ、〜〜口をしや腹の立つ。かすり疵さへ負はせもせず、此儘死なば父上に、冥途で何と言譯せう、言譯がないわいの。エ、姉様一所に有るならば、此無念さはあるまいもの、それも今更悔んで詮なし。體は千々に切らるよとも、やはか此場を遁さうか」と、氣は磐石の女氣も、深手によわる血の涙。「チ、悲しかろ〜」。コレよう聞きや。マよく〜深い縁なりやこそ、親子ともにおれが世話。冥途へ遣るには何切がよからうな、胴切がよからうか、梨子割にせうか、薄切も面白い。待てよ初太刀は袈裟切、二の太刀に極樂参り、佛になれ」と拜み討、直にまたがりとどめの刀、ゑぐり苦しき四苦八苦、虚空を掴み無

念の最期、哀れといふも餘りあり。「ハ、、まづ一方は片付いた。心がかりはこいつが姉、おれを方々尋ねて居をろ。エ、思ふ様なら姉めをぶち放し、我を助けて置きたいわい。エ、儘ならぬ浮世ぢやわい。死んでも顔のかはいらしさ、ちと笑やいの。モウ往ぬぞよ、さばや、恨があらば幽霊に成つて出て、おれと一所に行かぬかい。エ、儘よ、何の死人に文言ぢや」と、つぶやく血刀押拭ひ、鞘にをさまる不敵者、塵打拂ひあたりを見廻し、「テモ扱も、おれにちよほくさぬかす内、ちやくと葛籠を片付けをつた。慈悲深い此内匠様へ、天道より與ふる糧、忝し」と立寄つて、背負ふ我慢の欲悪心、ウタヒ「此者共を手の下に、討つはいか様鬼神か、人間にてはよも有らじ。ハ、、」思ひがけなき葛籠より、ぐつと突出す小太刀の切先、恟り驚きふりおろす、折から歸る友平が、あやしと差出す提灯ばつたり。「シヤ曲者」と抜合せ、二打三打打合ひしが、ひらりとかはしいつさんに、跡をくらし失せてけり。「ヤア何くまでも」と、友平が、かけ出す足元躓く死骸。「ヤアコリヤお菊様が切られてござる。お菊様く。チエ今一足早くばなア、斯くやみく」と討たしはせじ。エ、しなしたり口惜しや、儂曲者逆さうか」とかけ行かんにも跡氣遣ひ、「此ほん様は何所にござる、彌三松様く」と、心は空に闇路をば、照す燈籠幸と、手早く紐を引きはどき、「彌三松様く」と、尋ぬる目先、落ちたる守りの袋物、「コリ

ヤ何ぢや、何でも敵の手がかり」と、袖に捻込み、見廻すこなた、あやしや葛籠の内よりも、きらめく刃先「コハ不思議」と、立寄り紐解き引開くる、内に彌三松、友平見るより、「ヤアほん様か、ようまめで居て下さつたなう。シテく、誰が此中へお前をば、斯うして入れて置きました、譯をいはしやれ、サ、どうぢやく」とイヤ譯は何にも知らぬけれど、かゝ様が入れて置かしやつた。跡で誰やら母様をきついに合はしをつた。おれが這入つて居る葛籠を、負うていなうとしをる故、出る事はならず。中から此脇差で突いたばかりぢや。かゝ様は何所にござる、おりやかゝ様に逢ひたいわい。かゝ様く」と、母は此世になきぞとも、知らず泣くくしたふ子を、見る友平は我胸を、百千鈞の鐵槌に、打碎かるよ心のせつなさ、「ヲ、道理ぢやく、御尤ぢやく。ガコレ何にも泣く事はない。かゝ様はの、ほんを連れて跡から來いてよ、つうつと先へ行かしやつた」「そんならわしも早行きたい」「ヲ、行かいでどうしましよ。ア、何にも知らず可愛さうに、佛様ではあるわいな。其佛より此佛、南無阿彌陀くく」いたはし菊が亡骸を、見せじ泣かせじ稚子に、隠す葛籠は、涙かくせど聲くもり、「サアほん様行きましよ」と、手を引かれ行く子は下に、母はせなかに友平が、生死を隔つ涙川、浪のあはれや磯づたひ、「かゝ様いなうく」是非もなくく三重たどりのゆく。

第七

すがるふす、栗栖くりすの小野ののの百千草ももぢぐさ、花の秋とやゆふ顔がほも、色をまじへてさまぐくに、街まちの多おほき
 在所道ざいしよみち、直すならぬ身の隠かくれ笠がさ、袋ふくろ分銅玉ぶんどうたまに鍵かぎ、畫ゑがきし板いたに寄りたかる、往來ゆききの人ひとも摺つみ頬ほ、一張はり
 はどうぢや」と胸取むねとりが、獨樂ひとりがの心木しんぎを捻廻ねまはし、胸取むねとり「サアくくく親おやは一割わり子は四割よ、欲ほの慰なぐさみ
 氣きの藥ぐすり、えいかくくく、ソレ廻まわつて有あるぞ。ソリヤ出でたは、ヲツト玉たまぢやぞ。五文ごもんあるは、
 味あじいはくくく。やつぱり今度こんども玉たまのねまりをいてこまそ。玉たまのねまりくく「イヤコレ茂九
 郎らう、其玉そのたまのねまりは人油にんあぶらというて、切疵きりきずによくくけなの」胸むね「ハテコレ話わしせずと皆みなしかく
 張はらんせく」胸むね「タイ合點あつてんぢや、玉たまよく」ヤ袋ふくろ様さま出でて下くださりませく」コリヤ笠かさ來きてくれい
 よ「イヤ簀みがきてほしい」おりや分銅ぶんどうにせう」胸むね「サア皆張はりはよごんすか。ハア時に鍵かぎは明あい
 てあるの。エイハ、そんなら親おやから勝負しやうぶぢや」と、胸側むねがははすんで眼まなこを三角さんかく。六角ろっかくのこまころり
 とこけ、「出でたのは何なんぢや」胸むね「アイ鍵かぎでごんす」と引ひかけて、皆みななで錢ぜにたくし込む。負腹まけはら立たて
 て張人はりてども、「エ、どうやらくららの有りさうな、けたいなことぢや」と一いちはな立ち、しやべる男おとこ
 を引ひとらへ、「ヤイ四三しやうざの胸八むねはちというて、手綺麗てぎれいな胸頭むねがしらを、くらであらうとぬかしたがよいか、

是こゝがよいか」と頬ほびつしやり、強はられて附鼻つけはなころりと落ち、「ヒヤアくくく」男おとこの鼻柱はなばしらを落お落お
 したな、返かへせく鼻返はなかへせ」「ひやなとは鼻はなか」「ひやなぢや」「ヤイ馬鹿ばかめ、鼻はななら爰こゝに有あるはえ」
 と、蹴けちらかされて砂すなまぶれの、鼻懷はなふせへねぢ込んで、くたくくつぶやき歸かへりける。「何なんほべら
 ほな奴やつらでも、まんざら唯ただも手繰たぐられず、相應おうおうに骨ほねが折をれる、ドレ一ぶく」とすり燧ひうち、火口くわへ
 移うつるちりく日脚ひわし、鼻緒はなぞすれしてちんがちが、ちんば引摺ひなずり下駄片くだかたし、さけた傘かさ辻君つじきみの、所しよ
 體失ていしなふ歩みぶり。「ホ、チ君達ちみたちが早はやう出でかけた。雨あめも降ふらぬにきつい用心よこぢやの」「サイナア、
 どうやら曇くもつてあつた故ゆゑ、持もつて來きて邪魔じゃまになる。いつそ獨樂ひとりがに笠がさはろかいな」「夜よばりこきめ
 らが何なんぬかすぞい、日ひがな一日いちにち阿房あほうどもを相人あいににほつとりと草臥くたがれる。併しかしおれがこま廻まわして
 手てを遣つかふのも、わいらが客きやくに腰遣こしふのも、しんどは變かはらぬけたいな商賣しやうばい。ハ、ハ、イヤモとん
 といや氣きになつたはい」「サアこちらこちらも勤つとめは飽あいたはいな、コレ聞きき、此間こゝも經師屋きやうしやの提槌さひづち見みる
 様な物もので、わしが錢箱ぜにばこをすつての事こと、突つき碎くだかうと仕しをつたわいな」「イヤそりやまたしもぢ
 や。わしや先度せんど、竿さなの様な物もので突つかりよとした」「ハテそれは長い物ものであつたの」「サア鳥差とりさしで
 あつたか知らぬ、ホ、ハ、ハ、」胸むね「イヤいつでも小鹿こしかやお仙せんめは、うきくしけつかるが、黄痘わうたん
 の菊野きくのめは、頬ほばつかりが浮々うきうきと黄色きいろで、棚たなの下したに小こさうなつてけつかる所ところは、とんと瓢箪へうたんの

化物ぢや」「サアそんな事かして、客を押へうとしても、ぬらくら欺して抜けをるは」「アリヤ
 だますぢやない、なまづぢやはいの」馬「ハ、わいらがいふ事聞いて居ると腹がかへるは
 い」「チ、減ろよりましかいな」馬「イヤほんに、わいらも腹が淋しなつたら、早う仕舞うてこ
 ちへ来い。なんと立てるがな」「ハ、お前の所は何所ぢやえ、こちか」「こちや七月のない所
 ぢやはい」「ソリヤ何所ぢやいな」「ハテ盆なしぢや」と打笑ひ、荷を振かたけ別れ行く。若
 黨と、いへども年の古大小、さすがに武家のおとなとて、ぎつと角ある國訛り、「コリヤ〜夜
 發ども、今夕も又われ達に、揚料とやらを下さるからは、宿所へ早く引取れよ」と、財布とく
 とく明いた口、めい〜一歩有封に入る。「年の廻りで有りがたい、今宵で三日金貰ひ、おいど
 へ土を付けずに仕舞ふ。コリヤマアどうしたお志」「イヤサ別の子細はない。此所の鎮守牛頭
 天皇は、靈驗あらたなるによつて、手前が御主人、七日の通夜を遊ばさると、御祈禱の其間、
 施しのお金だはい」「ソリヤこそ様子がありまの松ぢや」「チ、そんならこちらは因幡の松よ。
 ヲッおばよ四十九で白齒で島田で信濃へ嫁入、ヤレ〜こんな詰らぬ、ヨヤサノサノ〜事
 はない」仇口々に歸りける。「ハテ騒がしい女ども、ドリヤ此様子御主人へ、申上けん」と老人
 の、心は先へとつかはと、元來し道へと引返す。薄を分くる秋風が、吹送りたる乗物は、急ぐ

とせねどおのづから、くるす野にこそ著きにけり。「ハ、只今途中ながら申上げたる通り、
 夜發どもは残らず拂ひ置きました」と、引戸開くれば立出づる、容儀器量もよし岡が、娘と誰
 かゆふけはひ、作りやつして辻君と、見せばや見せん其風情。「今宵も是に通夜すれば、明力
 に迎ひの乗物。そち達は旅宿へ歸れ、早う〜」と追ひかへし、邊り見廻し獨言、「旅宿近邊の
 人目を憚り、毎夜爰まで乗物にて忍び出で、往來の人をためし見るも今宵で五夜さ、天ぞと思
 ふ者にも出合はぬは、神佛のお恵みのないのかと、思へば悲しい身の上。一味齋が娘ともいは
 ると者が此様な、夜發立君の姿にやつし、苦勞辛苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思
 ふ念力に、尋ね逢はいで置かうかと、男勝りの其魂、一腰隠し置く露の、草のしけみに立盡
 す、絹物ながらしみづきて、一重に薄き青侍、通りかよるを走り寄り、「遊んでおくれ」と袖
 口に、手を差込めど臆めぬ體、鼻に扇の厭味して、「ハ、ア月前の惣州、面白いなあ。併し囊中
 に四文銭が三銅、是を遣したとせんの、二文の釣にかよるより、我住む宿へ歸ろやれ。コレそ
 もじは其處にいつまでも、いなりの惣嫁ぢやあるまいか」と、まつ毛ぬらして、行過ぐる。大
 道一ぱい大股に、すれぬ太股すれた顔、取出し相撲が歩み寄り、「菊野よ、小せんよ。又今夜も居
 らぬはい。ホ、チえらいなく〜。姊よ、一番もんでくれぬかい。いかなお敵でもなア、コ

リヤ左差いたらなア」と寄りかけしが、我より拔群大女房、見るよりしよけるあまへ聲、「伯母さん地取見にごんせや、だんないわいの。どいつでも止めをつたが最期、此いたち川が聞かんのぢや。エ、コレおれがが見せたい」と、嘘は見えすく禪で、伊達こきちらしいたち川、尻こそばうも逸歸る。又の往來をまつ蟲も、すだく鈴蟲響の音、八條流の乗振に、立派を見する西國武士、進ませ手綱行く駒の、道をさへぎり、「申し、遊んでおくれ」と掛鞍に手をかくれば、「ヤイコリヤ、御用先を妨ぐる不敵の女め、止めるに事をかき、馬を止むるとはよつ程な助兵衛やつ。そこ放せ、下れ、下りをらう」「イヤ、コリヤ、家來ども暫く待て、摺留の心を以て扣へしは、様子ある女と見ゆる。燈を持って」と提灯の、火影にとつくと互の人柄、見上げ見下し打點頭き、「コリヤそち達は行先の出口に扣へ待合せよ。早行け」と家來を拂ひ、「實さま絶えて久しき對面といひ、殊更夜隱の事なれども、中々見違へは致さぬ。こゝ元は藝州吉岡氏の御息女でござらうがの」「エ、イヤ左様の者ではござりませぬ」「イヤイヤ隠召さるゝな」と、馬の三途へ膝折りかどめ、「拙者事は立浪家の執權、轟傳五右衛門と申す者、一味齋殿の御高名を慕ひ、お國へ推參致せしは早十七ヶ年以前、其時そことは御幼少の折なれば、よも見覚えは致されまい。御親父には數度御對顔致し、劍術與義の端々をも、承り

得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衛門、是までも書通を以て音信絶えず。然る所一味齋殿不慮の横死と聞きしより、エ、しなしたり残念や、直様馳付け諸共に、敵の詮議と存じたれど、仕官の身なれば詮方なく、明暮無念に思ひしが、不思議にも今その息女に廻り逢ひし事、吉岡殿を再び見申す心地して落涙致す。さりながら心得ぬ其有様は、エ、聞えた、コリヤ敵をねらはん其爲に、姿をやつせし辻君なるか。ハテサテたくまじきお志、女ながらも天晴家柄、いか様親父の胤なるぞや。ホ、ヲ出かされたり、頼もし」と、感じ入つたる面色に、人の心の花見えし、園ぞと名乗り手をつけば、傳五右衛門は懷中より、焼印の札取出し、「敵の在所分明ならずば、六十餘州の端々までも、捜し尋ぬる所存ならんが、今九州には新關あつて、迂濶に通行なりがたし。其こそ關所の往來札、惠むは夜發へ今宵の花代」「エ、忝いお志、本望遂けて此お禮は」「ヲ、サ目出たう承はらん。おさらば」「さらば」と默禮し、誠の心つくし人、馬を早めて急ぎ行く。便りなき身は世の人の、情の詞力草、伏拜みてぞ泣く涙。かよる折からいつきせき、來かよる奴もまつ黒な、紺のだいなし分らぬ闇、ほうど躓き行當り、「是はしたり、めつたに心のせきまする者だから、でつかちない危相致した、まつびらく。次手にお尋ね申さうは、此所の鎮守とやらに、女中一人通夜なされてござるのを、御存じはあるまいかな」

「ム、さういやるは友平ではないかいの」「エ、さうおつしやるはお園様でござりますか。是はしたり、ヤレく嬉しやく、何時か仰置かれましたる御旅宿へ、漸著仕つたる所、是に御座なさると聞くやいな、イヤモ知らない道を暗雲に、尋ねましてごはります」「チ、大儀々々。長しい道中といひ、女子供の初旅なれば、さぞかしそなたのいかい苦勞、よう介抱してたもつたなう。さうしてアノ妹や彌三松は、旅宿に休んで居るかや」「成程ほん様は御旅宿で、佐五平に急度預け置きましたが、随分御機嫌は能くござります」「チ、それで安堵しました。いやもう案じられたは妹が事、虚性な上に持病の癩、もし道で發りはせなんだか、達者であつたか、無事なか」と、かきたぐる程尋ねられ 答へん詞あら涙、膝に淵なすばかりなり。「ム、さうつむいて涙の體は、合點が行かぬ氣遣はしい。エ、どうやら胸がさわがれて心元ない、様子を早う聞かしてくれ。なぜ返事せぬコリヤ友平、何とぢや、どうぢや」とせりかけられ、「エ、無念な、口惜しうござりますはいなう」「ナニ口惜しい無念なとは」「サア申上ぐるも面目ない事だが、お妹様お菊様は、人手にかゝつてあへない御最期」ヤアと仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出でず、むしやぶりの付いて引きしやなぐり、「エ、くくく、何のことぢやぞいやい、誠かいやい」「チ、お道理だくわいの」「サア何者の所爲、敵は何やつ。早ういへ、こりやどう

せうぞいやい」「チ、お道理だくく、道理でござりますはいなう」「サ、コリヤ何所での事ぢや」「サレバ、須磨の邊までお供は致しましたが、旅勞れにや御持病發り、うろたへ廻つて私めは、駕籠借るべいと跡の宿へ引返し、又立戻る途中にて、あやしき曲者、下郎を目かけ切りかけしを、抜合せ二打三打、合す間もなく逃行きしを、追かくる足元に、痛はしやお菊様、明所もなしに數ヶ所の深手、呼びたけつても返らぬお命。まだ天道のおひかへか、若子様にはお怪我もなければ、悲しい中にも心を勵まし、此曲者めは必定敵、追付いて捕へんと、思へど遙時も過ぎ、方角知れねば詮方も、なくく御骸取納め、御筐にもと切取りし、此黒髪をお妹様と、思し召されて下さりませ。御歎きもお腹立も御尤だ、御尤でござりますはいのく。いしこらしくお供をしながら、此様な事に逢はせましたは、手を出してせぬばかり、やつぱりおらが殺しましたも同じ事、主殺しだわいのく。おだくになされたとお恨はない。サア突かつしやりませ、切刻んで下されよ」と、首差付くれば泣く目を拂ひ、「コリヤ身の言譯をするに及ばぬ、少しなりとも手がかりに、なるべき事をなせいはぬ、うろたへたか友平」と、いはれてそれよと取出す、守り袋を手につけて、此中にはいか様な物があるぞ」「サア臍の緒がごはります」「シテ書付は」「永祿九年五月十日の誕生とばかりごはります、手掛りにはなり

ますまいかな」稚名さへも記してない書付、あんまりばつとした物ぢやが」スリヤ手がかりにはなりませぬか」ホイはつとばかりにどうど坐し、思ひ極めし身の覺悟。お園は形見の黒髪を、撫でつさすりつ肌はだに添へ、「七度結んで姉となり、六度契りて妹と、いひかはしたる甲斐もなき、親の敵をうつとも、夢辨へぬ稚子に、さぞや心の引かされて、迷うて居やるであらうなう。迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも。逢ひたいわいの」と聲を上げ、くどき焦れて歎きしが、漸涙押とどめ、「オ、さうぢや、此切髪を添へとせば、兄弟寄添ひ居る心、先の世までもはらからの、契り忘るな」長かもじ、そのこまぐらの事までも、未來へつけの櫛のはに、解きほどかれぬもつれをも、しのぎおほせて勝山と、縁起祝ひし黒髪の、色もつやく、烏羽玉の、闇こそ幸ひ友平は、腹存分に切りあばき、一息ほつとつき影の、出汐はおのが身の知死期、苦痛隠せど夫ぞとは、覺りしお園も氣を張詰め、「チ、天晴健氣の切腹は、慥に園が見届けた。此世にごさる母様は、たとへ御用捨あるにもせよ、未來におはすると様へは、命捨てずは言譯立つまい。チ、よう腹切つた、出かしたなあ。とはいふものの不便や」と、悔み惜しめば友平は、一期の終り大聲上げ、「ハ、ハ、ハ、有りがたや忝なや、ふがひない奴めでも、家來と思し召せばこそ、お歎きなされて下さるよ。エ、勿體ない罰當り、申譯になる事なら、下

郎めごときのどん腹を、百二百切つたとて何惜しからう。よし御宥免あるにもせよ、此様な不吉者が、大切な敵討に、何とお供が致されませう。エ、淺ましい業さらし」と、我と我身を掻きむしり、五體をもめば疵口より、流るゝ血汐紅あざに、草葉染めなす血の涙、落ちたる守の臍の緒を、引搦んで眼を見開き、「エ、思へばく腹立や。主人の敵、我身の仇、何國に隠れ忍ぶとも、一念通さで置くべきか」と、怒りの齒ぶしに噛みしめ喰ひさき池水へ、はたと打込み引取る息、俄にはけしく逆浪打ち、吹上げ吹巻く水煙、忽お園が懷中に、音を啼く千鳥香爐の不思議、圓ハテいぶかしや。池水はけしく立登れば、啼く音を發する千鳥の香爐。もしや吉事か、但しは凶事か。何にもせよ、怪しき業を見聞くよな」亡靈「チ、イ、チイナウ」「行くと云ふのにはせはしない、頻りに儕を呼返すは誰ぢやぞいやい。ヤア何所からぢや、慥こゝらに聞えるが」と、うろく、戻る銅八は、池の邊りに聞耳立て、「ヤ、何と、明智光秀が亡魂ぢや。ハテナウ其わろが又何でおれを呼返した。ム、ヒヤウ、ヤアくく、すりや今まで眞實の親と思ひ居つた小島の郡代京極新左衛門は、我を拾ひし養父にて、誠の父は明智殿であつたよな。ハ、ア思ひ合せし事こそあれ、音成が館にて、四法天但馬我を見咎め、主君の面ざしに能く似たり、光秀殿の忘れがたみにてあるべしと、言つたる詞ひしくと、今こそ思ひ當つたり。エ

エさは知らずしてむざくと、あつたらしき郎等を、失ひしこそ残念々々。併し心得がたきは此年月、過行き去つて今日只今、呼びかけられし子細はいかに。ム、扱は、山崎の合戦に打負け、此所に命を落す際までも、帯せられたる蛙丸の名劍、久吉が手に移らん事を悔みいきどほり、是なる池中に隠せしとや。則御首をも此池にて、洗ひ流せし其血汐、こりかたまりし魂魄残り、守護せられたる名劍の、其名を感じ集つたる、蛙の聲をかりそめに、素姓をしらせ劍をも、譲り與へん御所存とな。ハ、有りがたや忝や。其上に我が行末の事までも、思し召されて久吉に、遺恨の刃は合はすとも、四海に望をかくるなどは、後車のいましめ子を思ふ、父の大恩ハ、ハ勿體なや」と、三拜九拜悦び涙、いで亡父の御賜、拜領せんと浮草を、かき分け探り當りし名劍、押戴いて拔放せば、劍の氣を得る蛙面の相、猶も頻りに蛙の聲、又も啼出す香爐の奇特、思はず兩人飛開き、互にすかし、見て見ぬふり、劍を鞘に曲者は、納り返つて行先に、向へばよくる右左、付き纏はれし薦かつら、「長き契りを神かけて、忘れぬ人を今更に、往なしはせぬ」と引止むる。「往來を妨げる、わりやまあ何所の者ぢや」「アイ私が生れは永祿九年五月十日の誕生」「ヤ、ハテナア、夫が又何で爰に居りやる」「ハテわしや惣嫁」「ヤ惣嫁ぢや」「サアさうでなくば傍へ寄つて、抱付いて見やしやんせ、自慢ぢやなければど伽羅の香は、幾夜留めて

も留め飽かぬ、きだんになる氣はないかいな」と、もたれかよれば、「有りがたい、初對面からはすんだ穿鑿、斟酌なしに付合ふからは、善は急げぢや今爰で、泣かして見たいは此懷」「ヲヲしこなしやの。肌打明けるはお前の心中」「見たくば見せう望みが有るか」「サア望んで見たいは此劍」「イヤあぶない事よしにせい」「イヤ切るわいの」「ソリヤ誰を」「ハテ指を。わしから心中見せるのぢや」と、いふより早く劍の鏗際、物打しつかととり頭、渡せ渡さじ二二のせめ、帯取り芝引きひしぐるばかり、捻合ひ引合ひ引取るはずみ、拳放れて夕顔の、棚へはからす刃上れば、取りおろさんとかけ寄るを、遣らじと支ゆるお園がひはら、土足の當身にたじくく、たじろく隙に、かけ登れば、つゞいて跡よりかひくしく、身は鬮鼠と這上り、互に捜し尋ぬる太刀、取るよりいらつて切りかくる、強氣の曲者劣らぬお園、打合ふ刀は氷柱のごとく、微塵に碎け飛散るにぞ、跡にしさり身を構へ、「鍛ひし刀も名劍の、徳におされて折れたるものか」「ヲ、不思議をあやしみを啼きし、其香爐こそ久吉が、祕藏の器物と聞きたる故、打碎いて暫時の腹いせ。又是なる夕顔の、實のりし數の瓢こそ、取りも直さず千なり瓢箪、眞柴が家の馬印、まつ此様に」と小踊し、只一なぎに切拂ひ、直に踏込み打ちかくるを、くどるは神力くさり鎌、ちやうくはつしと請止めて、「今打ちかけたる虎亂の太刀、切先下りに打ちおろす

は、もしや尋ぬる敵か」と、いふ間稻妻劔の電光、ひらりと飛んでをちこちの、霧に紛るゝ曲者を、遁さじものと一足に、飛んでをりしも牙え渡る、月の光を力にて、跡をしたうて追うて行く。

第八

見えわたる、高根々々に消え残る、雪のふどきの音さへも、吹きあらしたる松の風、いとど淋しく杉坂は、村山里に亡人の、名をのみ残す石の數、邊りに立ちし竹柱、茅が軒端もそこく、尺にもたらぬ草薙、内に音する鉦のこゑ、毛谷村の六助が、母におくれし其日より、明暮爰に在すがごとく、喪に入つて悲しみを、盡す心ぞ殊勝なり。日脚も晝に程近き、山持の樵ども、戻りかよつて小家の前、「六助殿どうぢやの、仕業の次手に見舞ひます」と、口々いへば念佛を止め、「チ、皆精が出るの。煙草でも呑んで休ましやれ」「そんなら皆一ぶくせうかい」「チ、よかるく」と荷をおろせば、「サアくくく爰へく。幸ひ入ればなが沸いた、マア初穂を母者人へ、お茶湯上げて」と墓の前、供へ置いて手を仕へ、「母者人御らうじませ、皆深切に見舞つて下さつた。ア、生きてなら悦ばしやらうに、何をいうても片便り。ヤ母者人が好物

故、今朝供へた炒り物、是なと入れて茶を參れ」と、何がなあいそ差出す、あられ喰ひく、「コレ槇藏、樗六もどう思やる。死なれた婆様は仕合せ者ぢや、一人も一人から結構な息子を持たれた故、居られる時から生佛、今石佛になられても、アレ見やしやれ、やつぱりあの様に、四十九日のけふまでも、三度々々拵へてする供へられるといふは、果報なわろぢやないかいの」「チ、松兵衛のいやる通りなれど、六助殿の孝行が、己は手ひどく迷惑するてや」「ソリヤ又なぜに」「さればいの、又してもこちの婆様が、儕は不孝者ぢや、アノ六助を見い、六助をといはると故、来て見ればあの通り。何でも昨日は孝行をやらかして見てこまそと、山を休んで打かより、十日前の孝行を一時に拵へ、くらひ物の喰飽、悦びは仕やらいで、ヤイのらめ、仕業はせず役にも立たぬ錢を遣ひをると小言八百。イヤモウ孝行も自由にさす事ぢやないていなう」六ハテそんな事はいはぬものぢや、どの様にいはしやるとも、逆らはぬが直に孝行。親のあるうちぢや、皆随分大事にかけさんせく」「ソレく、何所も孝行が流行るかして、六助丁どこなたの様な大きな侍が、母親を負うて歩行くと村での噂。聞きやこなたの内を尋ねたけな、大方こりや孝行くらべに來たのぢやあらう。コレ必ずとも負けまいぞや。イヤ負けまい次手に珍らしい事がある、此間から端々に、毛谷村六助と試合して勝つたなら、知行五百石で抱へうと

殿様より高札が立つたと國中は是沙汰。ソリヤ慥に殿様が、こなたを家來にせうとおつしやるを、何ほでも合點さしやれぬ故、腹立てての事ぢやある。なぜ又奉公さしやれぬ」と、問へば六助打笑ひ、「ハテおれぢやてゝ出世するをいやではなけれど、元劔術を覺えたも高良明神の靈驗、我に勝つ者に逢はゞ奉公せよと、神の禁破られぬ故、どなたへも斷りいうてるのぢや」と、聞いて皆々納得し、「いか様尤さうな事ぢや。ガそりやさうと、いつまで爰に居るのぢやぞいの」「イヤモウ唐では三年も居る事さうなが、明日は五十日の念佛も申さにやならぬ、今夜いんで其拵へ、皆も揃うて參つて下され」「ソリヤ御造作ぢや。ヤ長話で日はたける、それ聞いてがつくりとひだるなつた。たべ立ちやない聞立に、もういにます」と惣々が、柴荷てんでに打ちかたけ、籠をさして歸りける。六助は獨言、「皆懇な衆ぢやな。シタガ母者は人ハ嘸やかましごんしよ。ドリヤ抹香でも繼ぎましよ」と、立つや煙も一筋に、姿には似ぬ香爐の薰、身は埋火の埋もれて、尾羽打枯れし浪人風、背に老いたる母と見え、六十を越すや坂道を、漸たどりの墓近く、「イヤ申し母人、だくほくの山道、負はれてござつても嘸御苦勞、ちと是でお休み」と、おろして敷かす菅笠の、上にいたはり足腰を、撫でつさすりつ介抱に、六助つくづく感じ入り、「母御さうなが、お年寄を連れまして御氣特なお侍、マアどれからどれへ

ござりますぞ」「コレハくお尋ねに預るも他生の縁、拙者は元上方の浪人者、御覽の如く母一人、老年の耳は聞えず、何卒宜しく主取致し、老母を育む種にもと、此西國へ下れども、微運の某、有付とても定らず、斯くの仕合。見ますればこなたにも御長髪の體、殊に新たなる墳墓と申し、率爾ながら御親族に」「ハイ、わしも獨の母に別れ、忌明まで墓の前で、せめて香花取りますばかり」「夫は近比御愁傷察し入る。シテこなたの御在所はな」「此籠の毛谷村六助と申す者」「ナニ、其元が六助殿。ホイ」と吐胸を差うつむく、顔打守り不審の六助、「名を聞いて濟まぬ顔色、何ぞ様子ばしござるかな」と、尋ねられて面を上げ、「お目にかよるも面目なけれど、申さねば叶はぬ時宜、ちと折入つて其元に、お頼み申したき儀がござるが、何とかお聞届け下されうか」「ハテ何事か知らねども、様子によつて頼まれませう。マア其譯はな」「成程思召もいかどなれども、只今も申すごとく、一人の此母、ぶがんの上に百日と限りある膈病、せめて一日半日も安樂にくらさせたく、勤仕を望めど心ばかり、詮方盡きし折に幸ひ、當國へ来て見れば、所々に立てたる國主の高札、毛谷村六助に打勝ちなば、五百石の知行充行はんと儀、見るに心は飛立てども、聞及びたる六助殿、我とても一流は立つれども、中々及ばぬ未熟の某。トあつて此儘打過ぎなば、いつを春とて母人の、笑ひ顔見る時節もなし、兎やせん角

やと思案の終り、所詮義を捨て恥を捨て、勝負に負けて下さる様、無體の頼せんものと、思ひ詰
めしも母の爲、とはいひながら、武道にはづれし此願ひ、弓矢神の冥加にも盡果てん。腰拔武
士人でなしと、おさけしきも存じながら、母故なればちつともいとはぬ。推量あつて右の段々、
御聞入れ下さらば、御恩は死んでも忘れまじ。限りある老母が命、見立てし後は國主の御前、今の
子細を申上げ、腹切つて御恥辱、其時雪ぎ申すべし。ひたすらお願ひく」と、土に頭をすり
寄せて、涙と俱に頼みける。六助は物をもいはず、黙然として居たりしが、やとあつて横手を
打ち、「あつぱれく感心致した。恥を捨てての御孝心、それでこそ誠の武士。いかにも聞届け
ました負けませう」「エ、何とおつしやる」「イヤサア、御手練もござらうが、おそらく六助を打
たん者、マア近國には覺ない。ガ我とても母におくれ、明暮戀しう存するばかり、親持ちし身
は御同然、御志推量致した。六助こなたにぶたれませう」「スリヤ眞實聞分けられ、勝負に負
けて下されんとな。ハ、ア有りがたいく、御恩は此身に餘る悦び。コレくくく、母人様、俱
にお禮をく」と、いへど聞えぬ聲の悲しさ、「詞に盡きぬ御情、重ねて緩々御返禮」「ア、イ
ヤイヤ是も則ち親の恩、随分孝心怠なく、御出世あらば我等も大慶。隙取る内に人や聞く、片時
も早く試合の願ひ、再び逢ふは表向、所はきはぬ御浪人」「ハ、ハ、ハ、重々深き御仁心、仰に從

ひ直様お暇」「必ず待つてをります」と、約束かたき胸と胸、解てただけしきつする男、共に介抱
母親を、負はすも負ふも孝行信義、互の目禮浪人は、別れて歸る元の道、六助跡を見送つて、「ア
ア親といふものは有りがたいものぢやなア。見ず知らずの侍なれど、誠の心を感じた故、負ける
試合を請合うたれば、悦び勇んで歸られた。是を思へば親程大事の物はない、何をするも母への
追善、どうで今夜はいなすばなるまい、お墓へ水なと新しう、替へておかう」と小家の内、取出す
桶は浅けれど、孝行深き谷水の、清き流へ汲に行く。春の日も傾く運のはかなさや、何とてかよ
る憂き難儀、吉岡一味齋が若黨佐吾平、お菊がかたみ稚子を、抱けど老の足弱く、杉坂越にさ
しかよる。「チ、イ、イ」と籠より、走り付いたる二人連、かますの袖も角ある人相。佐五平は立
止り、「最前から呼びかけるは身どもがことか」「チ、身どもともく。親仁どの、馴々しい事
なれど、ちつとこなんに無心があつて、籠から付いて來たのぢや」「オチ無心とは何の無心」
「ハテとほけまい。人絶した山の中、無心といや知れた事ぢや。懐に持つて居る、路銀が借して
貰ひたい」と、跡と先とを引挟み、直にはやらぬ荒縞の、横には太きしかけなり。見て取る老
功にこく笑ひ、「扱はうぬら山賊ぢやな。ハアテ目利の悪い、三五日の貯はあれど、銀とい
うて持ちはせぬ。よし有るとても我達に、借してくれる銀はない。そこのいて早通せ」と、引退

けて行過ぐるを、物をもいはず抜打に、肩先四五寸切下ぐれば、ウンとのつけに反りながら、「ヤアだまし討とはにつくい盗賊、高の知れたる下郎と侮り、不覺を取りし口惜しや」「ヤイヤイヤ、下郎とは慮外者め。吉岡が若黨佐五平、門脇儀平見忘れたか。京極殿に一味の科、追放しられて此ざまなれど、切取するは武士の常、おのれが連れてをるは、お菊めがへり出した衣川が小悴、そいつ共にぶち放すが内匠殿の心休、覺悟してくたばりをらう」と、聞いて佐五平恟りし、「ナニ門脇儀平とな。エ、老眼故見違へて残念々々。敵の荷擔人主人の仇、是しきのかすり疵、やみくゝ一人死なうか」と、口にはいへど稚子の、身の上いかごと心は空、見廻す小家は是幸ひ、「ちつとの間這入つてござれ」と、押し入れて眼を配れば、すかさず二人が切付くるを、手負ながらもさすがの佐五平、抜放して切結び、二人を相手に働けども、初太刀の痛によるめく老人、切るやら突くやらはつるやら、なぶり殺しの折も折、水没入れて六助が、戻りかよりし此場の體、様子知らねど飛びかより、二人が襟上引掴み、力に任せ投付くれば、ぎやつとばかりに絶入つたり。六助手負を引きおこし、「コレ老人、氣を慥に持たつしやれ。ホホ扱切りをつた、最ちつと早くば斯うはさすまい。コレ御老人く、旅のお人」と呼生けられ、物は得いはず佐五平が、小家に指さし手を合せ、「頼むく」も口の内、深手の弱りがつくり

とこたえ入る息ぞはかなけれ。「コレくゝ老人、ア、もう息は絶えたか、いとしやのう。何ぢや知らぬが小家の方を指さして、拜んだは合點が行かぬ」と、見やる小家より稚子が、走り出でて死骸の傍、「べいよく」と押し動かし、足指りしたるいぢらしさ。「ハ、ア是ぢやな、べいべいといふからは、定めて主の子といふ様な事。コレほん、こはい事はない。こなたは何所でとよ様の名は何といふぞ」と尋ねれば、かぶりふつて泣くばかり、「アまだ辨へのある年でもなし、思へばくゝ不便なこと。コレ死んだ人、氣遣ひさつしやるな、此子はおれが預つて、親御の手へ届けます。サアくゝほんち、是からおれが連れていぬ。是はしたり、著物まで血だらけぢや」と、いひつよぬがす四身の小袖、腰に挟んで稚子を、懐へ抱入れ、「たくましい男の子ぢや。チ、泣くなくゝくゝ。ウツねんくゝくゝや、寝たら鼻へ連れて行こ」と、すかさず間に以前の悪者、性根付きしか起上り、「ヤイヤ、うぬは何所から出てうせて、何で仕事の邪魔ひろぐ。ア、聞えた、おいらをのめらせ其間に、銀をうぬがくすねたな。さうはさせぬ」と後抱、しめ付くるを見向きもせず、ウツチ、かはいものを誰がいの、起きたら山からこはい伯父が、ソレくゝくゝ隠りよ、ハア」と身のひねり、前へどつさり起しも立てず、素頭みぢんに岩の角、これにもこりぬ門脇儀平、むしやぶり付くを頭轉倒、胴骨しつかと、泣出す懐。「チ、泣

く泣くなく。ウッねんくころんくや、寝たらかよへ連れて行こ踏付けられて七轉八倒、死骸は谷へ、餘念なく、我家をさして三重立歸る。

第九

「勝負は見えた彈正殿、お手柄く。立合ひ召さるよと早勝と見えました。何と會平治殿、違うたものではござらぬか」「いか様軍八殿、いはる通り通れ御手練でござる。ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどと、人もなけなる廣言は、最早是でいはれまいがな」「イヤモ段々誤り入りましてござります。何が山持の透間には、在所の者どもを相人に、我流無法の叩き合、ヤレ六助は劍術がよいの、兵法を抜けて居るはのと、誰いふとなき取沙汰、ばつと噂立つたのが今での迷惑、誠の藝に出合うては、中々叶ふものではござりませぬ。こはやのく」「ソリヤ知れた事だ。儂が雑言吐くを殿も憎しと思し召せばこそ、六助に勝れし者あらば、五百石にて召抱へんとある高札を、所々に立て置かれたや」「ヲ、サ、然る處、鞍馬山の僧正も閉口する劍術者、微塵流の親玉が顯れ出でし故、殿にも甚だ御悦び、則御前に於て兩人が立合、御覽遊ばされたく思し召せど、家老 轟殿が、今一息不吞込だから、儂があばらやにて立合せ、打勝つにお

いては召抱へよと、兩人へ見分の役付けられた。よつほどむづかしい試合であらうと思ひの外、イヤ手間も隙も入る事か、彼城下町の煤取に、古疊を叩くより心安く見えたはい。ハ、ハ、ハ、。扱々先生恐れ入つた、イヤ先衣服を召替へられよ。早くく」と廣蓋に、吉良流の折形包、鬘斗目の衣服麻上下、御紋付に著せかゆれば、忽ち見かはす其人柄、詞付横柄に、「イヤナこそな者、假令打負けたればとて力を落すな。是からが修行の所だから、随分出精致したがよい。後々はよくならうく」「コレ先生いらざる御教訓、お構ひなされな。ヤイ儂御領分の奴なれば、お慈悲を以て深きお咎はあるまい。なれど、以後をきつと嗜みをらう。ソレ家來ども、乗物是へ、イヤ先生お召しなされ」「是は憚り、やはり此儘歩行致さう」「イヤテヤ、只今よりは殿の御師範、我々が爲にも先生なれば、ひらにく」「然らば御免」と乗移るを、直に昇出すお六尺、七尺去つて師範を得、悦び勇み出でて行く。門送りして六助は、つよく立つて獨言、「ア、誰々も孝行にはしたくないもの、見ず知らずの人なれど、親御を大事に思うて、侍のいひにくい事を打割つて頼まじやつた、其實心な所がどうも黙止しがたなさ。契約の通り打まけて進ぜた今日の試合、イヤコレ必ず禮には及ばぬぞや、是もやつぱり親の威光故ぢやと思つて、存生の内に随分と、孝行を盡さつしやりませ。おれが様に死別といふものは、何したとてとんとま

めし氣は無いぞいの。必ず大切にさつしやれ」と、いひつゝ見やる島道、眞黒になつて山賤ども、すたくいせき走り付き、「サアくくく六助殿、内へ這入つたく。へしやけたはいのく、こちらまでも鼻がへしやけたはいの」「ハテやかましい、何の事ぢや」「何の事とはこなたの事ぢや。六助に勝つた者は抱へうと、殿様から方々へ立てて置かしやつた高札を、奴どもが皆引抜いていんだはいの。ぢやによつてへしやけたはいのく」「ソリヤ何ぞあつちの勝手づくで持つていんだもので有るぞい」「イヤくく夫ばかりぢやない、六助めが頬栞とはきつい違ひ、ぶたれをつたが其いぢらしさ、大方骨が碎けたである。イヤ今時分は泣くく天窓のかけを尋ねて居るであらうのと、口々ぬかして往にをつたが、こなさんほんまに負けたのかい」「イヤ啞ぢや、殿様の御意ぢやから、勝負をせうと言つては來たれど、爰で立合つては晴立たぬ。殿様のいひ付ならば、御前きろりがよい、小倉からお召しなされたら、何時でも行つて勝負せうと追戻したが、それを腹立てて悪口いうたのであるぞいやい」「ム、さうかいなあ。それに又額の其疵は」「是か、是はあの、ハ、ハ、ハ、それく、あの著物干しに出て、入口の石に蹴躓き、竹垣で搦破つてのけたのぢや」と、啞もまつかい血にそみし、額押へてくるめる詞、しぶくながら栗右衛門、「イヤコレ残りの衆ら謎がある、六助先生が今の詞とかけて」「ム、何と解くの」「サア極

めてある掛目よりたんとある干鯛と解く」「其心は」「ハテまけた聲ぢやと思はるよ」と、にがり切つてぞ歸りける。「あいらがあの様にいふのは、一手も習ふ師匠ぢやと思ふからの深切、馴染のものどもに愛想つかされても、人の爲になる事なら厭ひはせぬ。併し得心した事ながら、負けたと思やがつくりと力ない。ヤ是は扱、腹までが急に力なうなつた程にの、オットよし、昨日庄屋から貰うたぼた餅、鼠が引かすばやつぱり其儘あるで有らう。ドレ孤殿にも喰はさう」と、表に出でてそこらを見廻し、「コレ孤殿戻らしやれ。それ崖へやなど落ちまいぞ。是は又何所に遊んで居る事ぞ、孤殿々々。イヤくく戻つた所で彼のぼた餅がなくば手持ぶさた、先有るかないか見てこう」と、子供にさへも偽りを、いはぬ生得生抜きし、梅と椿の太木を、直に住家の門柱、立ち添ふ花も八重葺の、霞の屋根に蔦の壁、草の扉にイむ老女、外面に干したる四身の小袖、ハテ心得ずと差覗き、見入れる家の一壁に、鐵棒鼻捻山刀、半弓など懸け置きしは、山賊にてもあらんかと、心に納めしとやかに、「コレハ心願あつて國々の神社を廻る年寄の一人旅、脚を痛め迷惑致す、暫しの舎り御免なれ」と、案内聞くより六助は、納戸を出でて迎へ入れ、「見れば御老人の旅勞れ、嘸御難儀、宿はせずとも、休息程の事は緩りつと御勝手次第」「是は是は忝い、左様ならば」と打くつろぎ、圍爐裏に緩り鑊子の下、さしくべる木もほたノ」と、

心置なき饗應に、「イヤなう御亭主、どうやら獨住の様に見請けましたが、左様かの。但し御兩親でもござるかの」「イヤ、母一人ござつたれど、近き頃相果てられ、今ではほんの寡ぐらし」ヲ、それは不自由にござらう。何と物はいうて見ずくぢやが、わしを親にさつしやれぬか。斯う見た所が、丁どよささうな親子ではないかいの」と、すつかりした事いうた顔、どうやら小氣味悪洒落な。「ハ、座興も旅の憂さはらし、テモ氣の輕いお年寄ぢやなう」「イヤコレ座興ぢやない、眞實親になりませう」「ム、そりや又なせな」「サア心さまの遅しさうなこなたと見込んで來た事ぢやもの、まんざら無手では來ぬはいの。コレ、爰に四五十兩程はしつかり、土産も持つて居るし、まだ其上に味い金設けの相談もあるはい。サア、早く親子になつて、何もかも覆ひかくしなしに打明けて談合する氣はないかいの」と、金から取入り一詮議と、せけどもせかぬ小點頭、「ヲ、品に寄つたら談合もせう、親にもせうが、とつくりとおれが心の極るまでは、退屈ながらあの一間で、マアゆくりと待つたがよい」「夫ならとんと腰するて、やんがて孝行請けませう」と、互に探る肌刀、身内と知らで暫くは、疑ひあひの破障子、引立ててこそ入りにける。跡には不審取つ置いつ、思案吹散る春風に、梅が香したひ鶯の、囀る聲に法華きやうも、既に暮れぬと告げぬらん。「ハ、刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た。いか様鳥でさへ

法華經と囀るに、身のせはしさに取紛れ、念佛もろくく〜に得申さぬ、ア、勿體ない〜。申し母者人、如才やごんせぬぞや、必ず呵つて下さるな」と、位牌に向ひ合掌し、在すがごとき孝行を、感ずる天の加護やがて、深き恵みもありぬべし。一心不亂他念なく、打鳴したるりんの音に、さそはれ歸る稚子の、目もとしをく〜なき母と、しらで焦るよ子心に、聞覚えてや拾ひ取る、小石つみては噯様と、したふ涙の雨やさめ、草葉に落ちておのづから、手向の水の哀なる、賽の河原を目前に見やる六助こらへかね、其儘かけ下り抱き上げ、「ヲ、尤ぢやく〜、尤ぢやはよい。どうぞ逢はしてやりたさに、何所ぢやと問へどわからは知れず、勿論預けさしやつた人は、只一言も得いはぬ最期。スリヤ何國の誰が盼かは知らねど、いたいいけにしをらしう、伯父様々々と廻すもの、憎まうとて是が憎まれうか。可愛やく〜」「コレ伯父様、かゝ様はなせござらぬ。かゝ様ほしい、かゝ様なう」と泣叫ぶ。「コレ其様に親を戀ひこがれて、煩ひやなどしてくれなよ。ひよつと死んだら今の様に、さいの河原で石の數、一重積んでは父をしたひ、二重積んでは母親を、尋ねこがれて六道の、地藏菩薩に取りすがり、父よ母よと泣くといやいおれも二人の親に離れ、女房もなければ子供同然、ほんに親に逢はれる程ならば、さいの河原は未だ事、八萬地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢ひたいもの。何辨へない心から、逢ひたがる

のは無理ぢやない、チ、道理ぢやく可愛や」と、抱しめく聲立てて、男泣にぞ歎きしが、漸涙ふり拂ひ、「ア、悪い孤殿、おれまでをそよなかして泣かした程にの、サアくさつぱりと機嫌を直して、ソレ昨日買うてやつた疣太鼓、それを叩いて遊ばしやれ。おれが守してやりませう」「イヤく太鼓いやぢや。おりやねむたい、かゝ様と寝たいわいなう、寝させてほしい」と稚子の、わやくも頑是なき寝入。「ホ、コリヤもう寝入つたさうな。ハテ子供といふ者は、とんと罪のない佛様ではあるはいの。ドレ伯父が寝させてやらうか」と、俱にふしどの草筵。折節竹の音も冴えて、吹暮しなる虚無僧の、宿求めんと籠に寄り、「ム、爰に干してある此四身は、慥に覺ある小袖」と、取らんとするを後から、こりや盗人めと二三人、掴みかゝるを寄せ付けず、振廻したる尺八の、たけた手利にふうくども、眉間肩先腕骨脊骨、ぶちのめされてちりぐに、皆我先と逆歸る。六助内より屹度目を付け、「見れば賣僧の賣虚無僧、よつ程味をやりをつた」と、詰る詞を聞咎め、「ナニ賣虚無僧の賣僧とは」「ハテ控に違つた身の廻りといひ、第一宗門の姿で、喧嘩口論ならぬ筈。又常人が理不盡をいひかけても、随分如法に濟ませよとは、本山からの戒でないか。其上尺八の本手は嘘かす、今時流行雑な手を嘘き歩くからは、贗者というたが誤りか。山陵はして居れど、夫程の事は知つて居る。何とでござんす梵論字」と、

詞に一癖さる者と、見て取るこなたも笠脱捨て、「チ、其返答して聞けん」と、すつと入るより替筒に、仕込みし短刀拔打を、ひらりとかはししつかと取り、「フ、、、ちよつと見るから女とは、悟つた故に咎めて見たが、敵と云はると覺はないぞ」「ヤ覺ないとは卑怯なやつ、杉坂の邊りにて、五十有餘の侍を手につけ、路銀は勿論妹が、忘れがたみの稚子まで、奪ひ取つた山賊め。赦しはせじ」と振りほどき、するどき切先無刀の六助、抜けつ潛りつあしらふ手練、遁さじものと付廻す、屏風の内より「伯母様か」と、かけ出る稚子見て悔り、不審ながらも小脇に引抱き、心赦さず身構へたり。「コレ伯父様、伯母様が来てぢや、太鼓叩いて見せていなう」「チチ合點ぢやく、後にく」「イヤ今ぢや、早うく」と頑是ない、まはせば廻る子可愛がり、持遊箱を引寄せて、「ソレ今鳴すぞ。コレ聞かしやれや。廿三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めが二三人、五十計な侍を、切るやら突くやらなぶり殺し、見るに見かねて片端からのめらせ、介抱すれど物も得いはず、其子を指差して拜んだばかりが、つくり往生。目前敵の盗人めら、踏殺して谷へ蹴込み、連れて戻つて其子に問へど差別はなし、そこで思ひ付いたあの著物、門口に干して置いたは、其子の所縁を知らう爲、心が早う届いたか、現在の伯母御に渡せばこつちも安堵。ようまあ尋ねてござんしたの」と、悦ぶ體に偽りなき、眞實見ゆれど

猶も根を押し、「しかと其詞に違ひないか」「イヤ何が怖うて偽りいはう、くどい尋ねにや及ばぬ事」「シテこなさんの名は何といふ」「チ、六助と云ひまする」「ヤア何と」「サア毛谷村の六助といふ山賤でござんす」「ヤア、すりや八重垣流の達人と、音に聞えた六助様か」「エ、と鞠れて取落す、子は狼狽へて逃込むとも、知らず構はず六助を、うつかり眺め、見とれ居る。「今の様に云うても疑ひ晴れず、やつぱり儕を敵にするか」「エ、わつけもない、何の家來の一人や二人、どうなとしたがよいはいな」と、前に寄添ひ後に立ち、「テモマアあつぱれよい殿御、マア何よりか落付いた。イヤまだ落付かれぬ事があるはいの。イヤ申し、女房さんがござりまするかえ」「イヤ子細あつて女房は持ちませぬ」「ありやせまいがな、無いかえく、チ、嬉しやく、それでほんまに落付いた。コレいなあ、お前の女房はわたしぢやぞえ、サアく女房ぢやく」と、かきたくる程今までも、逢ひたう思つた重荷があり、三衣袋も茶袋に、仕て見たがりの水仕わざ、袈裟も襷とかけ徳利、酒もあけうし夕飯の、拵せうと釜の下、薪のしめり燃えかぬる、火ふき竹はと尺八を、取違へてはをかしがり、獨御機嫌六助は、承知ない儀のふり賣を、持餘したかむつと顔、「とんと譯が知れぬ。けふ程けふな日はない。見ず知らずのわる達が、イヤ親にならうの噂ぢやのと、押入女房の手引した、あの子もめつたに油断はならぬ。全體こなたは

マア誰ぢや」と、尋ねにはつと心付き、俄に行儀改めて、いふべき事も跡や先、「常々とも様のおつしやるには、豊前の國毛谷村の六助といふ者こそ、劔術勝れし器量の若者、行末はそちと妻合せ、吉岡の家を相續させんと、音信通じ置きたるぞと、仰を守る此年月、廿の上を越しながら眉を其儘いかな事、鐵漿も含まぬ恥かしさ、推量なされて下さんせ」「スリヤそこもとは吉岡一味齋殿の」「ハイ、娘の園でござります」「コレハしたり」と手を取つて、無理に上座へ押直し、「先何か差置き、お尋ね申したいは御親父一味齋殿、御健勝で今にお勤なさるよか、御老體の事なれば、自然のお勞れにて、若し御病氣など發りはせぬかと、寢ても覺ても心ならぬは是れ一つ」と、問はれて園は涙ぐみ、「申すもあへない事ながら、おいとしやとよ様は、隣國周防の山口といふ所でな」「ヤ、何が何と、どうなされた」「口惜しややみく」と、欺し討たれてはかない御最期」「イヤア、シテく、其相手は町人土民でよもあるまい。假名は何と何國の誰」「同じ家中に名を得たる、劔術師範の京極内匠」「シテ此豊前へ來られしは、敵の在所は當國と、知つてか但し知らずにか」「サア所々方々と身をやつし、いふにいはいはれぬ憂き艱難、尋ね捜せど敵の行方、けふが日までも知れませぬはいな」「ホイ、はつ」とばかりにどうと坐し、拳を握り悔み泣。園は取分け悲しさを、やる瀬なみだのくどき言、「ほんに浮世といひながら、身に憂き

事のかくばかり、重るものか父上の、敵を願ふ門出に、可愛や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔死、跡に見捨てて古郷を、出づるもちりぐはなれぐ、在家を捜す其内に、悲しや妹も劍の難。父上のみかそもやそも、二人三人があぢきない、刃の霜と消え残る、母とわたしが憂き苦勞、つらい悲しい恥しい、なりも形もいとひなく、雨露雪の深山路や、野末に荒るよ一つ家に、若しや隠れて居ようかと、人なき道に日を暮し、さまよひ歩く親と子が、便りない身の上もなき、便りの人に廻り逢ひ、わたしが心の奥底を、明かすは二世の我夫、必見捨てて下さんすな、可愛と思つて給はれ」と、あまへ歎きて伏ししづむ、悲歎の涙六助も、かゝる憂には猶更に、思ひ忘れぬ一昔、「彦山の麓にて、目馴れぬ老翁に見えしが、高良の神の使なりと、兵法印可の一卷を下されし、其老翁こそ吉岡殿と、察せし事は彼卷の、奥にありく御姓名、書添へられしはこなたの事。夫婦となつて吉岡の、家名相續致せよと、六助ごときつたなき藝、傳へ聞かれて有りがたや、神の使と偽つて、印可を與へ其上に、汝に勝つべき者あらば、それに隨ひ身を修め、未長久に榮えよと、教訓ありしは後々まで、我慢を押ゆる御情、喩へん方もなき大恩、肉にしみ骨に通つて忘れず、母だに見送る上からは、尋ね登つて恩を謝し、師の御顔をにししと、拜せんものと思ひしも、皆むだ事となつたるか。エ、残念や悔しやな。せめての形見

師の片われ、あら懐かしや」とお園を拜し、飛走る涙はらくらく、腸をたつ思ひにて、慕ひ歎くぞ不便なる。時に障子のうちしはぶき、「ホ、ヲ師匠をしたふ誠こそ、遙に届き冥途より、閻浮に歸る一味齋、對面せん」と聞ゆれば、思ひがけなくお園が胸り、「ヤアさうおつしやるは母様か」と、嬉しさとつかは押開く、内につこと以前の老女、柔和の面皺の波、うちかけ著なし稚子の、手を引連れて立出づるを、見るよりはつと飛びしさり、師の後室とは、夢いささか、存せぬ事とて最前は、無骨のあしらひ無禮の段、偏に御免下されかし」と誤り入つてぞ平伏す。「イヤなう、さつきに逢うた其時は、掣殿とも姑とも、互に知らねば他人も同然、今こそ親身泣き寄りし、親子が爲には鐵の、立て通したる娘が操、不便と思ひ睦じう、夫婦になつて下さらば、本望とぐるに疑ひも、なき我夫の此魂、掣引出に」と差出せば、「ハ、ハ、ハ、こは有りがたき師の形見、辭退申さず頂戴せん」と、押戴きし獻々の、盃三々くどからず、古ねた生娘けふよりは、手折らせ初むる花嫁御、母も悦ぶ其所へ、「爰ぢやく」と袖仲間、遠慮なき骸戸板にのせ、どやくと昇込んで、「コレ六助殿聞かしやませ、二十三日の事であつたがよ、此斧右衛門のおばとが見えぬとて、仲間中が手分をしての」「ヲ、テヤ、何が所々方々を尋ね歩き、やうくと杉坂の土橋の下で見付けた所がよ、此様なおかひこ絹を引ばらせ、むごく殺

して有りましたよ。敵が取つてやりたけれど、うらどもでは何として」登「サ、、、そこで頼むは六助殿」と、いふにかけ下り死骸の傍、立寄つてとつくと見、「ム、すりや此死骸はそちが母か、アノ是が」フンと眉に皺、思案の體に袖仲間、「コリヤ斧右衛門、しめり伏さずと頼みやれ」と、引起されて泣ぢやくり、「アイ、皆のおいやる通りぢやよ、敵を取つて下さませ。アア死なしやるはしか其晝間、鹽梅よう出来た自慢の團子、棚からころり其身もころり、手でこねたとてこねるものか。何ほう袖が親ぢやとて、斯しやき張つた枝骨は、おろさど桶へ這入るまい。這入りともない死出の山、覺束なかるなう婆様、婆様々々」と呼ぶこ鳥、笥に響き泣く涙、落込む谷に水かさの、いとど増りて見えぬらん。始終とつくと聞きすまし、「チ、氣遣ひするな、今の間に敵はおれが取つてやる。其死骸大事にして、内へいんで香花取れ。サア早う連れて行け、早うく」と六助が、詞を勢に斧右衛門、「ア、其様にいうて下さるのが、婆様のためにはお寺様の御引導。ナウ皆の衆」チ、テヤ、あの人がア、いはりや、ちつとも氣遣ひなき顔を、笑顔に直し歸りける。跡に六助無念の顔色、「扱は袖が母をたらし込み、儕が親と偽つて、孝行ごかしに六助を、深い處へやりをつたな。へエ思へばく腹立や。卑怯未練の微塵彈正、おのれ此儘置くべきか」と、胸も張りさく怒りの齒がみ、庭の青石三尺ばかり、思はず踏

込む金剛力。「イヤコレ聲殿待たしやれや、こなたの腹を立てさつしやる相手の苗字は微塵とや」「いかにも、己が流儀を其儘に、氏となしたる微塵彈正」「ナニ其流儀の名が微塵とな、シテ其者の年輩は」「三十二三至極の骨柄、面體白く目の内沓え、左の眉に一つの黒痣、慥にありあり左の肘、二の腕かけて刀疵」「扱こそなア、同じ家中といひながら、お園といひ此母も、見知らぬ敵の人相書、妹に尋ね其砌、書かせ置いたる此姿繪、まだ其上に妹が、死骸の傍に有りしとて、小栗栖村にて友平が、後の證據と渡したる、此臍の緒の書付に、永祿九年の生れとある、月日を繰れば卅四の、人相といひ年の比、割符の合うたは尋ぬる敵、親の敵菊が仇、恨を晴すは今此時」「嬉しや娘片時も早う」「母様用意」と勇立つ、「ア、コレく二人共にマア待つた。慥にそれと知れたれば、六助が爲にも師匠の仇。コレ氣遣せまい敵は討たす、ガ真劍當てぬ其先に、木太刀で試合の意趣返し、ぶつてくぶちのめし、申請けての敵討。お袋、女房、いざ一所に」と取出す、破れ上下手傳うて、母は腰板あてがふ紐、お園が取つてしつかりと、結び合うたる妹背の縁。「コレ伯父様、ほんにも敵討たしてや」「チ、出かした、賢い、強いなア。どりや行かうか」と云ふより早く、ひらりと庭へ一足飛。「コレく聲殿、輕き相手と侮つて、必不覺を取るまいぞ」「さうともく欺すに手なし、油断をされなこちの人」「ム、、、何

さ何さ氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて、負けてやつたる蠅蟲め。謀り取つたる五百石、抱へられたも我情、却つて足を繋ぎしは、もつけの幸ひ塞翁が、うまう出合うた妻姑、恨は俱に六助も、天地に慙ぢる義の一字、鬼神とて京極内匠、我見る目には一つまみ。しかし御知行戴くうちは、殿の御家人討ち得がたし。試合を願ひ勝つた上、直に仇討御免の訴訟、元首押へ討たさす」と、實も尖き魂を見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若者なり。お園は猶も勇立ち、咲亂れたる紅梅の、花の一枝折持つて、「ナウく我夫、梶原源太景季は、平家の陣に切入つて、譽を揚げし簾の梅、是は敵の京極に、勝色見する兄花の、可愛男へ「壽」と、いひつゝいだし付きたさも、親に遠慮の手をもちく。母も同じく椿の一枝、「本望とけた其上で、直に八千代の玉椿、かはらぬ色の花聲殿、イザ」と打連れ立出づる、三人が中に彌三松は、ほんそう小倉の領内へ、勇みすよんで出でて行く。

第十

豊國や、小倉に威名立浪の館には、頓て異國に出陣の、支度せはしき一家中、弓に矢をはけ鐵砲を、磨き立てたる書院先、大坪軍八堀口會平太、お目出た酒の高話、「ナント會平太殿、かね

かね廣言吐きし毛谷村の六助野郎、憎さも憎しと存じたが、昨日の立合何か子供をなぶる様に打ちするた彈正殿、恐れ入つた儀ぢやござらぬか」「成程々々、あの様な手者をお抱へなされたは第一殿のお仕合、又そこを存じて執持致した貴殿と某、あつばれな忠義でござる」と、話しの腰を折りからに、姿もけふぞ大國の、君に師範の勿體顔、立出づる微塵彈正、ほろ酔機嫌の千鳥足、「コレハ先生、存じの外の大酒でござるな」「イヤモ御前において悦びの御酒宴、何が若侍が取廻し、そこへも頂戴こゝへもと、さりとはくこまり入りましたが、雨中の徒然、思はぬ大酒。ア、藝が身を責めまする。ハ、、、」「成程仰の通り、殿様にも殊ない御悦び、我我とても大慶至極。此度の異國征伐、日本無雙の其元なれば、あつばれ高名手柄を顯はし、久吉公の御感状にお預りなさるゝは今の事、扱々お羨しき儀でござる」と、おもねる詞に打點頭き、「成程々々、六十餘州に群る大名、我一欲しがる此彈正、お抱へあつた立浪殿は、御運の強いと申すもの、各方も異國の戰場、譽を取らずは望次第、拙者がきつと受合ひ申した」と、自慢手譽の鼻高々。時に玄關騒ぎ立ち、取次の侍あわたしく、「毛谷村六助、彈正様と試合の願ひ、取次を頼み参りし所、叶はぬ由を申せども、無體に込み入る氣相ゆる、先お知らせ」と訴ふれば、「ナニ六助めが先生と、押して試合を望むとな。一旦甲乙別れし上、無法の願ひ叶はぬ

叶はぬ、門外へ追出せ。異議に及ばず打ちするよ。早くく、「承る」と引返す、程なく人音騒がしく、是はと見やる庭先へ、こけ込む奴口々に、「下れく」と制すれど、耳にもかけず揉手して、「ハイお願ひの者でござります、お取次頼みます」と、白洲へ通れば兩人聲かけ、「ヤア狼藉なり無法者、下れく、下りをらう」「イヤ私は訴訟の者、下れとあるはこなさん方」と、片手掴みの狗投、打付けほり付け寄付けねば、恐れて皆々尻込す。「ヤア狼藉者下りをらう」と、切刃廻せばぐつとせき立ち、「イヤコレ彈正殿、エ、逢ひたかつたはいのく。何にもくどくどいふにや及ばぬ、今一度誠の立合、サアくくく用意召され」とせりかくるを、大坪軍八、「コリヤく、慮外者めが。御師範たる彈正殿、昨日の勝負にこりもせず、恥を知らぬ山猿め、此願ひはお取上ない。早く立てく」と、師匠最原の倍押しに、彈正はしたり顔、「六助われや何しに來たやい、重ねて口を利かぬ様、しやつ頬に木太刀の極印、見る度毎に身の毛がよだつて、か様の願ひは致さぬ筈。エ、何か今大身と成つた身どもゆるゑ、膏藥代にもならうかと、根が賤しい根性から、心得違ひのもがり思案か。夫ならばさうといへ、少しばかりの合力は致してくれる程に、門前に控へをれ。エ、むさくろしいざまをして、立合々々と身の程知らぬうじ蟲め、身が目通りに叶はぬ。早く立て」「スリヤ立合はなりません。立合の願ひ叶はずば、こなた

が大切にさつしやつた母御を爰へ出さつしやれ」「ヤ」「よもや是へは出されまいがな」「ヤイヤイくうぬはこりや氣が違つたな、イヤサ狂氣してをるな。コリヤ諸國を武者修行に遍歴する此彈正、母を連れてよいものか、身は獨身母はないはい」「ム、すりや母もなく立合もなりませぬな」「くどい。最前から身に覺もなき事ども、様々言ひかけひろぐ。五百石の御知行頂戴致し、御師範たる此彈正に向つて、過言を吐くは殿へ慮外致すも同然、悪くびこつくが否や首が飛ぶも知れぬぞよ。早く此場を立歸れ」「スリヤ立合の願ひは叶ひませぬな」「叶はぬ事ぢや早く立て」ハツとばかりに六助が、時の權威に詮方も、無念にたゆる怒りの涙、白砂を穿つばかりなり。襖のあなたにしはぶきの、聲諸共に入り来る、轟傳五右衛門、さすが名家の執權と、いはねどしるき其人柄。「ハアコレハく、傳五右衛門殿、今日は大領久吉公御入の由、御饗應の御指圖など、萬事御苦勞千萬でござる」「コレハ微塵氏、仰の如く今日は、假初ならぬ貴人の御入來、當家の面目此上なし」と、互の挨拶事終れば、六助白洲に手をつかへ、「傳五右衛門様へ申上げまする、何卒彈正殿と再度の立合、仰付けられ下さらば」「コリヤくく六助、儕合點の悪い、なぜ歸らぬ。魔利支天の化現といふとも、いなといはれぬ彈正殿、それ故にこそ御前より見分を遣され、お抱へあつた微塵氏、達て願へば其方が、身の爲にも宜しかるまい。お怒り

の出ぬ内、早く歸るが上分別」と、利害の詞押返し、「ハア、御尤ではござりまするが、是には深い様子の有る儀」「ヤア様子も絲瓜もいらぬ、所詮叶はぬ無益の願ひ、意地ばらば手は見せぬ。ソレ家來ども、きやつを御門へ引出せ」「畏つた」と下部ども、始にこりす立ちかよるを、右と左へ投退け蹴退け、居ながら働く手利の早業。兩人は猶せき立ち、「ヤア儕こりや手向ひか」「チ、手向の段ぢやござらぬ、國主を重んじ忍へてゐれば、付上りのした虻侍、ばたくせずと扣へてござれ。ヤイ彈正、儕よくも六助を謀つたな。老いたる母を育むためと、孝行ごかしの偽り表裏、親持ちし身はさうこそと、義によつて勝を譲り、負けてやつた昨日の勝負。母といひしは民家の老女、後難を思ひ切殺したであらうがな。かよる姦賊、師範杯とはお家の恥辱、サア是へ出て勝負せい。斯くいひ出す上からは、取持顔のへろく武士、幾人あつても苦には致さぬ、木太刀の相伴御勝手次第」と、白洲へどつさり引きまくる、袴の裾も破れ小口。彈正はえせ笑ひ、「傳五右衛門殿お聞きなされ。イヤハヤ様々のよまひ言、あやつは狂氣致してをりまする」「いか様是は仰の通り、取りのほしてをると見えます。併し只今申すを承れば、何とやら其元が、彼をお頼みなされたと、取所もない事なれども、爰に一つの氣の毒がござるは、微塵彈正六助を恐れ、再度の試合辭退せしと、下々に沙汰有つては、いよく殿の御恥辱、

立歸つて申さぬ様、息の根止めて遣はされい」「何様はや、其息の根の止めやうは、斯うト打出す小柄の手裏劍、透さぬ六助、「コリヤ何するのぢや。いらざる轉合取置いて、尋常に勝負さつしやれ」「イヤナニ彈正殿、鎧刀の一分とやら、コリヤ少し味をやりました。ガ貴殿には何として、叶はぬ事は知れてござれど、ほんの心のかしのなれば、立合と申すは慮外、御指南なされて遣はされい。ソレ誰か有る、木太刀の用意」と、いやといはれぬ詞の打太刀、請流されぬ手詰の勝負。彈正は困り顔、「アイヤ物でござる、御覽のごとく事の外大酒いたし、甚醜酌仕る。其上お眼鏡を以て相濟んだる拙者が手の内、再び立合致しなば、御前の眼力暗し杯と、批判あつては甚心外、何とおのくどう致さう」「成程先生のおつしやる通り、コリヤよしになされたがよくござらう」「止めませうかく、ア、さりとては迷惑千萬」と、主人思ひは空鞘の、安大小は鎧から、剥けかよるこそ笑止なる。「アイヤ其儀は苦しうござらぬ。幾度にても彼めが得心いたす程、打ちするて遣はさるゝが其元の御名の譽、則ち殿にも御満足。御酒はいか程參つても、六助風情が何の及びませう。幸の折からなれば、此傳五右衛門も御手練拜見致したい。御苦勞ながら只一手、ひらに先生々々」と、そやし立てられふしようく、わざとよろめき庭へ下り立ち、「コリヤ六助、相手になるは易けれど、酒興の某、モ今日にも限らぬ事。コ

リヤコリヤ、サ、合點か。合點がいたらそこ立て」と、いひつよつてだまし打、鯉口四五寸、「イヤめつたに油断は仕らぬ」と、取つたる腕首突放し、一眼二心互の身構へ、ヤア〜とかけ聲
 尖く打込むしなへ、入違へて丁と受け、拂うて引けば又付込み、上段下段右劍左劍、音はとんと
 とん轟が、眼を配る互の太刀筋、かた唾を呑んだる軍八會平太、秘術を盡せど彈正が、受太刀
 狂ひ崩るゝ五體。六助いらつて疊みかけ、脊骨腰骨りう〜。南無三寶」と兩人が、六助
 目かけ駈けよるを、「さしつたり」と呼吸の常身、右と左へ倒れ伏す。轟聲かけ、「ホ、ヲ勝負
 は見えた毛谷村六助、日頃の手練あつぱれ〜。シテ立合ばかりの願ひであるまい、吉岡一味
 齋が後家娘かくまふ義心、助太刀して彈正を討たさんとの心の底は、傳五右衛門承致して罷
 りある」「ハ、ア御存じの上は申すに及ばず、子細有つて一味齋が、縁にながる此六助、敵
 討の御願ひ」と、聞くより彈正思案を極め、「いかにも、一味齋の老ほれ親仁、高慢顔がむやく
 しさ、飛道具にてふち殺した。敵とねらふやつばらは、何人でも返り討、既に妹娘のお菊めも、
 身が心に隨はぬ故、須磨の浦で寂滅させた。六助、うぬも縁者とあらば遁れぬ所、覺悟ひろけ」と
 と切付くる。心得六助腰刀、抜合してはつしと受け、「扱は妹お菊を殺せしもうぬが業とな。
 エ、重々の極悪人、生捕にして母女房に敵討の勝負さす、觀念せよ」と切結ぶ、刃の光は稻

妻の、影かさそふや降りしきる、雨の足取入亂れ、打合ふ刃音諸共に、何とかしけん六助が、
 刀はほつきと折れ散つたり。ソレと投げやる轟が、覺の業物取るより早く、抜放して丁ど受け、
 「ハテ心得ぬ。師匠より譲りの一腰、折れしは不思議」と怪しみながら、又打合す白刃と白刃、
 二打三打合す間も、同じく打折る微塵が手の内。けしとむ所を拜打、さしつたりと傍なる飛石、
 苦もなく取つて受けたる強勢、轟ハ、ア奇妙々々。曹孟徳が青虹の寶劍にひとしく、白刃を打
 折りし彈正が所持の刀、夕陽を尅して雨を呼び、焼刃に顯す虹の形、數千の蛙鳴叫ぶは、ハ、
 ハ、實まこと小田の重寶、蛙丸の劍の威徳。いかなる名作名劍も、此劍に合はす時は、忽ち折
 るよと聞傳へしが、不思議を眼前見し事よ」と詞は膽にこたゆる彈正、引取る刃に付け入る六
 助、鐔元しつかと、ホ、ム、すりやお尋ねの蛙丸、是を所持する微塵彈正」轟ホ、ヲ問ふまでも
 なく謀反の殘黨。春永亡び給ひし後、明智が手へ渡りし名劍、隠し持つたる微塵彈正、おのれ
 と顯はす喜怒哀骨は、明智が血脈受継ぐ證跡、何と違ひはあるまいかと、星をさいたる明智の
 眼力、神力加はる六助が、程よくもぎ取る蛙丸、傳五右衛門に差出せば、「ホ、ヲ六助出かし
 た。最早遁れぬ微塵彈正、尋常に覺悟せい」「ホ、さすがの轟よく見出した。推察の通り、父が
 無念を散ぜん爲、立浪家へ入込みしは、久吉に近寄つて仇を復せん我が大望。斯く顯はれし上

からは、彈正が死物狂ひ、館の奴原撫切」と、眼配つて突立つたり。かねて用意やしたりけん、組子の大勢得物引つさけ追取巻く。轟聲かけ、「ヤア〜者ども、大切なる國家の科人、廣庭へ追出し、取逆さぬ様搦取れ」ハツと一度に組子ども、遁さぬ行らぬとひしめいたり。一ヤアちよこさいな蚊蜻蛉めら、此世の暇をくれんず」と、切立て〜手を碎き、奥庭さして追うて行く。跡に六助兩手を突き、「蛙丸の名劔はからず御手に入る上は、此寸功に敵討御免なし下されよ」と、餘儀なき願ひに傳五右衛門、「尤なる訴訟なれども、彈正は大切なる科人、土民の手へは渡しがたし。元來主人春時殿、懇望の汝なれども、高良明神の告により、勝りし者に仕へん望。幸かな今日大領お成なれば、御上覽を願ひ、諸大名の御内に於て名ある勇者を片家に立て、角力の勝負は神慮に任せ主取せよ。蛙丸を奪ひ返せし功を以て、敵討は請合たり。いかに〜」と轟が、始終を計る取さばき。六助ぞく〜小踊りし、「面白しく〜望む所の主君定め、畏り奉る」と、卽座の領掌、「此身の願ひ、本望遂ぐるは今の間」と、悦び勇む折こそあれ、久吉公の御入と、のよめく聲、「アレ六助、仙桃花咲く時來れり、直様用意」と勵す内、心得小姓が白臺に、積む巻絹の勝色を、しやんとしめたる取りまはし、一ふり振出す古木の松、兩腕兩足踏みならず、あつばれお相撲伊達男、野見の宿彌の昔にも、をさ〜劣らぬ關相撲。漸く氣の

付く堀口大坪、うろ〜眼に前後を忘れ、切つてかゝるを傳五右衛門、かはす間抜く間蟬の、二人は四つに朱の浪、打つて捨てたる手の内に、六ハ、あつばれお見事。併し此兩人をお手討になされては、「イヤサちつとも苦しうない、彈正に荷擔人せし人非人、蛙丸の切味、敵討の血祭よし。早く御前へ土俵入」と、清むる刀化粧紙、四本柱の御家老に、つれて御前へ三重出でにける。數年の積惡身を責めて、立浪の廣庭に、多勢を相手に微塵彈正、一流立つるさしもの働き、捕人もあぐんで見えたる所へ、春時の下知を請け、駈付くる轟傳五右衛門、「ヤア彈正、謀反の殘黨其罪遁れず、轟が搦取る、腕を廻せ」と、十手振上げ詰寄つたり。「ホウ誰彼の相手は嫌はぬ、冥途の道連イザ來い」と、又も二人が挑合ふ。四方を圍む組子の人數、暫く時をうつす内、一もくさんに砂煙、馳せきたる使番、「扱も六助、御前において相撲の勝負、第一番に田中の舊臣井富三郎、取付く間もなくそつ首落し、二番は兩國笹部野九郎、只一剋に刃飛ばされ、赤面せき立つ三ばん手、盛尾の郎黨別所貞宗、力を盡せど稀代の六助、一聲叫べば土俵の外、投付けられて入り替る、片岡、宮田、郡の一統、家中に勝れし勇士ども、息をも繼がせず立合へど、或は矢筈肩透かし、あふりむさう無雙の神力、二十六番つゞけ投、皆六助が勝相撲」と申し捨ててぞ引かへす。「いさぎよし〜。相撲終らば敵討御赦免は必定、繩目の恥辱を

受けんより、武士の冥加と覺悟せよ、彈正何と」といはせも果てず、「ヤア敵討も絲瓜もいらぬ、刃向ふやつ原ぶち放し、久吉の猿冠者め、素頭取つて父の孝養、邪魔せずと立去れ」と、ひるまぬ我慢轟が、ソレと指圖に組子の面々、巻いて捕らんとつく棒刺股、請け流し切拂ひ、爰を先途と働きける。「つゞいての勝相撲毛谷村六助く、三十七番の割付の主、急いで立合へ立合へ」と、行司が詞、溜より、佐藤の家臣萬團右衛門、六尺ゆたかの太男、力も嘸としら綾の、下帶しつかと御前に一禮、ゆらりくと土俵の内、勝ちほこつたる六助が、劣らぬ大兵顔見合せ、じつと互に居合腰、程よく行司が引く團扇、ヤツとたける團右衛門、押出さんとコリヤコリヤく、神變ふしぎの六助が、どつこい動かぬ兩足は、金輪際より生抜くごとく、肘からみを振りほどき、えいとかけ聲諸共に、地ひどき打つたる團右衛門、砂にまぶれて負相撲、各どつとざよめきて、しばらく鳴も止まざりける。溜の内より聲高く、「飛入々々々」と、自身名乗つて出でたるは、小兵ながらも福島、御内に名を得し桂市兵衛、拾うてくれんと力瘤、五尺にたらぬ身あんばい、健氣にも又不敵なり。六助につこと打笑ひ、構へゆたかに待ちかくる。合圖の團扇引くやいな、遅しと四つ手に引組んだり。雪降り積る松が根に、からみ付いたる桂が手だれ、惣身の力を腕に入れ、大の男をしめ付けく、持出さんと釣上ぐる。シヤも

のものしと六助が、勵す一聲雷の、落つるがごとく押付くれば、さしもの市兵衛たちも得ず、尻居にとつさり六助へ、又も舉けたる團扇の譽れ。割付も三十八番目、待ちまうけたる三浦又藏、實も加藤正清の、股肱と目立つて見えにけり。御棧敷を始とし、諸侯の面々息を詰め、これや結びの關相撲と、鳴をしづめて見物あり。さつと引取る團扇の風、力くらべ根くらべ、秘術を盡していども合ふ。神明擁護の金剛力、さしもの又藏持て餘し、危く見ゆれば主人正清、棧敷より聲高く、「ヤアく、六助、最早勝負も是一番、敵討の願ひ叶ふ大切なる此相撲、氣を付けよ」と教への詞、ハツと六助正清の、智仁の一言磐石に、押さるよ如くたぢく、心も折るよ片膝は、三世の縁の禮儀始、上下一度に響むる聲、感心の聲一時に、浪の打來る如くなり。正清俱に感じ入り、「數番の働きた六助が勇猛、今よりしては我良臣、貴田孫兵衛と改名し、忠勤怠る事なかれ」と、稱美の詞に有りがた涙、溜りに控へし母お幸、お園諸共かけ付けて、「お手柄お手柄。此上は敵討御免のお願、恨を晴すは今の間」と、詞少く取形も、行儀正しき武家育。六助も御前に向ひ、「是こそ一味齋が後家娘、微塵彈正と敵討の勝負、仰付けられ下さる様」と恐れ入つて言上す。「ホ、ヲ其儀は氣遣ふ事なかれ。尋ね求むる蛙丸、手に入りしも汝が働き、轟傳五右衛門に申付け、敵討の用意せさせ置きたれば、かしこへおもむき本望とけよ。則ち君の

御帶刀汝へ下し置かるゝ間、有りがたく頂戴せよ」と、吹擧の御太刀取次にて、孫兵衛へ賜はりける。「時の面目身の冥加、生々世々の御厚恩、首尾よく本望とけ終り、唐高麗まで御供して、馬前に報じ奉らん」と、三拜九拜拜領の、刀は名作名大將、「いそふれやつ」と正清の、詞の加勢百萬騎、勇みすよんで 三重かけりゆく。

第十一

既に角氈の勝負も、をさまる番數譽むる聲、磯打つ浪と動搖し、山河にとどろき傳五右衛門、仁義の吹擧に敵討、御免なりしと聞傳へ、馳せあつまつたる見物ども、さしも廣野に充滿し、錐を立つべき鬮もなし。斯くて毛谷村六助は、相撲の場所より改名し、貴田孫兵衛と勇有つて、猛き骨柄美を盡す、小ささが萬卒を、覆ふ器量の弓取風、いうくくと出で來れば、「ソリヤ毛谷村の柴荊が、出世した振見よく」と、前後を取巻く人群集、孫兵衛きつと見廻し、「ヤア騒しよ方々、今日は大切の敵討、斯く群つては勝負の妨、片寄れ開け」と、制すれども、向ふは猛勢一人の、聲届かねば「まつかせ」と、竝みしけりたる大木の、松を両手に一ゆすり、ぐつと引きぬき横倒し、行馬としたる怪力に、舌を震はし諸見物、一度にしんとしづまれり。一期

の晴と義に勇む、吉岡が妻娘、彌三松が手とりくゝに、行馬の内へ入來り、「コレく孫兵衛殿、イヤナウ聲殿、上々様のお蔭により、數日の仇をけふの今、晴らすと思へば嬉しして、胸つほらしい。此嬉しさを見やうより、一味齋殿ながらへてござるなら、何此上あらうぞ」と、いふにお園も打しをれ、「わたしとてもこがれたる、殿御には逢ひ敵にも、廻り逢うたる嬉しさも、お菊が無事で居やるなら」「チイナウ、可愛や是が形見かと、孫が手を取り抱きしめ、顔見合せて親と子が、不覺の涙にかきくれて、さめく泣くこそ哀れなる。孫兵衛は聲勵まし、「ヤア二人共見苦しき繰言、早く敵の首ひつさけ、未來におはす先生の、位牌に手向くる氣はなきか」と、制する詞に兩人が、實もと涙押拂ひ、人目を羞づる紅の、絹引しごいて花襟、用意とりくゝなる所へ、久吉公より檢使として、加藤虎之助正清、先を拂つて入り來れば、今ぞ籠中のとり圍まれ、猶も我慢の彈正が、歩むものつさのさばり頬、跡に引添ふ傳五右衛門、行馬の内へ入る折から、息を切つて衣川彌三郎、加藤が前に兩手を突き、「拙者儀は郡音成が家來、衣川彌三郎と申す者、一味齋が妻子の者、今日當所に仇討をいたす條、主人音成承り、御厚情を謝せん爲、一つは又見届のため名代として、只今參上仕る」と、申述べれば母娘、殿の上意の今更に、又も涙の嬉し泣。正清は威儀を正し、「コレハく御丁寧の御使者、人も多

きに彌三郎殿、差越されしは豫てより、餘所ならぬ敵と聞き、音成公の御心配、感じ入つて候」と、情の道も疎からぬ、實に眞柴家の良臣なり。正清重ねて轟に打向ひ、「雙方支度調はど、早く勝負」と嚴重なる、指圖にはつと傳五右衛門、立上つて聲高く、「早く雙方立合ふべし、互に疲るゝ其時は、太鼓をもつて知らさん間、未練の働なき様に」と、下知につつ立つ微塵彈正、「成上りの蟻を後楯、此彈正を討たんとは不敵至極の女原、不便なれども返り討、覺悟ひろけ」と悪言を、聞いてにつこと母お幸、「ヤ武士に似合はぬ無益の多言、初太刀母が」と立向へば、彈正も悪びれず、水をたよへし器の傍、じりよくと歩み寄り、呑むより早く打破る茶碗。長刀かい込み、「いかに京極、汝が非道の手にかより、空しく果てたる一味齋が妻お幸、サア尋常に勝負々々」と身がまへたり。「ヤア娑婆ふさけの雲雀婆、雲雀親父が跡追うて、地獄へ行け」と腰刀、抜く手も見せず切付くるを、透さず受止め勿返すを、直に付け入る虚々實々、秘術を盡して戦へども、するどき刃にお幸が受身、危く見ゆれば合圖の太鼓、「どつこい」下部が押しわくれば、跡へかはつて新手のお園、小太刀をふつて立向ふ。後に孫兵衛聲をかけ、「せいでは事を仕損ずる、心をしづめて戦へ」と、力を付くる夫の前、諸萬人より晴の場と、胸を定めて聲勵まし、「日外都小栗栖にて、それと名乗らで迹失せたる、臆病武士の京極内匠、親の

敵妹が敵、一時にはらす恨の刃、首さし延べて請取れ」と、いふより早く打つ刀、丁ど受止め嘲笑ひ、「ハ、、、、引さかれめが味をやる、勿體ながら京極が、お手おろさるゝ太刀の下、亡くなりをらう」と一打に、微塵流儀の手を盡す、落花狼藉八重垣の、流儀流水澱みなき、手練の切先ちやうくく、時を移して 三重打合うたり。かすり手負へども強氣の内匠、まつしぐらに切りまくれば、思はず跡へたじろくお園、あはやと見る内孫兵衛が、刃の電光袈裟切に、すつはと肩先彈正が、うんとおめるを起しも立てず、「夫の敵」「父の仇」「かゝ様の敵、覺えたか」と、孫も俱々すたくくに、切つて悦ぶ母娘、とどめをさしもの馬印、大旗小旗日に映じ、風になびきて翻翻たり。正清いさんで「手柄々々、アノ行列は大将の、御出船と相見ゆる。衣川殿は國元へ、二人の女を同道あれ。轟氏は跡の儀を、よろしく計らひ召さるべし。イヤ孫兵衛は本陣へ」と、急ぐは加藤虎之助、威勢は千里萬里にも、類ひまれなる大勇猛、すぐに三韓征伐の、出陣急ぐ勇み足。天の征する悪人は、亡びて小氣味よし岡が、運に勝つたる敵討、誓ひの助太刀太刀風に、治まりなびく天が下、恵みにそだつ竹の葉の、榮えさかふる君が代は、萬萬歳とぞ祝ひける。

彦山權現誓助劍終

補增 生寫朝顏話

大内館の段

名妓紅弗は李衛公が英雄をしたひ、玉翠蓮は張君瑞が才情をあはれむ。淫奔癡情と笑ふ人ありといへども、立通したる操の誠、美玉の瑕を隠しつべし。爰に鎮西の探題大内多々良之助義興公、祖父の家督を請繼いで、防長豊筑の太守とし、武威西國に輝けり。去頃より義興は、鎌倉に在番あり、本國には後室園生の方、女ながらも一國の、政事を預る才智發明。折しも禁廷の詔使玉橋の局、はるく周防へ下向あれば、饗應の役目山岡立蕃之允、邪惡を包む衣服の綺羅、相役駒澤了庵は、一家中の儒學の師範、四角四面に四方髪、道を守りて相詰める。玉橋の局威儀を正し、「此頃中宮御所御不例につき、先格の通り、當家の先祖林聖太子より相傳はる、天竺著婆が所持の藥王樹を、御病床に掛置かせられたしとて、暫時借用の御使を蒙り、局司玉橋、勅書を賜はつて下向せり。拜見の上、寶を早々差上げられて然るべし」とぞ述べらる。後室はつと手をつかへ、「家督義興は鎌倉在番の留守中なれども、等閑ならぬ中宮様

「立蕃様」「コリヤ、シイ、音高し赤星運八。シテく首尾は何とく」「ハ、アお氣遣ひなされ
 ますな、寶藏へ忍び込み、盗取つたる靈符の尊像、イザお請取り」と差出せば、「チ、出かいた
 出かいた。ソレ當座の褒美」と懐中より取出し、渡せば取つて押しいたとき、「チエ、忝い。
 此上は豫て申合せし通り、鎌倉へ立越え、何かの様子は跡より申上げん」「チ、いかにも、岩代多
 喜太と心を合せ、大内之助を馬鹿者に仕立上げ、將軍家より咎の來るやう、殊に駒澤了庵めが甥
 とやら、近々諫言に下る様子、必ずともぬかりなき様、コリヤかうく」とさよやけば、「ハ、
 ア委細承知仕る。然らば此儘拙者はお暇」「チ、家中の者に見付けられぬ様、忍べく」に運
 八は、うなづきく氣をくばり、表をさして忍び行く。立蕃は御寶懐中へ、隠す間もなく奥
 の方、「御立ちざふ」と口々に、呼はる聲に鉄乗物、御庭先へかきすゆれば、早御立と館の後
 室園生の方、玄蕃もろともひれ伏せば、うやくしくも藥玉樹を、袖にさよけて玉橋は、しづ
 しづ一間を立出づる。園生の方しとやかに手をつかへ、「お局様には遠路の下向、御苦勞に存
 じます」と、敬ふ詞に局玉橋、「チ、見送り大儀。いづれもさらば」と、ゆふばえの胸の善惡
 しら綾も、雲に色ます緋の袴、かよけて移る乗物を、早かき出す仕丁ども、列を揃へて出でて
 行く。

松原の段

周防の國山口は、北に嶮岨の山をひかへ、南は名高き大灘にて、多々羅の濱へ打ち寄する、波
 風あらし小松原、夜も早初夜にちかづけど、やどりさだめぬ野伏の、孤引かぶりあたりをなが
 め、「つくづく思へば我身ほど、淺ましい者があらうか。大内の家老駒澤了庵が一子とも云はれ
 し身が、我まよゆゑに親の勘當。何卒一つの功を立て、それを土産に歸參の願ひと、思ふに任
 せぬ身の不仕合せ、非人とまで落ちぶれて、心を盡すかひもなき、淺ましいの身の上」と、先非
 を悔み居たりける。折しも聞ゆる數多の人音、何事やらんと孤引かつぎ、木蔭へこそは身をひ
 そむ。程なく來る供廻り、乗物立つれば此方より、覆面したる怪しの男、眼燈てらしちかぐ
 とあゆみ寄り、「お頭首尾は」と呼はる聲に、乗物より立ち出づる白髪の老女、あたりを眺め、
 「チ、山蛭か、氣遣ひしやるな首尾は極上」「チ、出來たく。おりやもどうあると案じ迎ひに來
 やんしたが、それ聞いて落付いた。片時も早う摩耶が嶽へ」「ア、コリヤ、壁に耳ひそかにく。
 シテ元船は」「多々羅の入江に繫いで置きやんした」「そんならそちは、手下共を連立つて、先
 へ待つて居や。何かの符牒は元船でせう」「チ、合點でござんす。シテお頭は」「チ、そろく

と跡から行く。早うく」に心得て、白丁著ながら烏帽子のゆがみ、亂るゝ國の鼠ども、長柄長刀振りかたけ、元船さして伴ひ行く。跡に老女はしたり顔、寶取出し打眺め、「大内の重寶藥王樹、首尾よく我手に入るからは、大望成就疑ひなし。此上は大内を亡し、大友の家石引興し、其虚によつてあはよくば、一天四海を、ホ、ホ、ホ、ホ、」と、獨笑してしづくくと、入江をさして行く形振、怪しくも又不敵なり。木陰をそつと以前の非人、立出でて跡打眺め、「ム、ハテ怪しき老女が今の振舞。ム、まさしく國家を望む曲者、住家は慥に摩耶が嶽。ハテナ」と、心でうなづき菰脱捨て、見えがくれにぞしたひ行く。

宇治の段

武士の、八十宇治川と名に流れ、底の濁りも夏川や、水の縁も涼しげに、風吹き渡る宇治橋の、往來も繁き五月頃、螢狩にと來る人の、足休めやら氣はうじの、花香はこゝか一森や、貴賤老若差別なく、たぎる茶釜の湯氣に立つ、名さへ出花の通圓が、店は人絶なかりけり。かゝる所へ立派の武士、出家伴ひ小吹筒破子肩に打ちかけ是も又、床几をかりの足休め、腰打ちかけて膝ならべ、「何と月心老、拙者國元より京師へ上り、儒學修行の内、ふと嵐山にて御意得しが縁

となり、今では竹馬の友同然、あれこれと誘ひに預り、初めて見物する宇治の里、山の姿川の流れ、又格別のながめでござる」「チ、宮城氏の仰の通り、袖ふり合ふも他生の縁、イヤモ心隔てず御申しあるゆゑ、愚僧も風雅の友を得て祝著に存ずる。是より平等院へ參詣し、頼政の古跡扇の芝を見せ申さん。しかしかう見晴した景色を題にして、一首所望」と乞ひければ、「ハ、ア拙者もをこがましなから、ふと浮んだる一首の口ずさみ、腰折ながら御添削」と、用意の短冊取出し、矢立の筆のはしり書さらくと書認め、出せば月心手に取上げ、「エ、ナニ諸人の行きかふ橋の通路は、肌涼しき風や吹くらん。ハ、ア面白き此夷曲歌、古今の本歌を取りしは秀作々々。實も涼しき風薫る、夏なき宇治の夕けしき、類あらじ」と打吟じ、かたへに置けばさつと吹く、風にまかれて短冊は、ひらりくとひらめきつと、川邊の船へちり込みけり。月心驚き、「ヤ是はしたり、折角の秀逸を風に取りられたり。慥にアノ船、取返さん」と、立つを宮城は引きとどめ、「ハテ戯れの口號、御捨置き下されう」と、止むる折しも御座船の、内ぞ床しき葎障子、透間洩れ來る三味の音、ウタしたひきて慕ひよるべの螢さへ、妹背かはらで逢ふ夜半を、重扇の風薫る、匂ひをしたふ蔦かづら、ながき契やつくも髪。「ハテやさしい調、聲といひ曲といひ、藝能器量も揃ひし美人ならん。ア、惜むらくは傍に居て、聞かざる事の残念」

と、いふに月心打笑ひ、「ハ、ハ、ハ、日頃物堅い貴所も、アノ音聲には泥まれしな。ヤそれは格別先達ても申す通り、拙僧が和歌の友、秋月弓之助方へ貴所を在家させ申さんと、豫て咄し置きしが、先にも懇望貴所も承知、近々日を見て見合致させ申さん。イヤ是はしたり、大事の法用をはたと失念致した。ヤ無禮ながら拙僧は、是より直に興聖寺へ参り、後刻菊屋方にて御目にかゝるでござらう」然らば必ず旅宿にて相待ち申す。先それまでは「おさらば」と、互に契約月心は、寺をさしてぞ急ぎ行く。御座船は障子引明け、「申し、御寮人様、まだ暮果てぬ夕けしき、テモきれいなこと。チト三味線止めて御らうじませ」と、何心なく顔さし出す、舩に以前の短冊、乳人浅香は手に取上げ、「コレ御らうじませ、何所やらから短冊が船へちり込みました」と、渡せば深雪手にとり上げ、「諸人の行きかふ橋の通路は、はだへ涼しき風や吹くらん。ホンニやさしい此つらね、墨つぎといひ手跡といひ、誰が口ずさみぞ床しや」と、見やる陸には阿曾治郎、思はず見合す顔と顔、互に見とれる目の中に、通ふ心はいは橋の、渡してほしき思ひなり。かゝる折から川邊傳ひ、浪人めきし二人の酔どれ、何の會釋のあらけなく、船へ飛込み深雪が傍、尻引きまくり大あくら。浅香ははつと深雪を圍ひ、「どなたかは存じませぬが、女ばかりの此船へ、何の御用でござります」「エ、何の用とはさりととは不粹。今橋向ひの

料理屋で一杯きめこみ、橋の上から聞いて居れば、どうもいへぬ諷ひかたぢや。酒の間をしてやらうと、思ひ思うて押付客、お娘の盃いたどかう」と、すつかりいへば浅香は興覺め、「ムム女ばかりとあなどつての狼藉か、不肖ながら藝州岸戸の家老、秋月弓之助が息女の遊山、妨げしやると爲にならぬぞ」と、威せばいつかなせよら笑ひ、「ハ、ハ、ハ、弓之助でも鎗之助でも、カウ乗込んだらすめではないなぬ、四の五の云はずと娘と酒もり、いやとぬかせばどいつもこいつも、縛り上げて念佛講ぢや」と弱みへ付込む傍若無人、憎しとみやぎ阿曾次郎、船へ立入り詞を和らけ、「コレハくお若い衆、酒機嫌でされ事か。此船は拙者が預りの女中客、得しれぬ他人と酒宴は致させにくし。餘の船へござれよ」と、いへば二人は目をむき出し、「ム、女ばかりとアノ幻妻がぬかしたに、われが預りの客とは、エ、そんな古手な事で行くのぢやないぞよ。悪くしやれるとコリヤかう」と、いひさま掴む胸づくし、逆手に取つてぐつと捻上げ、「ヤア云はせて置けば様々の狼藉、手向ひ致さば酒のかはり、水喰はぬ内早く歸れ」と、右と左にもんどり打たせ、脊骨も折れよと刀の胸打、りう／＼はつしと打ちのめせば、「アイタ、タ、イヤモ痛入つたるおもてなし、最早御免」と四つ這ひに、岡へやう／＼這上り、跡をも見ずして逃歸る。つゞいて追はんとゆく袂、深雪は押し止め、「ア、コレ申し、どなたかは存じませぬ

が、危い所をあなたのお蔭、何とお禮を申さうやら。ノウ浅香「ハイ、イヤモ此禮がちよつきりちよつとは申されませぬ。幸ひ有り合ふお盃、何はなくとも酒一つ」といふを押へて、「ア、イヤ、必お構ひ下されな。拙者も待合はす人がござれば、早お暇」と立つを浅香は引きとどめ、「女ばかりの此船中、又どの様な狼藉者がこうも知れませぬ。ながうとは申しませぬ、船頭の戻るまで」「ム、左様に仰せらるゝを、おして歸るも心なき業、然らば船頭の歸るまで」「アレ申し、居てやらうとおつしやるわいな。ソレ御寮人様、ちやつと其お盃を」といへば、深雪は顔打赤め、「思ふに任せぬ船の内、お慮外ながらお盃を、戴きましたらいかばかり、お嬉しう」との其跡は、いはでの山の岩つよじ、あたりまばゆき風情なり。「コレハ、痛入つたる御挨拶。先刻承れば岸戸家の御家老、秋月弓之助殿の御息女とや、我等宮城阿曾次郎と申す者、お馴染の爲頂戴」と、呑んでさいたる盃に、深雪は嬉しさ押しいたとき、云ひたい事も人目の關、しんきらしけに浅香をば、見やれば呑込む通りもの、「チ、此船頭衆は遅い事、娼衆と連立つて、そこら見物がてら見て参りませう。阿曾次郎様とやら、しばしの間御頼み申します。ソレ御寮人様、随分と心残りのない様に、ナ心一ぱい御馳走を。ドレ一はしり」と氣を通し、皆皆引連れ上り行く。阿曾次郎はつきほなく、見廻す傍に我が短冊。「ム、コリヤ先刻風に取り

れし拙者が腰折、スリヤ此お船へ」「アイ、ちつて来たのが縁のはし、お慮もじながら此扇に、何なりとちよつと一筆」「コレハ、結構なお扇子、ム、金地に朝顔、テ見事。およばぬ我等が拙筆に書汚すは、ぶしつけながら」と有合ふ硯、上代やうの走書、墨の色香に引かざるよ、心深雪は嬉しけに、押戴いて打詠め、「ホンニ御手と云ひ唱歌と云ひ、かはゆらしい朝顔の歌、一生放さぬ私が守り」と、云ひつゝ其身も筆取り上げ、用意の短冊取出し、妻を戀歌のもしほ草、墨つぎ早く書認め、「おはもじながら」と指出せば、宮城も興じ手に取上げ、「ム、ナニ、戀ひ慕ふ、心通はず風もがな、人目隔つる君があたりへ。ム、スリヤ見る影もなき某を」「アイ、ふと見初めしが思ひの種、不便と申うて給はれ」と、じつと寄添ひ抱付き、直に障子をしめからむ、松に這ふてふ藤かづら、いかなる夢や結ぶらん。折からいきせき奴鹿内、彼方此方をうろうろ眼、「阿曾次郎様、阿曾次郎様ではごはりませぬか、國元より急御用」と、呼はる聲に阿曾次郎、はつと驚き深雪をば、なだめすかしてとつかはと、船より岸へかけ上り、「ヤア汝は留守を預けし鹿内、あわたどしく何事なるぞ」「サレバ、御本國より火急の御状」と、渡せば取つて封押切り、讀下して大きに驚き、「コリヤコレ伯父了庵より、家督を受継ぎ鎌倉へ下り、殿へ御諫言致しくれよとの儀。ハ、ア大恩ある伯父者人の頼み聞捨てがたし。コリヤ鹿内、其

方は先へ立歸り、旅宿を片付け發足の用意せよ。急げ〜」に「チイ〜、畏まつた」と達者も
の、宙をとんで引かへす。引きつゞいて阿會次郎、立歸らんとかけ出すを、「なうこれ待つて」
と、深ゆきは船より駈け上り、「コレ申し阿會次郎様、云ひ残した事も有り、せめて今宵は此船
に」と、取付き歎けば、「チ、尤、々さりながら、聞かると通り火急の御用、最前扇に認めし、朝
顔の唱歌を我と思ひ、廻りあふ時節を待たれよ。さらば」とばかり袖ふり切り、行かんとする
を猶とりすがり、「マア〜待つて」ととどむる折しも、淺香は船頭引連れて、川邊傳ひに戻り足、
かくと見るより押隔て、「コレ申し深雪様、淺からぬあなたのお情、御禮の足らぬはお道理なれ
ど、人の見る前又重ねて、御禮申す時節もあらう」「イ、ヤ申し阿會次郎様、主人の名は秋月弓之
助、必ず御出でを待ちまする」「ム、某宅は下川原、程遠からねば尋ね申さん」さらば〜
と船と陸、別れの涙かなしさに、見返る深雪を無理やりに、船へ伴ふ其所へ、「コリヤやらぬは」
と以前の悪者、あらはれ出でて阿會次郎が、右と左にむしやぶり付く。「シヤ面倒なと振りほ
どき、直にざんぶと水煙。船はもやひをとく〜と、漕出す船子妹と背の、遠ざかるこそ是非
もなき。

眞葛が原の段

我戀は松を時雨の染めかねてと、慈鎮和尚が言葉の種、眞葛が原の片邊り、風爐に常釜かけ床
几、茶代一服一錢が、店は風雅の捨所、丸山戻り色酒の、酔をさましに来る客の、中に目じゆ
んだ京羽二重、見えは作れど懐の、薄茶呑みみる茶筌、逆に立花桂庵とて、じより口のよ
う廻る、判官ごのみの辨慶醫者、しかつべらしく茶碗さし置き、「イヤコレお由、けふは壽貞尼
は何所へ赴かれた」「ハイ、お家様は大阪のお客で、正阿彌へ參られました」「ム、風の神ではな
うて正阿彌へ付けこまれたか」「ホ、、、、又桂庵様の久しい口合。おまへは又どこへお出でだ
へ」「イヤ下拙は八百八十軒の病家廻りを仕舞ひ、餘りほつとしたゆゑ、井筒で一世界、藝子ど
もにもりつぶされ、お輕ぢやないが酔さまし、風に吹かれに罷りこした。ソレハともあれ、此店
へ年の頃は三十一、色黒ででつくりと背の低いお醫者が、下拙を尋ねにはわせなんだか」「イ
イエそんなお方は見えませなんだ」「ハテナア、もう來さうなものぢやが。チ、向ふから來るが
さうぢや。イヤコレおよほ、アノ仁とチト内證の咄もあれば、そもじは暫らく勝手へ」「アイ
アイ合點でござんす、用が有るなら手を叩いて下さんせ」と、お由は勝手へ入りにける。「ハテサ

テ埒のあかぬ歩行やう」と、見やる向ふへ萩の祐仙。それと見るより、「オ、イ、祐仙様、先刻より白鷺が火事見るやうに、首長うして待つてゐるに、さりとては戀路に不精」といふに祐仙腰打かけ、「イヤモやつがれも心は急いたれど、よんどころなき朋友に出合ひ、端の寮の書畫の會、それから快々堂で下らぬ薄茶一服、やうく抜けてたつた今。何は扱置き、豫て尊公に頼んだ秋月弓之助の娘、仲人せうと尊公の請合、仕拵料の三十兩、ソレ相渡す」と、出せば受取り懐中し、「ハア慥に落手。先方にも承知なれど、爰に一つの難儀といふは、先方は武家方ゆゑ、醫者を聲にはとらぬ様子。元月心といふ出家が、宮城阿曾次郎といふ男を仲人せうと云入れ、大抵二親の注文には合うたが、下拙は彼の秋月へ立入するゆゑ、どうぞ阿曾次郎の人品國所を聞合はしてくれとの頼。コレ尊公の戀のかなふ前表なり」「シタリ」「然る所彼の阿曾次郎は、色白く厚鬢の當世男、尊公は總髮、此一條に下拙も色々心を碎き罷在るてや」「エ、それが何の心を碎く事。アノ娘ゆゑなら、元服はおろか坊主になつても苦しうない。自他とも仲人頼み入る」「ム、そんなら祇園邊の髮給床で急に元服」「チ、合點」と祐仙は、戀に上ずり氣もそごろ、床をさしてぞ走り行く。跡に桂庵思案顔、「マア三十兩は著服したが、もつときやつを磨りおろす妙計がありさうなもの」と、もくろむ折しも下女お由、鍋を片手に立出づれば、桂庵

目早く、「ム、およしえ、其鍋おれに賣つてくれまいか」「エ、めつさうな。これは内の菜鍋、しかし直打次第で賣りもせうが、何ほに買うてぢや」「ム、張込んで銀一に買をかい」「めつさうな」「そんなら貳朱々々」「イエ、くもそつと買うたく」「エ、そんならてんほの皮、壹歩々々」「ム、壹歩なら負けても上げう。が此鍋買うて何にさんす」「何にせうとも、細工は流々仕上を御らうじ」と、小柄を抜いて丸盆へ、穴のあく程鍋炭こそけ、手早く紙に押包み、「是でよしよし、サア一步。必ず此事他言無用。又外に頼む子細、高うは言はれぬ、コレかうく」と耳に口、「ム、そんなら其鍋炭をふりかけたら惚れたふり」「コリヤ聲高し、内に忍んでよい時分に、首尾よういたら又壹歩。ハテ何にもいふな」と兩人が、うなづきあうて内へ入る。そり立あたまの烏毛立ち、延びた鼻毛を拔出しの、鬚よりたらく油汗、いきせき戻る萩の祐仙、桂庵見るよりあふぎ立て、「イヤ似合ふたりく」とんと片岡我當生寫し、奇妙々々。シタガ、少しの難は鼻が獅子舞、目が下り目、是はつかりが玉に瑕」「ム、ひよつと彼のお娘が嫌ひはせまいか」「チットそこらはぬからぬ、下拙が家傳の惚藥、即爰に所持致す」「ナニそれが惚藥とな」「中。海に千年山に千年、三千年功を経しいもりの黒焼、ぱつくと振りかけると、小野の小町の様な堅造でも、するくべつたり惚れるが妙。併し代金は拾五兩、お望なら御手に入れませ

うか「イヤモお娘のほれるに違なくば、拾五兩が廿兩でも入用々々。卽是に十五兩」「ム、さ
らばさしあけのしたし物」と、鍋炭渡し金請取り、相圖のしはぶき咳ばらひ、それとおよしが
汲んで出る、目元の鹽茶さし出せば、祐仙は是幸ひ、惚薬の試みと、振りかけられておよしは
うつとり、「チ、いつの間によい殿におなりだへ、つんともうわしやあなたを我當かと思
うて、首筋もとからぞつとして、わたしや戀風引いたさうな」と、傍へ寄添ひ祐仙が、ふと股ふ
つつり。「アイタ、アイタ、、、エ、何とする」「エ、何ぢやいな、何とするとは下心の悪
い。目もとなら鼻付なら、どつこに一つ惚氣のある、あた好らしい」ともたれしは、達磨人形
にのら猫の、しなだれ付きし如くなり。祐仙は薬の利目と、一途に思ふ悦び顔、「テ妙薬も有
ればあるもの。終に女にかやうな事、臍の緒切つて覚えぬやつがれ」「エ、何ぢやいな、人には
つかり氣をもませ、薬の咄し聞きたうない。内太股がうぞついで、こたへられぬ」といだけ付
く。「是はあんまり利過ぎた。桂庵、頼む」と廻廻るを、やらじと追うて行くふごじり、にゆる
出しりに桂庵も、腹をかゝへて「ハ、、、ハ、、、ハ、、、」三重したひ行く。

岡崎の段

名にしおふ花の都の片ほとり、聖護院の町はづれ、風雅を好む一構、主は秋月弓之助、元は藝
州岸戸の功臣、暗き主君を諫めかね、仕を辭せし浪人の、身退きたる氣さんじは、作りそだつ
る朝顔の、世話に心を慰めける。妻の操は一問を立出で、「申し我夫、早朝より花のお世話、嘸
お氣が盡きませう、マアお休み」とたばこ盆、夫思ひの眞實心。「チ、奥、よく氣が付き申し
た、さらば一ぶく仕らう。何と奥、身が手作りの朝顔、見事ではおりないか」「さればいな、今
朝はいつよりも花がたんと咲きました、が申し此朝顔の花に付いて氣にかゝるは娘の深雪、も
う時分のきた者を、一人置くは病氣のもと、どうぞよい聲を取つて、早う初孫の顔見やうとは
思さぬか」「ハテそこに如才が有るものか。元身共は岸戸譜代の家臣なれど、當時の主君、お蘭
のかたといふ側室に迷ひ、其弟の蘆柄傳藏といふ匹夫を取立て高祿をあたへ、剩へお蘭の方の
すゝめによつて、我娘に傳藏を娶せよとの儀。系圖正しき娘深雪、匹夫下郎の成上り者を聲に
取るが胸悪く、亂邦には入らずといふ古語に従ひ、仕を辭退し浪人住居も、元はといへば娘が
不便さ。それゆゑあれ是と聲を聞合せしに、立入の醫者立花桂庵、似合の縁談申來りしゆゑ、
とくと筋目を聞糺せば、是も元は中國武家の生れ、名は宮城阿曾次郎とやら、人品は申すに及
ばず、萬能に達せしとの儀。それゆゑまづ客分に呼迎へる約束致いた。今日は吉日ゆゑ、桂庵

が彼の阿曾次郎を同道する筈。女どもに申付け掃除萬端云付け召され」と、語る夫の言の葉に、操も心落付いて、「ソレハマア目でたい事、それなればとうからさうとはおつしやらいで、私一人が物案じ。女どもや乳母も云付けて、髪のかざり小袖の色品、問談合もせにやならぬ」「チヲそれが肝心。身は圍にて薄茶一ぶく、お身も相伴しやれい」と、夫婦打連れ入りにけり。かくとしら齒の娘氣に、こがるよ人をくよくと、思ひつゞけし亂れ髪、過ぎにし宇治のあだゆめも、風に破れし戀衣、深雪は居間を立出でて、あたり見廻し獨言、「ホンニ任せぬ浮世とて、たまくと逢うた阿曾次郎様、心のたけを云ふ隙も、情ないはお國の迎ひ、周防とばかり行先の、當所知らねば文さへも、言傳やらん便なく、是程こがるよ心根を、直に云ひたい知らせたい。逢はれる傳はない事か」と、そのまよそこに打ちふして、聲も得上げず忍び泣、娘心ぞいぢらしき。始終うかどふ乳母淺香、納戸の口を立出でて、「コレ申し深ゆきさま、一昨日宇治より戻つてから、何やらしめんと思ひありけなお顔持、ちひさい時から育てた私、何の遠慮に及ぶもの、あかして云うて下されませ」と、眞實見えし言の葉に、深ゆきは涙押しかくし、「チ、乳母とした事が、何のそなたに隔心があるぞいなう。ありやうは螢狩に、ふつと見初めた、ア、イヤふつと風に當つてから、エ、モしんきでくならぬわいの」「チ、それは風を引か

しやんしたのである、しかも戀風といふおもい風を」「ヤアそんならそなた知つてゐるか」「チ、知らないで何としませうぞいの。楓にうすく聞いた上、おまへの居間に有つた扇、歌の唱歌は朝顔、手跡は宮城阿曾次郎殿」「エ、」「サ何と違ひはござんすまいがな。其阿曾次郎殿を戀ひこがれ、それゆゑの物案じと、私はとうから知つて居ます。ガ、コレ、お案じ遊ばすな、お前にいうて悦ばす事が有る」と、いふに深雪は傍に寄り、「ム、私に悦ばす事とはえ」「サア外でもない、けふおまへに聲様がござる筈、何と嬉しいかえ」「ヤアわしの聲とはソリヤ何人、わしやそんなこと聞きたうない、云ひ出してたもんな」と、ねち向くそぶりつくく見て、「ホ、、わけも聞かずにそりや何事、出入の醫者桂庵殿の仲人で、くる聲がねは宮城阿曾次郎殿」と、聞いて深雪は二度胸り、「ヤアく阿曾次郎さんがござんすとは、ソリヤほんのことかいなうく」「チ、何のわしが嘘いひませう。ガかういふ内も心がせく」「チ、それ、そんなら髪も結直し、小袖も相談。サアくサア來てたも」と手を引き立て、悦び勇み納戸口、のれんの内へぞ入りにける。かくて其日も晝過ぎて、隙行く駒のそれならで、岡崎の隠家を、尋ねて爰に來る人は、肩から爪の立花桂庵、似た山聲の祐仙を、「爰ぢや爰ぢや」と手招けば、鳥屋の戸あけてちやほどりの、米見付けたる風情にて、ぱつぱくと

ぞしやべりける。「ヤアだまれ、まいす者め。コリヤヤイ、うぬら武士を嘲弄にうせたか」と、刀
 押取りきめ付ければ、祐仙桂庵悔りはいまい、「ア、めつさうなく、全く左様な者ならず、ま
 がひなしの阿曾次郎」「ヤアぬかすな。うつけ者とは見て取れど、様子あらんと、窺ふそれがし。
 ヤア〜關助、こやつ摘み出せよ」と、呼はる聲にはつと答へ、走り出でたる奴關助、「ヤア
 ヤアさま〜の馬鹿者めら、きり〜立つて失せをらう、長居ひろがばぶち放す」と、刀の柄
 に手をかくれば、「コリヤたまらぬ」と祐仙桂庵、命から〜逆歸る。弓之助はにが笑ひ、「ハ
 ハ、ハ、ハテ扱々世にはうつけたやつも有れば有るもの、たわいなしめに懸つてはつと退屈。
 關助休みやれ。ドレ一休み」と立上れば、操も共にたばこ盆、提げて一間へ關助も、勝手へこそ
 は入りにけり。寝たたれの、髷のおくれは解きながら、もつると思ひくしく〜と、深雪がむね
 の亂れ髪、たれにいふべき方もなく、涙に袖もぬれ縁の朝顔の花打詠め、「どうした事のえに
 しやら、ふつと見初めた阿曾次郎さま、御國元から急用との、使は戀の障りの雲、晴間の星の
 たまく〜も、けふ逢はると思ひの外、待ちこがれたる甲斐もなく、あられもない知らぬ人。
 ほんに思へばあぢきない、暫し別れのかたみにと、書いてもらうた朝顔の、歌の唱歌も我袖に、
 涙の露のひる間なき、歎きせよとの歌占か。宇治の螢となるならば、あくがれ出でて夫の傍、

飛んで行きたい顔見たい」と、かたみの扇身に添へて、抱きしめ〜忍び泣、日影待つ間の朝
 顔の、雨にしをる〜風情なり。うしろに立聞くめのと淺香、それぞと察し立寄つて、「コレ申
 し深雪様、桂庵殿の龜忽ゆゑ、あはうらしい今の時宜、しんきなは道理々々。シタガお氣遣ひ
 遊ばすな、此淺香が奥様へお咄し申し、阿曾次郎殿をきつとお前にお添はし申します。くよく
 よ思つて病氣やなど出たら、親御様へ大きな不孝。氣をしゃんと取直して、縁と月日待つが
 肝心。マア〜奥へ」と諫められ、少しは心晴れかけし、袖の時雨の小止して、夕日てり添ふ
 蔦紅葉、顔あからめて入りにけり。折から表へあわたどしく、せきにせいてかけ来る武士、
 音なふ間もなくすつと入り、「弓之助殿〜、弓之助殿御在宿か」と呼はつて、尻居にどうと
 倒ると息切れ、何事やらんと弓之助、押取刀に走り出で、見れば覺えの古朋輩、ぬるみ汲みと
 り用意の氣付、口に含ませ氣轉の活、ム、とばかりに氣の付く若者、「ヤア弓之助殿」「ホ、瓜
 生主水が舍弟勇藏、あわたどしき體心得ず。子細はいかに、様子は何と」はつと勇藏氣を取直
 し、「されば候、國元には、お蘭の方の威光を假り、成上りの蘆柄傳藏、御前よきまよ下々へ
 過役をかけ、金銀を貪りしより事起り、御領内の民百姓、一揆を起し我一と、袖が浦の城廓
 へ、押寄せ〜追取巻き、無二無三に責立つる。さるによつて御家の騒動大方ならず、早大亂

に及ばん氣色、此騒動をしづめん者、弓之助より外になし、主君の後悔頼みの御狀、片時もはやく歸國あつて、賢慮を廻らしお鎮めあれ。我は此儘國元へ、心もせけば」と云捨てて、元來し道へ引かへす。弓之助は大いに驚き、狀押開き讀下し、「誠に殿の御自筆、先非を悔みし御頼の文體。ハ、ア勿體なし、主家の大亂見捨てん様なし。ヤア、女房娘も歸國の用意、關助參れ」の詞の下、はつと答へて駈出る奴、「お旦那、何の御用でござります」
 「チ、火急に國元より御召の御狀到來せり。今日中に家内を片付け、今夜すぐさま伏見まで發足せん。心得たるか」と云渡し、奥をさしてぞかけ入つたり。俄の歸國に周章混雜、氣もいらくとせき助が、何からせんと心のもんちやく。かくとも知らず阿會次郎、歸國の暇餘所ながら、深雪に一目あひの戸を、それともさすが開けかねしが、思ひ切つてそつと入り、「頼みませう」と音なへば、「エ此せはしいに何者ぢや」「イヤ宮城阿會次郎と申す者」と、半分聞かず、「ヤア又うせたか、大馬鹿者」とゆふ暮時、顔さへ見ずに突出し、戸を立て切りし人違へ。様子知らねば阿會次郎、いぶかしながら詮方なく、跡の歎きの種ぞとは、知らず知られず三重別れ行く。

明石船別れの段

わだつみの、浪の面てる月影も、明石の浦の泊り船、風待つ種につれづれを、慰めかねて阿會次郎、艦先に立出で月かけに、四方を見はらす氣晴しの、たばこの煙吹きなびく、船路の旅ぞ物淋し。そばにかよりし大船は、秋月弓之助が歸國の乗船、乗人も水主も船草臥、前後も知らぬ高野。娘深雪は只一人、目さへも合はぬ戀人を、思ひこがれてうつくしと、戀に心をつくし琴、せめて慰むよすがもと、かきならしたる糸しらべ。ウタ露のひぬ間の朝顔に、照す日かけのつれなきに、「テ合點の行かぬ。アノ諷は過ぎつる宇治の螢狩に、秋月の娘深雪が扇に某が、書いてあたへし朝顔の唱歌、聲さへ深雪に生寫し。ハテいぶかしさよ」と見上ぐれば、あなたも見下すかき立の、顔はまさしく、「深雪殿ではないか」「ヤア阿會次郎様、逢ひたかつた」と、我を忘れて乗りうつるを、抱きとりて口に手を當て、「聲が高い深雪殿、思ひもよらぬ今の對面、何故に此所に」「さればいな、宇治でお別れ申してより、モ片時忘れず泣暮す内、國元に騒動起り、父母共に俄の旅立。所詮逢ふ事叶はぬかと、何ほうかなしう思うたに、爰で逢うたは盡きせぬ縁、どうぞ此身を何國へも、連れて退いて給はれ」と、ひつたり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、放れがたなき風情なり。阿會次郎も心を察し、「チ、嬉しいそなたの志、忘れは置かぬさりながら、そなたを今連退いては、某が武士道立たず。殊に此度伯父の頼みにて

遁れぬ主用、猶もつて女を同道しがたき入譯、有る縁ならば添ふ時節も有らう。かうして居ては人の咎め、サアちやつと元の船へ乗つてたも」「エ、そりや聞えませぬ阿會次郎様、添はれる時節もあらうとは、當座遁れの捨詞、お氣に入らずは打明けて、包まずそれとてたべ。もしもおまへに添ふ事の、ならぬ時には淵川へ、此身をなけ死にます。ふたよび外の夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」とばかり水底へ、既に飛ばんと立上るを、あわて驚き抱きとめ、「コレ待つた、早まるまい」「イエ、放して殺して下さいませ」「ア、ぜひもなし。夫程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにマどうせられう。不義徒と世の人口、誇らばそれれ連れて退く。コレ盡未來まで女房ぢや」「エ、嬉しうござんす忝い。そんなら願ひを叶へて下さんすか」「ヲヲ武士の詞に二言はない。さりながら、此儘に連れて退けば親達の、もしや海川へも身を投げたかと、お歎きあらんは定の物。委しい様子をつい一筆」「ヲ、よういうて下さんした、私もさう思うて居ます。ガどうぞ料紙をかして下さんせ」「ヲ、心得し」と懐紙、腰をさぐつて、「南無三寶、そなたを抱止める拍子、海へ何やら落せし水音、旅矢立をはめてのけた、ア、どうしたらよからうぞ」「ヲ、夫なら待つて下さんせ、二親初め付々まで、旅草臥の寝入ばな、そつと元船へいんで、一筆書置してきませう」「ヲ、それよからう。ガ、コレ、必ず物音させて、親達の目

が覺めぬやう」「心得ました」と立上れば、阿會次郎は肩車、あなたの船へ乗移らす、音に目覺す船頭ども、「ヲ、地嵐が吹出した。碇を上げよ、帆を巻け」と、騒ぎ出せば、「なう悲しや」とあせる内、船は次第に遠ざかる。コハ何とせん、かとせんと、あせるはずみに阿會次郎が、船へ投込む扇の別れ、跡しら浪を隔ての船、つながぬ縁ぞ 三重是非もなき。

弓之助家舗の段

爰に藝州岸戸の家臣、秋月弓之助が一構、生得風流文武に秀で、人に勝れし武士の、都に蟄居しありけるが、國の亂れに召歸され、殿の仰を承り、事治りし其後は、昔に勝る歸り咲いと美々しくも榮えけり。家の接木の一人娘、深雪は思ふ其人に、たまくと逢ひし其甲斐もなみの明石の別れより、國へ歸りし其日より、只ぶらくと物思ひ、こしもとはした召連れて、一間の内より立出づれば、中に早枝がしやくり出で、「申し深雪様、此節しめくと、物思はしいお顔持、チト外でも見てお氣をお晴しなされませ」「ヲ、よういうてたもつた。さりながら、私が心のしんきさは、月雪花のながめにも、勝るいくせの物思ひ」過ぎし明石の浦浪の、うらめしい追風のかぜ、島がくれ行く戀人の、船をしぞ思ふ思ひをば、誰にいはうぞ語らうぞ。